蔵王町文化財調査報告書　第４集

車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか

平成18年３月

蔵 王 町 教 育 委 員 会

車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか

序　　文

蔵王町には、私たちの先祖が残した数多くの遺跡があります。これらは、豊かな自然環境の中、長い歴史を経て、いまに伝えられている貴重な文化遺産です。この先人の歴史や文化を愛護するとともに、後世に伝えていくことが私たちに課せられた責任であります。

さて、蔵王町の北東部に位置する円田盆地では、平成８年度に大規模なほ場整備事業が計画されました。盆地内には、古代の刈田郡衙に関係すると考えられる都遺跡や、中世の館跡である平沢要害など多くの遺跡があります。これらの遺跡については、保存協議を重ねながら、平成13年度より、工事によってやむをえず削平される部分を中心に発掘調査が始められました。

本書においてみなさまにご報告する遺跡は、平成17年度に調査を行った、車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡、原遺跡、上葉の木沢遺跡、中葉の木沢遺跡、磯ヶ坂遺跡です。車地蔵遺跡では、桃山時代から江戸時代にかけての有力者層の屋敷跡とみられる遺構群を発見しました。上葉の木沢遺跡では、縄文時代と考えられる陥し穴が発見され、円田盆地に居住した人々の生活の一端が明らかになりました。こうした成果が、広く皆様に活用され、地域の歴史解明の一助になれば幸いです。

最後になりましたが、遺跡保存へのご理解と発掘調査にあたって多大なご協力をいただきました関係機関各位、また発掘作業に当たられました皆様に厚く御礼申し上げます。

平成18年３月

蔵王町教育委員会
教育長　山　田　　紘

例　　言

1．本書は、経営体育成基盤整備事業円田２期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）に伴う、原遺跡、車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡、上葉の木沢遺跡、中葉の木沢遺跡の事前調査と、磯ヶ坂遺跡の確認調査の報告書である。

2．調査の主体は蔵王町教育委員会であり、宮城県教育委員会が協力した。

3．測量原点の座標値は、日本測地系に基づく平面直角座標第Ⅹ系による。各遺跡の測量基準点は、第１表に示した。なお、方位は座標北を表している。

4．土色の記述は、『新版標準土色帳』（小山・竹原1973）を参照した。

5．本書で示した遺跡の位置図は、国土交通省国土地理院発行の１／25000「村田」を複製して作成したものである。

6．本書で使用した遺構略号は以下の通りである。

SB：掘立柱建物跡、SA：柱列、SX：水場遺構、SD：溝跡、SF：小溝状遺構群、SK：土壙、P：ピット

7．車地蔵遺跡と原遺跡の遺構番号については、遺構の種類を問わず通し番号で、鍛冶屋敷遺跡と上葉の木沢遺跡の遺構番号については、遺構の種類ごとにそれぞれ番号を付与している。

8．遺物実測図では、以下のような場合にトーンを貼って区別した。

土師器黒色処理　炭化物付着　被熱痕跡

9．資料整理・報告書作成に際して、以下の方々からご指導・ご助言・ご協力を賜った（五十音順・敬称略）。

金子健一（(財）瀬戸市埋蔵文化財センター）、佐藤公保（椎信高校）、関根達人（弘前大学）、武部真木（(財）愛知県埋蔵文化財センター）、千葉孝弥（多賀城市埋蔵文化財センター）、本田泰貴（東北陶磁文化館）

10．本書の作成は、宮城県教育庁文化財保護課が担当し、調査者全員の協議を経て、村上裕次が執筆、編集した。

11．発掘調査に伴う出土遺物および写真等の調査記録資料は、蔵王町教育委員会が保管している。

目　　次

序文
例言
目次
調査要項

第Ⅰ章　調査にいたる経緯・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1

第Ⅱ章　遺跡の概要・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　1．遺跡の位置と地理的環境・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
　2．周辺の遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2

第Ⅲ章　調査の経過と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・4

第Ⅳ章　車地蔵遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・7
　1．基本層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　2．発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　　(1)　1区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　　(2)　2区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・9
　　(3)　3区・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・12
　3．考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
　　(1)　遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・28
　　(2)　遺構・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・30
　4．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・32
　　写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・35

第Ⅴ章　鍛冶屋敷遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・43
　1．基本層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・44
　2．発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・45
　3．考察・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
　　(1)　遺物と遺構の年代・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
　　(2)　遺構の性格・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・62
　4．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・63
　　写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・65

第Ⅵ章　原遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 73
１．基本層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
２．発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 74
３．土壙について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 76
写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 81

第Ⅶ章　上葉の木沢遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 83
１．基本層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 84
２．発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
３．土壙について・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 85
４．ＳＫ２土壙出土の土師器・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 87
５．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 88
写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 91

第Ⅷ章　磯ヶ坂遺跡・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 93
１．調査の経過と方法・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
２．基本層位・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
３．発見された遺構と遺物・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 94
４．まとめ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 96
写真図版・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 97

引用・参考文献
報告書抄録

調 査 要 項

遺 跡 名：車地蔵遺跡　（宮城県遺跡地名表登載番号：05198　遺跡記号：UG）
鍛冶屋敷遺跡　（宮城県遺跡地名表登載番号：05114　遺跡記号：UN）
原遺跡　（宮城県遺跡地名表登載番号：05111　遺跡記号：UF）
上葉の木沢遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：05143　遺跡記号：UH）
中葉の木沢遺跡（宮城県遺跡地名表登載番号：05144　遺跡記号：UJ）
磯ヶ坂遺跡　（宮城県遺跡地名表登載番号：05189）

所 在 地：宮城県刈田郡蔵王町小村崎

調査原因：経営体育成基盤整備事業円田2期地区区画整理工事（県営ほ場整備事業）

調査主体：蔵王町教育委員会

調査担当：蔵王町教育委員会

調査協力：宮城県教育庁文化財保護課

調査期間：平成17（2005）年5月9日～7月20日、10月17日～12月2日

調査面積：車地蔵遺跡　2500㎡
鍛冶屋敷遺跡　4700㎡
原遺跡　1400㎡
上葉の木沢遺跡　1700㎡
中葉の木沢遺跡　650㎡
磯ヶ坂遺跡　1165㎡

調 査 員：菊地逸夫・千葉直樹・村上裕次（宮城県教育委員会）、佐藤洋一・庄子善昭・小泉博明・斎藤史佳・庄子裕美・一條隼（蔵王町教育委員会）

調査協力：宮城県大河原地方振興事務所　蔵王町土地改良区

第Ⅰ章　調査にいたる経緯

今回の調査は、蔵王町円田2期地区におけるほ場整備事業に関わるものである。

円田地区を対象としたほ場整備事業計画のうち、円田１期地区については、昭和63年度に計画、協議され、同年から平成2年度にかけて事業区域内に位置する遺跡の範囲確認調査および事前調査が実施された（宮城県教育委員会1989・1990・1991・1992）。円田２期地区の事業計画は、平成８年度に提出され、平成12年度に事業年次計画が策定された。事業区域には、円田盆地内の複数の遺跡が含まれることから、宮城県教育委員会、蔵王町教育委員会と宮城県大河原産業振興事務所が対応について協議した。平成13年度には、町教育委員会が、事業予定地内の分布調査とそれに隣接する中葉の木沢遺跡の確認調査を、県教育委員会は、事業予定地の南側に位置する窪田遺跡ほか3遺跡の確認調査を（宮城県教育委員会2002）、平成14年度には、県教育委員会と蔵王町教育委員会が、事業予定地の北側にある十郎田遺跡ほか12遺跡の確認調査を実施した（宮城県教育委員会2003b）。

平成14年度の確認調査では、ほ場整備が行われる全域を対象に、遺物の分布が確認された地域を中心にして、幅約２ｍのトレンチを333箇所、計11669㎡を調査した。車地蔵遺跡は、確認調査により新たに登録された遺跡で、遺跡北側で方形の溝跡やピット多数が検出された。鍛冶屋敷遺跡と上葉の木沢遺跡では、遺跡西側の丘陵縁辺で掘立柱建物跡、土壙、ピットが検出された。両遺跡とも、丘陵の頂部とその周辺のみとされた従来の遺跡範囲が、湿地との境界まで西に大きく広がることが明らかとなった。原遺跡では、遺跡の南東側で水田跡、溝跡、土壙、ピットが検出され、遺跡の範囲は丘陵部分のみではなく湿地の範囲を含んで南に大きく広がることが判明した。中葉の木沢遺跡においては、掘立柱建物跡、溝跡、ピット多数が検出され、遺跡の範囲が北に広がることが確認された。

こうした調査結果をふまえて、再度事業者と協議を行い、遺構の存在する部分については基本的に盛土による現状保存を行い、計画田面が遺構面よりも下がる切土部分と、道路・水路建設に伴い遺構面が掘削される部分については、事前調査を行うこととなった。事前調査が必要と判断された13遺跡については、平成17年度から平成21年度の５ヵ年にわたる事前調査計画が策定された。本年度はその1年目に当たり、車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡、原遺跡、上葉の木沢遺跡、中葉の木沢遺跡の計５遺跡を対象とした。

また、円田2期地区予定地内で、町道小村崎中央線以北の磯ヶ坂地区の遺構確認調査も併せて実施した。

第Ⅱ章　遺跡の概要

1．遺跡の位置と地理的環境

本書で報告する車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡、原遺跡、上葉の木沢遺跡、中葉の木沢遺跡は、宮城県刈田郡蔵王町大字小村崎に所在する。遺跡は、蔵王町役場の北東約4.0kmの地点で、円田盆地の北東側に位置している（第１図）。

円田盆地は、蔵王山系の東麓に延びる高館丘陵によって南辺を除く三方を囲まれている。盆地の北辺から西辺にかけては高木丘陵、東辺は愛宕山丘陵と呼称され、両者は高館丘陵の一部をなしている。高木丘陵は、低平な丘陵地形が発達し、丘陵末端は盆地中央部までなだらかに延びる。盆地の縁辺には、藪川などの中小河川により中・下位の河岸段丘が多く形成されている。愛宕山丘陵は、小規模な丘陵地であり、急な傾斜で盆地底部に接続する。丘陵の末端には、小規模の沢に開析された比高の大きい舌状の高まりが形成される。

車地蔵遺跡、鍛冶屋敷遺跡、上葉の木沢遺跡、中葉の木沢遺跡は愛宕山丘陵の縁辺に位置する。

車地蔵遺跡は、北東から延びる丘陵の斜面上に立地し、南北200m、東西180mの遺跡の広がりをもつ。今回の調査範囲は遺跡の南西隅で、調査区内の地形は、丘陵の西縁（１・2区）と、丘陵頂部から湿地へ向けての緩斜面（３区）である。

鍛冶屋敷遺跡は、東から張り出す舌状の丘陵の頂部と、その丘陵の西端で湿地との境に立地し、南北350m、東西500mの広がりをもつ。今回の調査範囲は遺跡の西端で、調査区内の地形は、丘陵の西縁（２区北、４トレンチ）と、丘陵が湿地と接続する緩斜面上（１区、２区中央・東・西、１～３・５トレンチ）である。

上葉の木沢遺跡も鍛冶屋敷遺跡と同様に、東から張り出す舌状丘陵の頂部とその西端に立地し、南北250m、東西500mの広がりがある。調査範囲は遺跡の西端で、調査区内の地形は、丘陵の西端で尾根の鞍部（３区）と、その南北で湿地との境の緩斜面（１・３区）である。

中葉の木沢遺跡は、東から延びる丘陵の西端に立地し、東西、南北とも200mの範囲に広がりをもつ。今回の調査範囲は北西隅で、調査区内の地形は、湿地に接続する丘陵の緩斜面である。

原遺跡は、北辺の高木丘陵が南に延びる低平な丘陵上に立地し、南北470m、東西400mの広がりをもつ。今回調査した範囲は遺跡の南東部で、調査区内の地形は、南に延びる丘陵の東縁部分（１・３区）とその東に広がる湿地部分（３区）である。

確認調査を行った磯ヶ坂遺跡は、北辺の高木丘陵と南に延びる小規模な丘陵との接続部分に位置し、遺跡の立地する丘陵は、南からの大きな沢により、舌状の丘陵になっている。

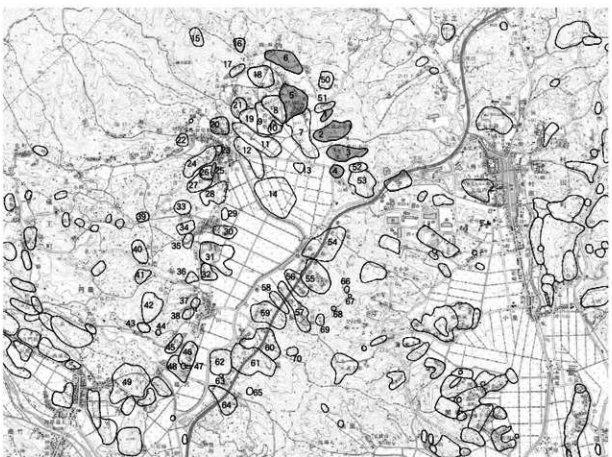
2．周辺の遺跡

円田盆地周辺には、旧石器時代から近世に至るまで数多くの遺跡が確認されている。

後期旧石器時代の遺跡には盆地北西部に位置し、柳葉形尖頭器が出土した前戸内遺跡（19）がある。

縄文時代の遺跡は、高木丘陵上に多く分布し、縄文時代中期の集落跡としては鞘堂山遺跡、湯坂山遺跡、曲木遺跡などが知られている。窪田遺跡（12）、中組遺跡（30）、清水遺跡（36）、堀の内遺跡（37）、戸の内脇遺跡（48）では、陥し穴状土壙が検出された。

弥生時代の遺跡は、丘陵裾部を中心に多く認められる。高木丘陵の頂部に位置する上野遺跡（49）では、弥生時代中期の円田式の土器が多く採集されている。遺跡の密度は、円田盆地南側で高くなる。



No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代	No.	遺跡名	種別	時代
1	車地蔵遺跡	散布地	古代～近世	25	諏訪部横穴墓群	横穴墓	古墳	49	上野遺跡	散布地	縄文・弥生・古代
2	鍛冶屋敷遺跡	散布地	古代～近世	26	諏訪部城	城館跡	中世	50	清上遺跡	散布地	古代
3	上葉の木沢遺跡	散布地	縄文・古墳・古代	27	諏訪部遺跡	散布地	弥生・古墳	51	三の輪遺跡	散布地	古墳・古代
4	中葉の木沢遺跡	散布地	縄文・弥生・古代	28	小高遺跡	散布地・経塚	縄文・弥生・古代	52	山崎遺跡	散布地	縄文
5	原遺跡	水田跡・散布地	縄文・弥生・古代	29	堂の入遺跡	散布地	弥生・古代・中世	53	北割山遺跡	散布地	縄文・弥生
6	磯ヶ坂遺跡	散布地	縄文・古代	30	中組遺跡	散布地	縄文・弥生・古代～近世	54	赤鬼上遺跡	散布地	弥生・古代・中世
7	六角遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・古代	31	木宿前遺跡	散布地	縄文・弥生・古代・中世	55	大橋遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・古代
8	戸ノ内遺跡	集落跡	弥生・古代・中世	32	白山遺跡	散布地	弥生・古墳	56	屋木戸内遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・古代
9	西屋敷遺跡	集落跡・散布地	縄文・古墳～中世	33	大柿内遺跡	散布地	弥生	57	立目場遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳
10	西小屋館跡	城館跡	中世	34	北堤遺跡	散布地	縄文・弥生・古代	58	中沢B遺跡	散布地	弥生・古墳・古代
11	十郎田遺跡	集落跡	縄文・古墳・古代	35	沢遺跡	散布地	古代	59	中沢A遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳～中世
12	窪田遺跡	集落跡	縄文・古墳・古代	36	清水遺跡	散布地	弥生・古代	60	伊原沢下遺跡	散布地	古墳
13	新城館跡	集落跡・城館	古代・中世	37	堀の内遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・古代	61	塩沢北遺跡	集落跡	弥生・古墳・古代
14	都遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・古代	38	寺坂遺跡	散布地	古代	62	台遺跡	散布地・水田跡	弥生・古墳・古代～近世
15	兵衛館跡	館跡・散布地	縄文・古代・中世	39	新堂遺跡	散布地	縄文	63	西脇古墳	古墳	古墳
16	鹿野遺跡	散布地	古代	40	築館館跡	城館跡	中世	64	大山遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳
17	大久保遺跡	散布地	古代	41	鳥山遺跡	散布地	縄文・古代	65	中島敷古墳	古墳	古墳
18	後原遺跡	散布地	古代	42	花稲館跡	散布地	中世	66	夕向原1号墳	古墳	古墳
19	前戸内遺跡	集落跡・散布地	縄文・古代	43	見継遺跡	散布地	縄文	67	夕向原2号墳	古墳	古墳
20	平沢館跡	城館跡	中世	44	八幡山古墳群	古墳	古墳	68	古峯神社古墳	古墳	古墳
21	稲荷林遺跡	散布地	縄文・古代	45	土ヶ市遺跡	散布地	弥生・古代	69	愛宕山遺跡	散布地	弥生
22	丈六遺跡	散布地	古代	46	宋勝堂遺跡	散布地	弥生・古墳・古代	70	宮ヶ内上遺跡	製鉄	近世
23	平沢遺跡	散布地	古代	47	宋勝堂古墳	古墳	古墳				
24	諏訪部前遺跡	集落跡	縄文・弥生・古墳・古代	48	戸の内脇遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳～中世				

第１図　遺跡の位置と周辺遺跡

古墳時代の遺跡には、古墳時代前期から中期の集落跡である大橋遺跡（55）、塩沢北遺跡（61）、立目場遺跡（57）、中沢A遺跡（59）、堀の内遺跡（37）、諏訪館前遺跡（24）や、中期の水田跡である台遺跡（62）があり、愛宕山丘陵の稜線上には夕向原1号墳（66）や、夕向原2号墳（67）などの前方後円墳が確認されている。奈良・平安時代の遺跡は、盆地縁辺部に数多く認められる。都遺跡（14）、窪田遺跡（12）、十郎田遺跡（11）、六角遺跡（7）、戸の内遺跡（8）、前戸内遺跡（19）などがある。このうち、都遺跡では、大型の掘立柱建物跡が検出され、開田作業時に伴う採集資料ではあるが、8世紀初頭とされる瓦が見つかっており、官衙関連遺跡と考えられている。戸の内遺跡では墨書土器が発見されている。

中世の遺跡には、盆地の北側から西側にかけて兵衛館跡（15）、西屋敷遺跡（9）、平沢館跡（20）、諏訪館跡（26）、築館館跡（40）、花盾館跡（42）などがある。兵衛館跡については、『仙台古城書上』に、城主が横尾兵衛、『封内風土記』に、城主は志津摩信濃守と記されている。また、『刈田郡誌』の「小村崎古書」に「奥平氏の祖村上修理大夫元弘の頃、北畠顕家の軍に応じて馳せ参じたる地」とあり、築城は南北朝期頃とみられる。1993年～2000年には、東北福祉大学によって東側斜面を中心に計680㎡の調査が行われている（東北福祉大学116番教室1994・1995・1996、東北福祉大学16番教室1997・1998・1999、東北福祉大学吉井研究室2000・2001）。平沢館跡については、『封内風土記』によると、この館跡が平沢要害と号されていたこと、はじめ中島右衛門が城として築き、『封内風土記』編纂当時は、高野統兼が居住していたことが記されている。また、『刈田郡誌』では、別称として寝牛館、勝岡城を挙げるとともに、上杉景勝の家臣甘糟備後守によって築かれたことが記されている。平沢館跡には絵図が残されており、それによると、南北二つの郭からなり、濠によって周囲を取り巻かれた館跡であることが分かる。また、大手にあたる南側には、屈曲する登城道とその道沿いに町が存在した様子も認められる。

近世の遺跡は、盆地南東部に台遺跡（62）、宮ヶ内上遺跡（70）がある。

第Ⅲ章　調査の経過と方法

調査は、対象地について重機による表土除去後に遺構検出作業を行い、確認された遺構については断面図を作成しながら掘り下げ、完掘後に写真撮影を行い、平面図を作成した。写真記録には、35mmモノクロフィルムとデジタルカメラを用いた。

車地蔵遺跡では、３ヶ所の調査区を設定した（第２図：P10）。調査は、作付けが行われていた３区を除き１・２区を先行して行った。期間は１・２区が５月９日から５月26日、３区が10月17日から11月21日である。遺構の少ない1区、2区、3区南については、工事用の基準杭をもとに平板測量（S＝1／100・1／200）で平面図を作成した。遺構が集中する３区北では、工事用の杭BM6とBM7を結ぶ線を南北の基準線とし、それに直交する座標を設定し、S＝1／20で平面図を作成した。

鍛冶屋敷遺跡では、合計10ヶ所の調査区を設定した（第18図：P44）。調査期間は5月9日から7月6日である。遺構の少ない1区、2区中央・2区東・2区西、2・4・5トレンチについては工事用の基準杭をもとに平板測量（S＝1／100・1／200）で平面図を作成した。遺構が集中する2区北では、工事用の基準杭（K43）を測量原点BM12とし、これと工事用の杭K57を結ぶ線上にBM13を設定し、BM12とBM13を結ぶ線を東西の基準線とした。そして、これと直行する南北軸をもとに3m方眼を組んだ。グリッドラインはBM12を測量原点にして東西・南北方向の距離で表した。遺構の実測図は、平面・断面ともにS＝1／20で作成した。

原遺跡では、3ヵ所の調査区を設定した（第30図：P74）。10月24日から重機による表土剥ぎを行い、11月14日から11月25日の期間に精査を行った。1区では調査区の東側に雁柄川の旧河道が、2区では土壙が16基検出された。3区では、灰白色火山灰を巻き込む水田の耕作土が確認されたが、層中から近世の磁器が出土しており、近世以降の水田跡と判断し、調査対象から除外した。土壙の平面図については、断面図に使用したセクションポイントを基準にS＝1／20で作成した。土壙の位置や調査区の平面図については、工事用の杭を基準点（BM1・BM2・BM3・BM4）として、平板測量（S＝1／100・1／200）で作成した。

上葉の木沢遺跡では、3ヵ所の調査区を設定した（第35図：P84）。調査期間は7月6日から7月20日である。2区では土壙、溝跡が検出されたが、1・3区からは遺構は認められなかった。平面図については、遺構の断面図に使用したセクションポイントを基準にS＝1／20で作成した。また、土壙の位置や調査区の平面図については、工事用の杭を基準点（BM1・BM2・BM3・BM4、BM5）として平板測量（S＝1／100・1／200）で作成した。

中葉の木沢遺跡における今回の調査対象地内では、遺構・遺物は認められなかった（第35図：P84）。調査区の平面図を作成し、7月20日に調査を終了した。平面図については、工事用の杭を基準点（BM1・BM2・BM3・BM4）とし、平板測量（S＝1／200）で作成した。

基準点の座標値は、以下のとおりである（第1表）。

第1表　各遺跡の基準点の座標

遺跡	No.	X座標	Y座標	備　考
車地蔵遺跡	BM1	X=-207819.879	Y=-11952.579	1区
	BM2	X=-207801.278	Y=-11944.058	
	BM3	X=-207910.471	Y=-11912.716	2区
	BM4	X=-207935.404	Y=-11922.663	
	BM5	X=-207970.052	Y=-11914.826	
	BM6	X=-207810.887	Y=-11900.342	3区
	BM7	X=-207850.745	Y=-11903.699	
	BM8	X=-207760.800	Y=-11896.400	
鍛冶屋敷遺跡	BM1	X=-208009.421	Y=-11922.765	1トレンチ
	BM2	X=-208029.356	Y=-11924.448	
	BM3	X=-208042.764	Y=-11925.919	1区、2トレンチ
	BM4	X=-208044.359	Y=-11953.392	
	BM5	X=-208062.111	Y=-11997.223	2区北、4トレンチ
	BM6	X=-208091.333	Y=-11925.587	3トレンチ
	BM7	X=-208122.063	Y=-11915.893	
	BM12	X=-208148.735	Y=-12014.809	
	BM13	X=-208152.400	Y=-11980.000	
鍛冶屋敷遺跡	BM8	X=-208157.405	Y=-11907.121	2区東
	BM9	X=-208152.102	Y=-11956.839	
	BM10	X=-208146.831	Y=-12006.259	2区中央・西、
	BM11	X=-208159.005	Y=-12007.155	5トレンチ
原遺跡	BM1	X=-207800.941	Y=-12103.675	
	BM2	X=-207762.482	Y=-12126.151	
	BM3	X=-207684.262	Y=-12187.776	
	BM4	X=-207694.646	Y=-12181.020	
上葉の木沢遺跡	BM1	X=-207900.952	Y=-11909.918	1・2区
	BM2	X=-208310.577	Y=-11826.003	
	BM3	X=-208344.553	Y=-11812.032	
	BM4	X=-208364.934	Y=-11810.530	3区
	BM5	X=-208419.372	Y=-11797.871	
中葉の木沢遺跡	BM1	X=-208434.598	Y=-11799.553	
	BM2	X=-208518.462	Y=-11813.683	
	BM3	X=-208562.551	Y=-11823.461	
	BM4	X=-208542.700	Y=-11868.168	

車地蔵遺跡（くるまじぞういせき）

第Ⅳ章　車地蔵遺跡

1．基本層位

調査区は大きく３ヶ所におよび、北から１・２・３区とした(第２図)。地点によって立地が異なるが、基本層位は共通し、大きく４層に分類した。Ⅰ層は褐灰色の砂質シルトで、３区でのみ認められた。層厚は18～34cmである。Ⅱ層は黒褐色の砂質シルトで、１・２区では表土にあたる。層厚は７～19cmである。Ⅲ層は黒色のシルトで、「ノボク」と呼称される黒色火山灰である。層厚は４～32cmで、西側に向かって漸次薄くなる。Ⅳ層は暗褐色の粘土で、Ⅲ層とⅤ層の漸移層である。層厚は12～20cmで、３区の北側の標高の高い範囲で認められる。Ⅴ層は灰黄褐色ないし明黄褐色の粘土で、地点によって色調が異なる。地山である。

遺構はⅢ層から掘り込まれており、遺構を検出したのはⅣ層あるいはⅤ層である。

2．発見された遺構と遺物

今回の調査では３区を中心に、掘立柱建物跡５棟、水場遺構１基、土壙25基、溝21条、ピット多数が検出された。遺物は、水場遺構を中心に近世陶磁器、木製品、中世陶器、土師器、須恵器、石器、石製品、竹製品、動植物遺体が出土した。以下、調査区ごとに記述を行う。

（1）１区

調査区東端で南北に走る溝１条(SD1)を検出した（第３図）。

SD1は、検出長10.4m、上幅1.6～２m、下幅0.4～0.9m、深さ22～59cmである。断面形は逆台形で、堆積土は自然流入土である。中央付近から北側が１段深くなる。遺構の位置から、確認調査の15・16・18トレンチで検出された方形の溝と同一であり、全体の規模は、南北45m以上、東西10mになると考えられる。

（2）２区

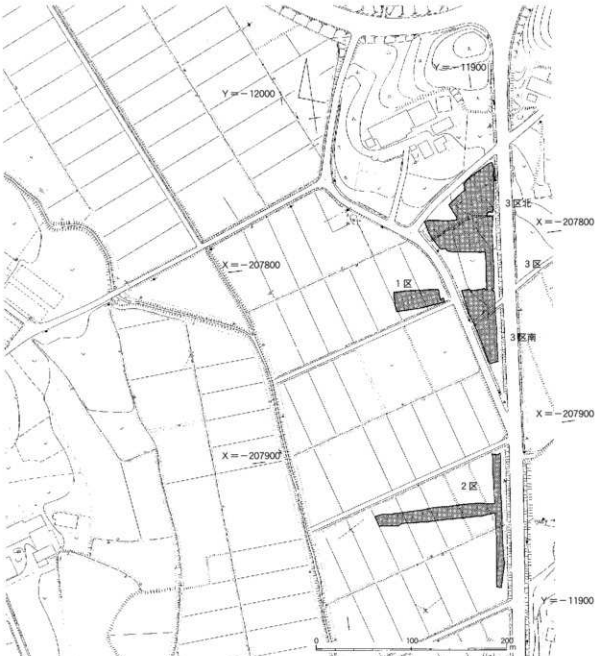
調査区東端で土壙３基(SK2～4)を検出した（第３図）。遺物は、表土から陶磁器と土師器、土壙内堆積土から石器が出土している。

【SK2土壙】（第４図）

平面は円形で、長軸1.88m、短軸1.78m、深さ87cmの土壙である。断面は逆台形で、底面は丸みを持ちくぼむ。堆積土は自然流入土である。遺物は、堆積土から剥片と剥片石器が計８点出土した。

【SK3土壙】（第４図）

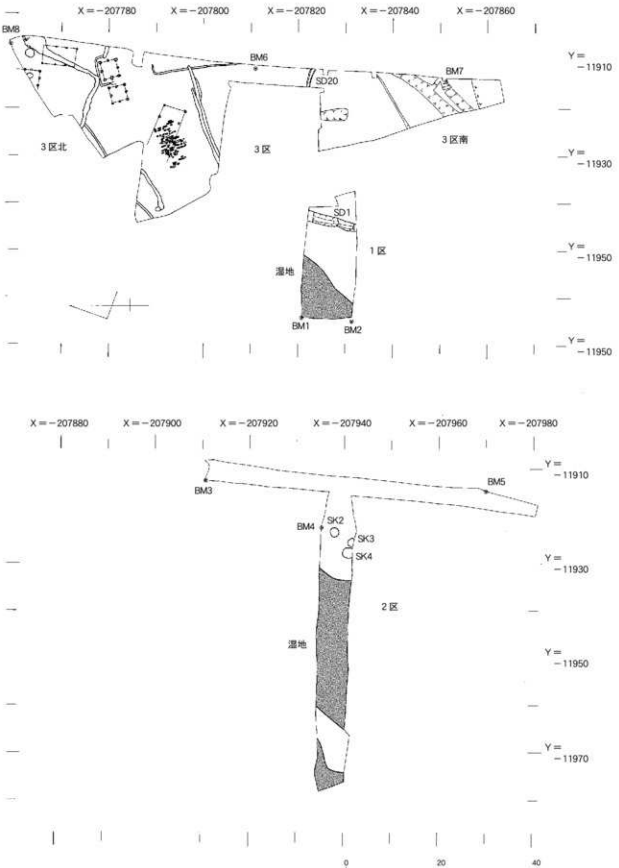
調査区南壁にかかっており、北半分を検出した。検出された部分から、平面は楕円形になると考えられる。長軸1.74m、短軸1.12m以上、深さ98cmである。断面は漏斗形である。底面は丸みを持ち、西側へ傾斜する。堆積土は自然流入土である。遺物は出土していない。



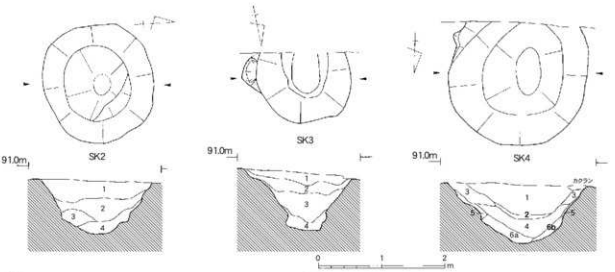
第２図　調査区の位置

【SK4土壙】（第４図）

調査区南壁に遺構の一部がかかっている。検出された部分から平面は楕円形になると考えられる。規模は、長軸2.22m、短軸1.94m以上、深さ97cmである。断面は逆台形である。底面は丸みを持ちくぼむ。堆積土は、１層が地山粘土の人為堆積で、２～６層が自然流入土である。堆積土の特徴から、SK4の埋没途中のくぼみに、地山粘土を人為的に埋めたと考えられる。遺物は、堆積土６層から石核が１点出土した。



第３図　１・２・３区の検出遺構



SK2

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト質粘土	径2～8mmの灰色パミスを多く含む。酸化鉄を層上部に含む。	
2	黒色(10YR2/1)	粘土	径1～8mmのパミスを含む。酸化鉄を上部にわずかに含む。	
3	黒色(10YR2/1)	粘土	地山を多く含む。	
4	黒色(10YR2/1)	粘土	地山を含む。	

SK3

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト質粘土	鉄・遺構色シルト土を多く含む。径1～8mmのパミスを全体に多く含む。	
2	黒色(10YR2/1)	シルト質粘土	径2～8mmの灰色パミスを多く含む。酸化鉄を層上部に含む。	
3	黒色(10YR2/1)	粘土	径1～8mmのパミスを含む。酸化鉄を上部にわずかに含む。	
4	黒色(10YR2/1)	粘土	地山を多く含む。	

SK4

層	土色	土質	混入物等	備考
1	浅黄色(5Y7/3)	粘土	酸化鉄を全体に多く含む。	人為堆積
2	黒褐色(10YR3/1)	粘土	暗灰黄色(2.5Y5/2)、酸化鉄を含む。	
3	黒色(10YR2/1)	シルト質粘土	径2～8mmの灰色パミスを多く含む。酸化鉄を層上部に含む。	
4	黒色(10YR2/1)	粘土	径1～8mmのパミスを含む。酸化鉄を上部にわずかに含む。	
5	黒褐色(10YR3/2)	粘土	地山を含む。	
6a	黒褐色(10YR3/1)	粘土	砂を少量含む。	
6b	黒褐色(10YR3/1)	粘土	地山を含む。	

第４図　SK2・3・4土壙

(3) 3区

3区では、主に北側で掘立柱建物跡５棟、水場遺構１基、溝跡21条、土壙20基、小溝状遺構群、ピット多数が検出された（第５図）。以下、主要な遺構と遺物について記述する。

A. 掘立柱建物跡

５棟の掘立柱建物跡の中で全体の形状や規模がわかるものは３棟である。

【SB41掘立柱建物跡】（第6図）

３区北の中央付近で確認した。SD22、SK21・49と重複し、これらより古い。建物の南半は耕作により削平を受けている。南北・東西ともに2間の建物跡である。北側柱列と東・西側柱列から75cm程度離れた位置に、これらと平行する幅35～50cm、深さ５～８cmのSD23溝跡が検出されており、雨落ち溝と考えられる。建物の規模は、東側柱列で総長3.7m、北側柱列で総長3.8mであり、柱間寸法は、東側柱列が1.85m、1.85m、北側柱列が1.9m、1.9mである。柱穴は１辺50cm強の隅丸方形で、柱穴の深さは20～47cmである。P2以外の柱穴から柱痕跡が確認され、柱は径20～26cmの円形である。建物の方向は、西側柱列でN－15°－Wである。

【SB43掘立柱建物跡】（第6図）

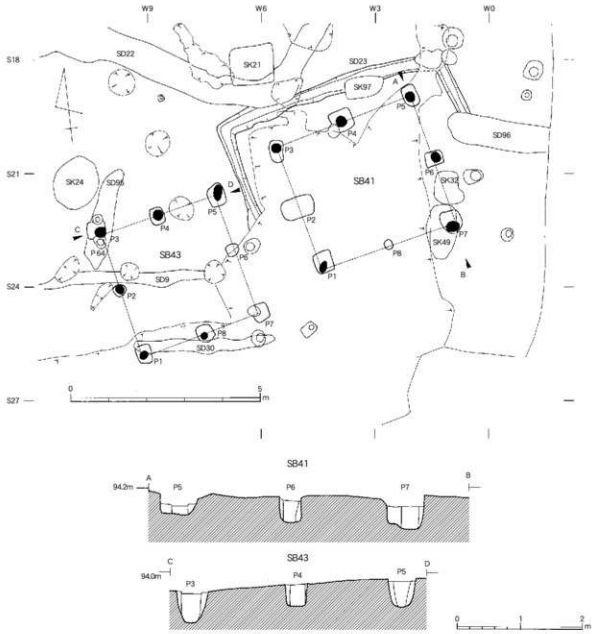
３区北の中央で確認された。SD30・95、P64と重複し、これらより古い。南北・東西ともに２間の建物跡である。建物の規模は、東側柱列で総長3.3m、北側柱列で総長3.3mである。柱間寸法は、東側柱列で北から1.5m、1.8m、北側柱列で東から1.7m、1.6mである。柱穴は、１辺50cm程度の隅丸方形で、柱穴の深さは14～42cmである。P1～5、P8から柱痕跡もしくは柱抜き取り痕が確認さ

第５図　３区北　検出遺構

れ、柱は直径約16cmの円形である。建物の方向は、西側柱列でN－15°－Wとなり、SB41と一致する。

【SB44掘立柱建物跡】（第７図）

３区北の北東に位置する。３間×１間の南北棟である。SD22、SX28と重複し、これよりも古い。

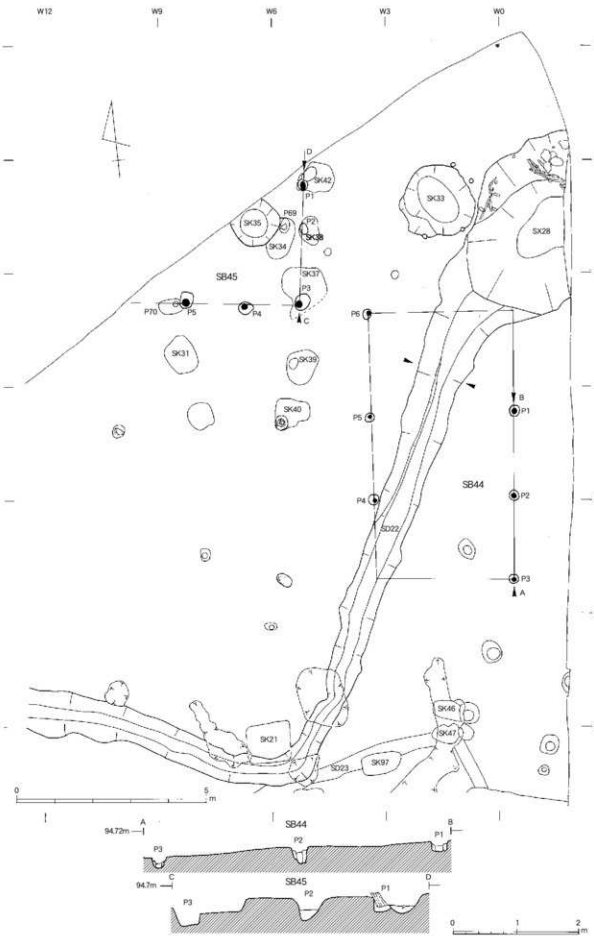


第６図　SB41・43掘立柱建物跡

建物の規模は東側柱列で総長7.1m、北側柱列の総長が3.8mである。柱間寸法は、東側柱列で北から2.7m、2.2m、2.2mである。柱穴はいずれも円形で、直径は約30cm、深さは14～30cmである。６箇所すべての柱穴で柱痕跡を確認し、P4では、直径約８cmの円形の柱材が検出された。建物の方向は西側柱列でN－6°－Eである。

【SB45掘立柱建物跡】（第７図）

３区北の北端に位置し、建物の北側が調査区外に続くと考えられる。東西・南北ともに２間以上の建物である。SK37・38・42・P70と重複し、前三者より古く、P70より新しい。また、位置的にSK35・P69と重複するが、直接の切り合いはなく新旧関係は不明である。建物の規模は、東側柱列で総長3.1m以上、南側柱列で総長3.0m以上である。柱間寸法は、東側柱列が北から1.2m、1.9m、南側柱列が東から1.5m、1.5mである。検出された柱穴は円形、隅丸方形で、直径30～50cm、深さ

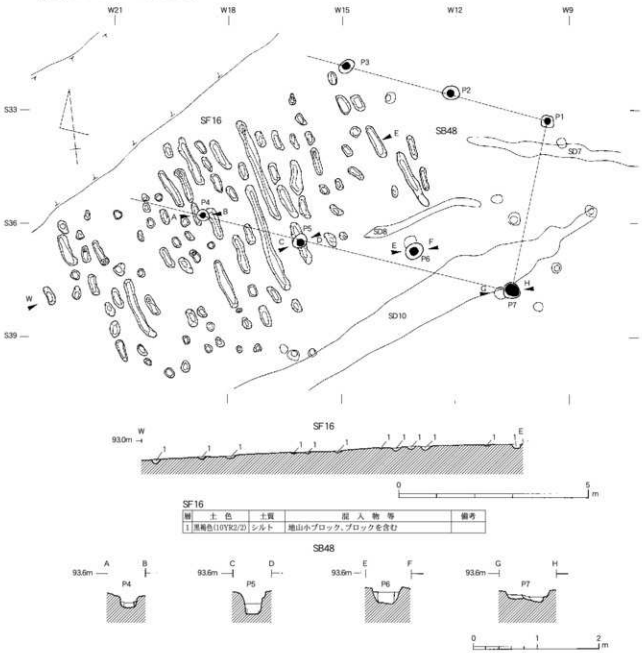


第 7 図　SB44・45掘立柱建物跡

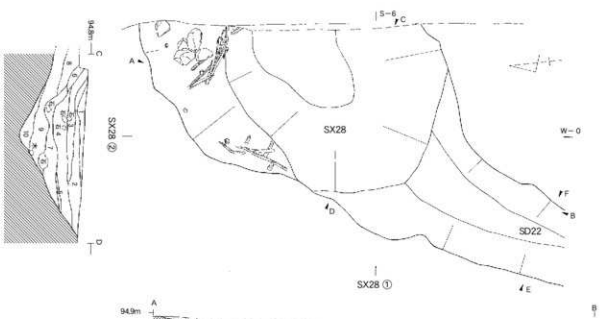
は20～38cmである。P1・4・5から柱痕跡が確認され、P1とP4では直径約18cmの円形の柱材が検出された。建物の方向は、東側柱列でN－6°－Eであり、SB44と一致する。P2から土師器片が1点、P4からは砥石が1点出土した。

【SB48掘立柱建物跡】（第8図）

3区北の南側に位置する。3間以上×1間の東西棟である。SD10・SF16と重複し、SD10より古く、SF16より新しい。建物の規模は、南側柱列で総長8.4m、東側柱列で総長が4.6mである。柱間寸法は、南側柱列で東から2.7m、3.0m、2.7mである。柱穴は円形で、直径約40cm、深さは18～39cmである。すべての柱穴から柱痕跡が確認され、柱は直径20cmの円形である。P6、P7はそれぞれ隣り合うピットを切っており、同位置での建替えの可能性が考えられる。建物の方向は、南側柱列でE－20°－Sである。



第8図　SB48掘立柱建物跡、SF16小溝状遺構群



SX28②

層	土色	土質	記入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト		
2			SX28①の1層対応。	
3			SX28①の4層対応。	
4			SX28①の5層対応。	
5			SX28①の6層対応。	
6			SX28①の7層対応。	
7	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山小ブロックをやや多く含む。	
8	黒褐色(10YR3/1)	粘土	炭砂をラミナ状に含む。	
9			SX28①の11層対応。	
10	黒色(10YR1.7/1)	粘土		

SX28①

層	土色	土質	記入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒、ブロックを若干含む。	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒、ブロックを少量含む。	
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒と炭を少量含む。	
4	黒褐色(2.5Y3/2)	粘質シルト	地山小ブロックと炭を少量含む。	
5	黒褐色(2.5Y3/1)	粘質シルト	地山小ブロックと炭化物を少量含む。最砂を少量ラミナ状に含む。	
6	にぶい黄(2.5Y6/3)	砂質シルト	地山崩落土主体層。	
7	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	植物遺体を多く含む。	
8	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を少量含む炭を含む。	
9	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山粒をわずかに含む。炭化物粒を少量含む。	
10	黒褐色(10YR2/3)	粘土	地山粒をわずかに含む。炭を少量含む。	
11	黒色(10YR2/1)	粘土	炭を多く含む。層上部には植物遺体が多い。	

SD22

層	土色	土質	記入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒、酸化鉄を含む。	
2a	黒色(10YR2/1)	シルト	地山小ブロック、砂を少量含む。	
2b	黒色(10YR2/1)	シルト	砂を含む。	
3	黒色(10YR2/1)	砂質シルト	地山小ブロックを多く含む。	

第９図　SX28水場遺構、SD22溝跡

B．水場遺構

【SX28水場遺構】（第９～15図）

３区北の北東端に位置する。調査したのは南西半のみである。SB44・SK33と重複し、SB44を切り、SK33に切られることが確認されたため、SK33よりも古く、SB44より新しい。南西隅でSD22へと接続し、堆積状況からSX28とSD22は同時に存在していたと考えられる。

平面は、南北に延びる不整な楕円形と考えられ、規模は、長軸4.7m以上、短軸３m以上、深さ約1.2mである。その構造は、北、西壁に杭を打ちこみ、その間にしがらみ状に横木をわたして、裏込め石を詰めるというもので、テラス状の足場を作り出していたと考えられる。遺構は、現在も湧水が見られる谷部にあることから、深まりを作って水を溜め、SD22へ水を流した「洗い場」であったと考えられる。

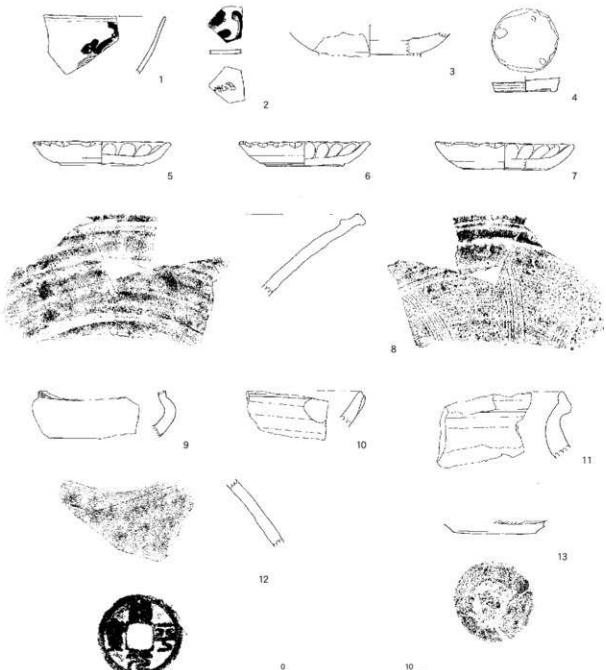
堆積土は11層確認でき、黒褐色のシルト・粘質シルト・粘土と、黒色の粘土である。

遺物は、裏込め付近から中世陶器が1点、堆積土中から、土師器34点、須恵器８点、陶磁器23点、漆器４点、木製品30点、竹製品２点、銅銭２点、石器26点、石製品11点、そのほかに馬の骨、鹿角、アワビの貝殻が出土した。土師器、須恵器には小破片が多い。

第10図には、陶磁器、土器、銅銭を図示した。１と２は、中国景徳鎮産の染付け碗で同一個体である。２の裏側には「嘉」の文字があり、これは16世紀の嘉靖(1522～1566)年製のものであることを示す。３は、中国龍泉窯産の青磁碗である。内面には釉剥があり、高台裏は露胎となっている。釉はオリーブ色で、時期は16世紀である。４は、瀬戸・美濃産の丸碗の高台部である。周囲を加工して円形に成形している。内面は灰釉だが、高台裏は露胎である。時期は16世紀～17世紀である。５～７は、志野織部の菊皿である。高台は削り出しである。長石釉がかけられるが、いずれも高台裏は露胎である。時期は、16世紀末～17世紀初頃と考えられる。８は、瀬戸・美濃産の擂鉢である。ロクロ目が顕著であり、内面には10条単位の筋目が認められる。内外面ともに鉄釉が施されている。口縁部の形状から16世紀末～17世紀初頭の時期が考えられる。９は、無釉陶器の香炉である。頸部に雷文の押印が認められる。時期は不明である。10～12は、在地産の中世陶器で、鉢(10)、甕(11)、広口壺(12)の破片である。13は、SD22との接続部分から出土した土師器の坏である。内面は黒色処理され、底部切り離しは回転ヘラ切り無調整である。14は、北宋銭で、1064年初鋳の「治平元宝」である。

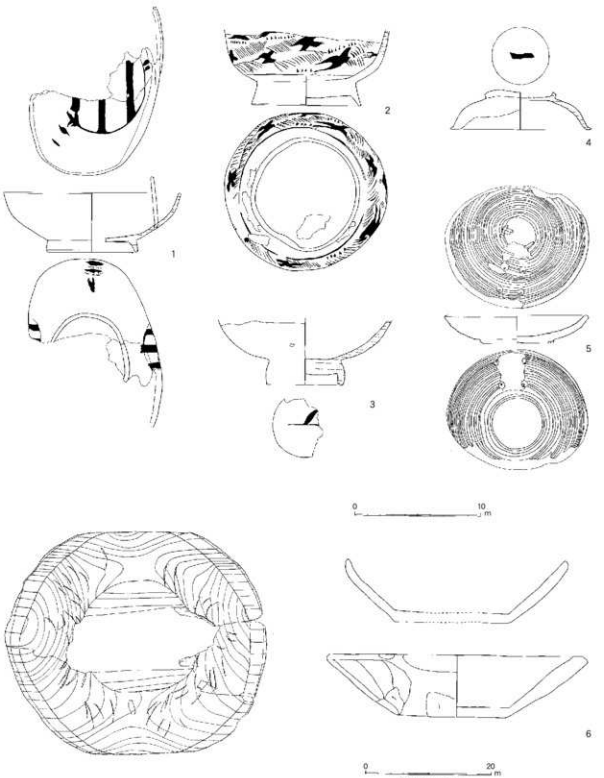
第11～13図には、漆器と木製品、竹製品を図示した。第11図の１～３が椀で、４が蓋である。１は内外面とも黒漆で、外面1対と見込みの部分の計3ヵ所に、赤色漆で三引両文が描かれている。この三引両は、両端が上下とも外側に湾曲する「しない三引」である。２は、外面が黒漆、内面が赤色漆で、外面には赤色漆で鳥が描かれる。３は、内外面黒漆で、高台裏に赤色漆で「卜」と書かれている。４は、内外面とも黒漆で、高台裏に赤色漆で「一」と書かれている。５は皿で、ロクロ目が明瞭に確認できる。径１～２mmの穿孔が２対認められる。６は、柾目どりした素材を刳り抜いて作ったこね鉢である。素材となった木の幅に規制を受けて、楕円形となっている。第12図1は、へら、２～４は板状の木製品で、両面に刃物傷と思われる痕跡が無数に認められる。５は曲物の底板、６は箸、７はSD22との接続部分で出土した鉤、８は手火、９は栓、10は杭の一部である。第13図1は露卯差歯下駄、２・3は連歯下駄、４・５は下駄の歯、６は笊である。

第14・15図には、石製品を図示した。第14図１～４は軟質の凝灰岩製で、同じ母岩である。１は、人面を形作った石製品である。断面凸形で、凸面に両目と鼻の穴と考えられるものが作り出されている。凸面は刃が平らな工具で、凹面と上端面は丸ノミ状の刃の工具を用いて整形されている。上端面は平坦となる。両面とも上半が比較的丁寧に整形するのに対し、目の直下は深く抉る傷状の加工痕が無数に認められる。再加工の可能性も考えられる。目の玉は、先の細い工具で穿孔して作出され、口は同じく先の細い工具で抉り出して作られている。２は、表面に被熱を受けた痕跡のある石製品である。３は、円形の石製品で、側縁には面取りの痕跡が明瞭である。４は、中央に径８mmの穿孔が認められる。５・６は砥石で、７は滑石製の温石である。８は安山岩製の石臼の上臼である。第15図１と２は茶臼の下臼で同一個体と考えられる。両者とも、破損後に再加工が施されており、表裏面とも、金属製の工具の痕跡と敲打痕が明瞭に観察できる。１は、下臼のつばの部分をとり除き、台部に抉りを



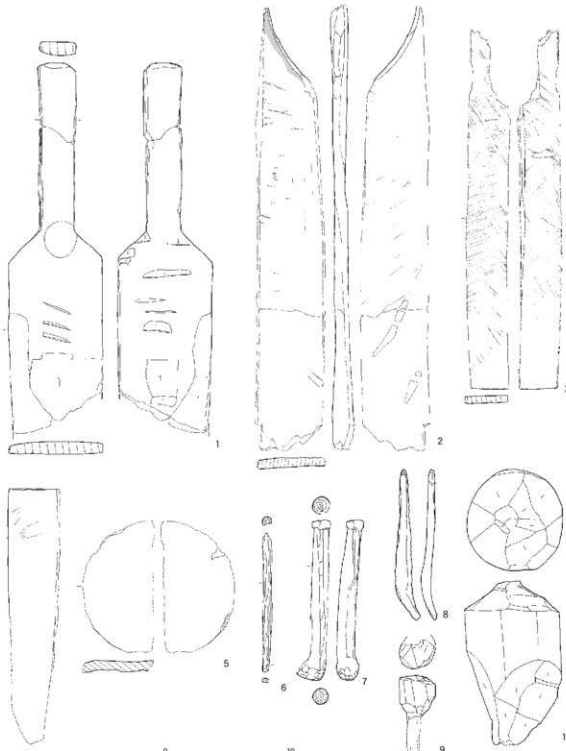
No.	遺構	層位	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録No.
1	SX28	堆積土	磁器	染付け碗	景徳鎮	龍の模様あり	6−7	UG07
2	SX28	堆積土	磁器	染付け碗	景徳鎮	裏に「嘉」の文字あり	6−11	UG07
3	SX28	堆積土	青磁	碗	龍泉窯	高台裏は露胎。高台径（8.1cm）	6−6	UG03
4	SX28	堆積土	陶器	碗	瀬戸美濃	灰釉。高台は露胎。周縁に二次加工と付着物あり。	6−5	UG05
5	SX28	堆積土	陶器	菊皿	瀬戸美濃	志野織部。長石釉　残存2/3　口径10.9cm　底径6.2cm　器高1.9cm　被熱	6−1	UG01
6	SX28	堆積土	陶器	菊皿	瀬戸美濃	志野織部。長石釉　残存1/2　口径(10.4cm)　(底径5.7cm)　器高1.9cm	6−2	UG02
7	SX28	確認面	陶器	菊皿	瀬戸美濃	志野織部。長石釉　残存1/5　口径(11.06cm)　底径(6.6cm)　器高2.1cm	6−3	UG04
8	SX28	堆積土	陶器	擂鉢	瀬戸美濃	鉄釉　10条単位の櫛目	6−9	UG06
9	SX28	堆積土	陶器	香炉		胴部に書文の押印あり。	6−10	UG13
10	SX28	堆積土	陶器	鉢	在地	中世陶器	6−12	UG12
11	SX28	堆積土	陶器	甕	在地	中世陶器	6−8	UG11
12	SX28	堆積土	陶器	壺	在地	中世陶器	6−20	UG09
13	SD22	堆積土	土師器	坏	−	内面：黒色処理　底部：回転ヘラ切り無調整	−	UG07
14	SX28	堆積土	銅製品	銭貨	−	治平元宝（北宋　初鋳1064年）　径2.3cm	6−16	UG23

第10図　SX28水場遺構出土遺物（1）



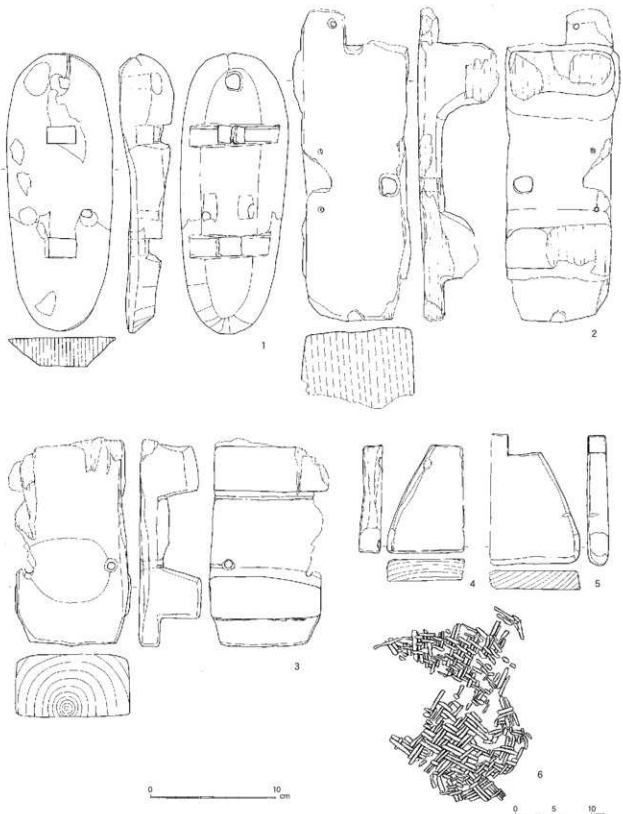
No.	遺構	層位	種別	器種	特　徴	写真図版	登録No.
1	SX28	堆積土	漆器	椀	内外面：黒漆→赤色漆で「三引両」文様　残存1/2　口径（14.1cm）　高台径（6.0cm）　器高4.7cm	8－9	UG30
2	SX28	堆積土	漆器	椀	外面：黒漆→赤色漆で「鳥と細線」文様　内面：赤色漆　残存3/4　高台径7.0cm　器高（5.9cm）	8－6	UG27
3	SX28	堆積土	漆器	椀	内外面：黒漆　外面に1ヶ所穿孔あり　高台裏に赤色漆で「ト」　残存1/3　高台径(5.2cm)　器高(6.1cm)	8－3	UG29
4	SX28	堆積土	漆器	蓋	内外面：黒漆　高台裏に赤色漆で「一」　残存3/4　口径11.1cm　高台径4.6cm　器高3.1cm	8－2	UG26
5	SX28	堆積土	木製品	皿こね	ほぼ完形　口径11.4cm　高台径5.2cm　器高2.2cm　4ヶ所穿孔あり。	－	UG32
6	SX28	堆積土	木製品	鉢	ほぼ完形　長さ41.2cm　幅35.2cm　器高9.9cm	7－9	UG54

第11図　SX28水場遺構出土遺物（2）



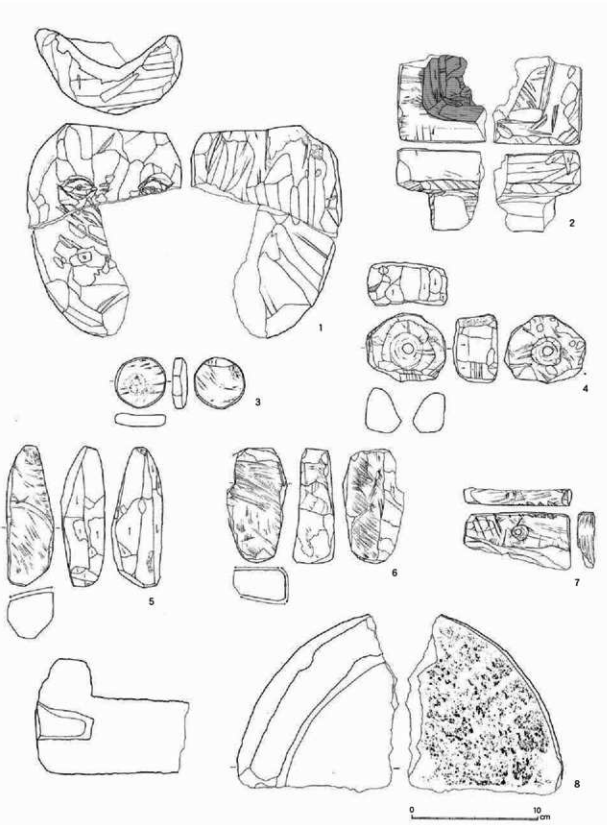
No.	遺構	層位	種別	器種	特　　徴	写真図版	登録No.
1	SX28	堆積土	木製品	へら	長さ（29.1cm）　幅7.5cm　厚さ1.1cm	7−1	UG42
2	SX28	堆積土	木製品		板状　両面に刃物傷あり。長さ（34.9cm）　厚さ1.4cm　端部に炭化した痕跡あり。	−	UG38
3	SX28	堆積土	木製品		板状　両面に多数の刃物傷あり。長さ（28.3cm）　厚さ0.6cm	−	UG40
4	SD22	堆積土	木製品		板状　長さ（20.2cm）　厚さ0.6cm　表面に炭化した痕跡あり。	−	UG47
5	SX28	堆積土	木製品	底板	底板　残存1/2　径（10.4cm）　厚さ0.9cm	7−7	UG34
6	SX28	堆積土	木製品	箸	幅0.9cm	−	UG28
7	SD22	確認面	木製品	鉤	長さ12.6cm	7−4	UG44
8	SX28	堆積土	木製品	手火	長さ（11.8cm）　幅（1.3cm）　厚さ0.8cm	−	UG49
9	SX28	堆積土	木製品	栓	長さ（6.3cm）　径2.9cm	−	UG48
10	SX28	堆積土	木製品	部材	長さ12.9cm　径7.7cm	−	UG41

第12図　SX28水場遺構出土遺物（3）



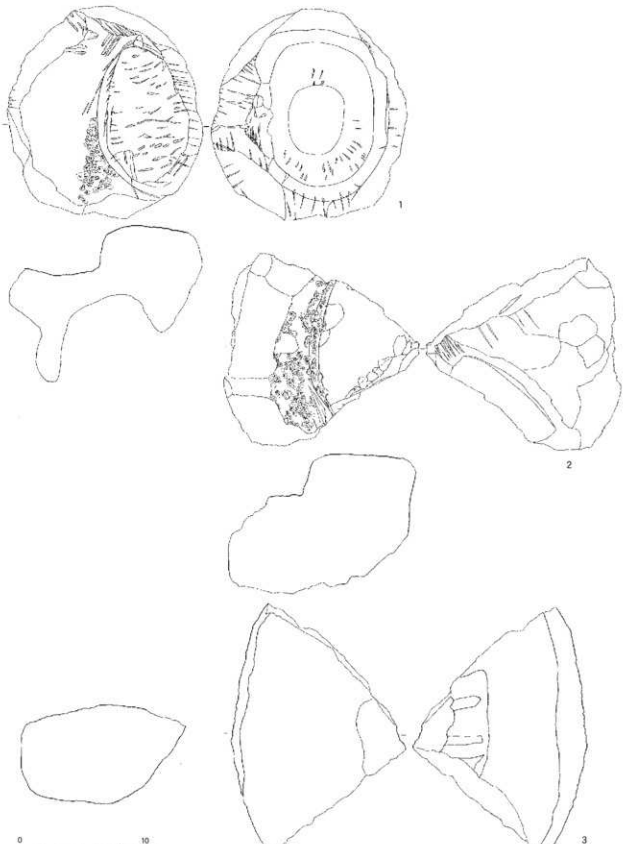
No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	写真図版	登録No.
1	SX28	堆積土	木製品	差歯下駄	露出差歯下駄。長さ22.1cm　幅8.5cm　厚さ1.6cm	7－2	UG39
2	SX28	堆積土	木製品	連歯下駄	長さ（24.7cm）　幅9.3cm　厚さ1.9cm　高さ6.4cm	7－3	UG37
3	SX28	堆積土	木製品	連歯下駄	長さ（16.6cm）　幅9.4cm　厚さ2.3cm　高さ2.3cm	7－5	UG36
4	SX28	堆積土	木製品	下駄の歯	長さ（8.5cm）　厚さ1.9cm	7－6	UG43
5	SX28	堆積土	木製品	下駄の歯	長さ10.3cm　厚さ1.5cm	7－8	UG33
6	SX28	堆積土	竹製品	笊	体部：1本潜り1本越え　底部：2本潜り2本越え	－	UG80

第13図　SX28水場遺構出土遺物（4）



No	遺構	層位	種別	器種	特徴	写真図版	登録No.
1	SX28	堆積土	石製品	人面形	凝灰岩製。 長さ16.4cm 幅12.0cm 厚さ3.0cm	6－21	UG16
2	SX28	堆積土	石製品		凝灰岩製。 高さ6.1cm 表面に被熱痕あり。	6－23	UG14
3	SX28	堆積土	石製品	円形	径4.0cm 厚さ1.0cm	6－22	UG82
4	SX28	堆積土	石製品		凝灰岩製。 長さ6.3cm 幅5.4cm 厚さ3.5cm 孔径0.8cm	6－26	UG15
5	SX28	堆積土	石製品	砥石	安山岩製。 長さ11.1cm 幅3.6cm 厚さ3.6cm 研磨面数1	6－24	UG75
6	SX28	堆積土	石製品	砥石	凝灰岩製。 長さ9.0cm 幅4.7cm 厚さ3.3cm 研磨面数3	6－25	UG24
7	SX28	堆積土	石製品	磨石	滑石製。 長さ（8.4cm） 幅（4.5cm） 厚さ（1.3cm）	6－27	UG17
8	SX28	堆積土	石製品	石臼・上臼	安山岩製。 長さ9.9cm	8－4	UG25

第14図　SX28水場遺構出土遺物（5）



No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	写真図版	登録No.
1	SX28	埋積土	石製品	茶臼・下臼	安山岩製。　高さ12.5cm　破損後に鉢状に成形している。鉢の使用痕跡はない。	8－7	UG22
2	SX28	埋積土	石製品	茶臼・下臼	安山岩製。　高さ（10.2cm）　破損後に再加工している。	8－1	UG21
3	SD22	2層	石製品	石臼・下臼	安山岩製。　径（38.4）cm　高さ8.4cm	－	UG68

第15図　SX28水場遺構出土遺物（6）

入れて鉢状の形を作り出しているが、使用痕跡は認められず、未製品の可能性がある。３は、石臼の下臼で、筋目は不明瞭であった。

C．溝跡

３区からは合計21条の溝跡が検出された（第5図）。以下、主要なものについて記述を行う。

【SD22溝跡】（第5・9・10・12・15図）

３区北の北東部で検出された。SX28と接続し、北東端から南西方向に走るL字形の溝である。SD23、SB44、SK21と重複し、SD23、SB44より新しく、SK21よりも古い。

検出長約24m、上幅0.6～1.5m、下幅0.2～0.6m、深さ14～50cmである。断面はU字形で、南側に向かって緩やかに傾斜する。堆積土は３層認められ、黒褐色、黒色のシルトである。

遺物はSX28との接続部を中心に、堆積土から、陶器1点、鉤1点（第12図７）、動植物遺体、土師器11点（第10図13）、須恵器３点、石臼・下臼１点（第15図３）が出土した。

【SD11・12・13溝跡】（第5・16図）

３区北の南部で検出された東西方向の溝で、西端は調査区外に延びている。ほぼ同位置に同規模で掘られたもので、同一の溝と考えられる。重複関係から、SD11・12→13の変遷が追える。SD12・13の規模は、検出長がそれぞれ16.8m、20.3m、上幅が45～70cm、40～70cm、下幅が20～40cm、10～30cm、深さが8～12cm、4～15cmである。SD11は、一部しか残っていいないため規模は不明である。いずれも堆積土は1層で自然流入土と考えられる。SD13の堆積土中からは、近世陶磁器が4点、剥片が３点出土した。

D．土壙

３区からは合計20基の土壙が検出された（第５図）。以下、主要なものについて記述を行う。

【SK33土壙】（第7・16・17図）

3区北の北東部で検出した。表土掘削時にSK33がSX28を切る状況が確認され、SK33はSX28よりも新しい。平面は不整円形で、規模は、長軸2.04m、短軸1.96m、深さ78cmである。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は4層確認できた。４層は、黒褐色のシルトで機能時の堆積層である。３層は、黒色のシルトで、人為的に埋められた層である。植物遺体を多く含む。２層は黒褐色のシルト、１層は暗褐色の砂質シルトで、これらは、土壙が窪地状になった後に堆積した自然流入土である。

遺物は、３層下部から煤（第17図9）、３層中から内外面赤色漆の漆器椀（第17図4）、露卯差歯下駄と連歯下駄が１点ずつ（第17図5・6）、折敷（第17図8）、杭、土師器、植物遺体、石器、1・2層から近世陶器（第17図1～3）が出土した。

【SK35土壙】（第7・16図）

3区北の北端で検出した。北側の一部は調査区北壁にかかる。SK34、P69と重複しこれよりも新しい。検出された部分から、平面は円形になると考えられる。規模は長軸1.3m以上、短軸が1.28m以

上、深さが64cmである。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は5層で、すべて自然流入土である。遺物は、堆積土から土師器片が１点出土した。平面や断面形の特徴から素掘りの井戸の可能性がある。

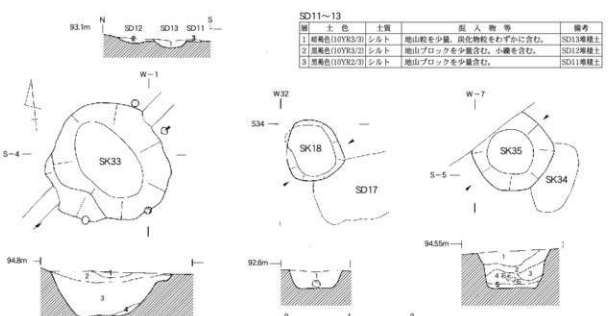
【SK18土壙】（第5・16・17図）

３区北の南西部で検出した。SD17と重複しこれよりも新しい。平面は円形で、規模は、長軸1.0m、短軸0.88m、深さ30cmである。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は地山ブロックを全体に含む黒褐色粘質シルトである。底から内外面赤色漆の漆器椀（第17図10）が１点、逆位の状態で出土した。

E．小溝状遺構群

【SF16】（第８図）

３区北の南側で検出した。SB48より古い。小溝の長軸は南北方向で、いずれの溝も同一方向に並ぶ。溝の分布する範囲は、東西10m、南北6mである。個々の小溝の規模は、長軸0.2～3mで、上幅は20～30cm、下幅は10～20cm、深さは4～14cmである。遺物は出土していない。畑地の耕作痕と考えられる。



SD11～13

層	土色	土質	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	地山粒を少量、炭化物粒をわずかに含む。	SD13堆積土
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを少量含む。小礫を含む。	SD12堆積土
3	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山ブロックを少量含む。	SD11堆積土

SK33

層	土色	土質	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	砂質シルト	地山粒、木片を含む。	自然堆積
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒を含む。	自然堆積
3	黒色(10YR2/1)	シルト	植物遺体を多く含む。	人為堆積
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山小ブロックを多く含む。	自然堆積

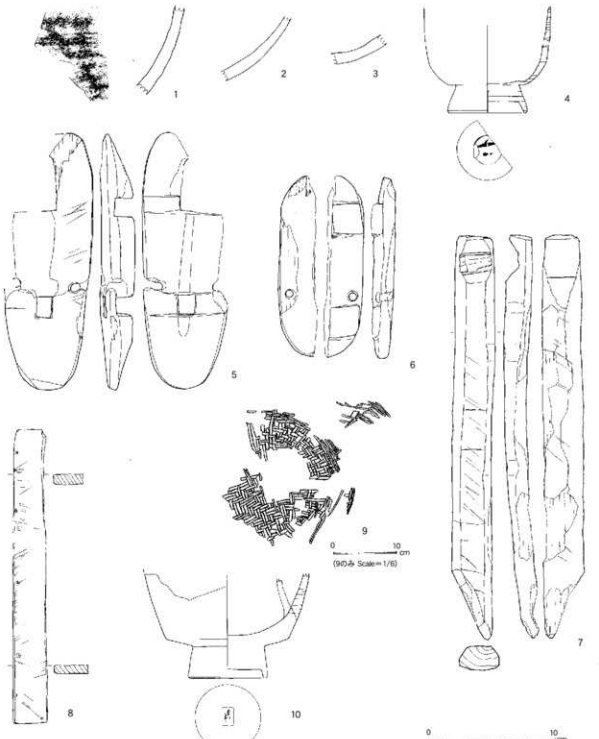
SK18

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	地山ブロックを全体に含む。	

SK35

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	地山ブロックを多く含む。	
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒と砂を少量含む。	
3	黒色(10YR2/2)	シルト		
4	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	砂をわずかに含む。	
5	黒色(10YR2/1)	シルト		

第16図　SD11・12・13溝跡、SK33・18・35土壙



SK33・18出土遺物

No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	写真図版	登録No.
1	SK33	1・2層	陶器	こね鉢	鉄釉。近世。	6－17	UG63
2	SK33	1・2層	陶器	こね鉢	相馬系。	－	UG64
3	SK33	1・2層	陶器	こね鉢	2と同一個体。内面に重ね焼きの痕跡あり。	6－18	UG65
4	SK33	3層	磁器	椀	内外面：赤色漆　高台見込み土黒漆　口径（9.6cm）　高台径5.8cm　器高（6.3cm）	7－5	UG31
5	SK33	3層	木製品	差歯下駄	露卯差歯下駄。長さ（20.3cm）　幅7.0cm　厚さ2.6cm	－	UG51
6	SK33	3層	木製品	連歯下駄	長さ（14.8cm）　厚さ1.6cm	－	UG52
7	SK33	3層	木製品	部材	長さ31.7cm　幅3.7cm　厚さ1.9cm	－	UG58
8	SK33	3層	木製品	折敷	長さ23.1cm　厚さ0.8cm	－	UG53
9	SK33	3層	竹製品	笠	体部：一本潜り一本越え　底部：2本潜り2本越え	－	UG81
10	SK18	1層	漆器	椀	内外面：赤色漆　高台裏に墨あり　高台径5.2cm　器高（8.2cm）	7－8	UG35

第17図　SK33・18土壙出土遺物

3. 考察

3区で検出した遺構と出土した遺物について、出土状況や時期について検討し、遺跡の性格を考察する。

(1) 遺物

<遺物の出土状況>

遺物には、磁器、陶器、漆器、木製品、竹製品、石製品、銅製品、動植物遺体、土師器、須恵器、石器がある（第2表）。全体的に堆積土中の出土が主体であり、遺物の多くは、遺構の廃絶後に流入あるいは遺棄・廃棄されたものと考えられる。この中で最も多く出土したのは土師器であるが、小破片が多く、散在して出土したものがほとんどで、遺構の年代の指標とは考えられない。縄文土器や須恵器、石器についても同様の理由から検討対象から除外する。

以下では、遺構からまとまって出土した遺物について検討を行う。対象とする遺構はSX28、SK33、SK18、SD13である。

第2表　出土遺物集計表(点数)

区	遺構	層位	遺物												計
			縄文	土師器	須恵器	陶器	磁器	石器	石製品	漆器	木製品	竹製品	動物遺体	その他	
2		表土		1											1
		1		6		1	1	1							9
	SK2	堆積土						9							9
	SK4	堆積土						1							1
小計				7		1	1	11							20
3	SK18	堆積土								1					1
	SK21	堆積土				1									1
	SK24	堆積土		1				1							2
	SK29	堆積土							1						1
	SK32	堆積土		1				1							2
	SK33	堆積土		3		3		1		1	9	1		植物遺体2	20
	SK35	堆積土		1											1
	SK37	堆積土				1									1
	SK46	堆積土						1							1
	SX28	堆積土	1	34	8	18	5	26	11	4	30	2	5	炭化木片2、鋤鍬2	148
		礫認面				1									1
		掘込め				1									1
		堆積土		11	3	1			1		1		1	植物遺体1	19
	SD22	底												鋤鍬1	1
	SB45 P2	埋土		1										柱材	1
	SB45 P4	埋土							1						1
	SB45 P1	底												柱材	
	SB44P4	底												柱材	
	SD13	堆積土				3	1	3							7
	SD30	堆積土		1											1
	SD36	堆積土		3				1							4
	SD23	堆積土		1											1
	P91	埋土		1											1
	P92	埋土		1											1
	P94	埋土			1										1
	P52	埋土		1											1
	P88	埋土		1											1
	P89	埋土		1											1
小計			1	62	12	29	6	34	14	6	40	3	6	8	221
3		礫認面（北）		21	4	18	4	4			1				52
		礫認面（南）	1	1		3	1								6
		礫認面				2	2								4
		不明						1							1
		表土	1	1	1	5	1	1							10
		攪乱		3		59	21	3	2	1	1			植物遺体2	92
計			3	95	17	117	36	54	16	7	42	3	6	10	406

<SX28出土遺物>

SX28からの遺物の出土は全体の77％を占めている。なお、SD22はSX28と一体となって機能したと考えられることから、SX28に含めて扱うこととする。

第３表　陶磁器の年代

遺　構	層　位	種別・器種	産　地	年　　代	登録番号	図版番号
SX28	堆積土	磁器・碗	明・景徳鎮	16世紀前半～後半	UG07	10－12
	堆積土	青磁・碗		16世紀	UG03	10－3
	堆積土	陶器・菊皿	瀬戸美濃	17世紀初	UG01	10－5
	堆積土	陶器・菊皿	瀬戸美濃	17世紀初	UG02	10－6
	確認面	陶器・菊皿	瀬戸美濃	17世紀初	UG04	10－7
	堆積土	陶器・擂鉢	瀬戸美濃	16世紀末～17世紀初	UG06	10－8
	堆積土	陶器・碗	瀬戸美濃	16世紀末	UG05	10－4
	堆積土	陶器・甕	在地	13世紀～14世紀	UG11	10－11
	堆積土	陶器・壺	在地	13世紀～14世紀	UG09	10－12
	堆積土	陶器・鉢	在地	13世紀～14世紀	UG12	10－10
	裏込め	陶器・甕	在地	13世紀～14世紀	UG70	－
SK33	1・2層	陶器・こね鉢	在地	18世紀以降	UG63	17－1
	堆積土	陶器・こね鉢	在地	18世紀末～19世紀	UG64	17－2
	1・2層	陶器・こね鉢	在地	18世紀末～19世紀	UG65	17－3
SD13	堆積土	陶器・碗	大堀相馬	18世紀後～19世紀	－	－
	堆積土	磁器・碗	肥前	18世紀後～19世紀	－	－

出土した磁器は、明の染付け碗３点（同一個体）、青磁碗１点であり、陶器は、志野織部の菊皿３点、瀬戸産の擂鉢と丸碗が１点ずつ、香炉1点、在地の中世陶器の鉢、甕、壺である。この中で、ある程度の年代がわかるものを第3表にまとめた。SX28では、13～14世紀と、16世紀～17世紀の陶磁器が存在する。前者は、小破片が多く、その中には、裏込めと堆積土から出土したものもあり、基本層位中の遺物が混入したものと考えられる。後者は、複数の産地であるにも関わらず年代が一定の幅に収まり、遺構の廃絶時期の下限を示すものと考えられる。

漆器は、椀３点、蓋１点の計４点が出土した。蓋には、高台裏に「一」の文字を描くものがある。椀には、鳥と細線で構成される文様や、内外面に赤色漆で三引両文が描かれるものがある。この三引両文は、「しない三引」であり、これは二代藩主忠宗の時期に多く認められる家紋とされている（高橋1998）。器形は、高い高台で底部が厚く、体部下半から上半にかけて直線的に開く形状となる。これらと同様の特徴を持つ漆器が出土した遺跡には、仙台市仙台城二の丸跡（東北大学埋蔵文化財調査センター1997）、仙台城三の丸跡（仙台市教育委員会1985）、大和町下草古城跡（宮城県教育委員会1994）がある。

仙台城二の丸跡第９地点では、二の丸造営以前の屋敷跡の整地層である7・8層や、同じく二の丸造営以前の16号溝埋土1層から唐津産や志野織部、織部の陶器と共伴して、仙台城三の丸跡では、三の丸造営以前の整地層Ⅲ層上面で検出された６号土壙の埋土2・3層から、中国・肥前産の磁器、志野・織部・唐津産の陶器や木製品とともに、下草古城跡のSK354土壙の堆積土からは中国産の磁器や木製品とともに、三引両文の漆器蓋、鳥や細線が描かれた漆器椀が出土している。いずれも、遺構の重複関係や共伴した陶磁器の製作年代、文献資料との対比から、これらの漆器を17世紀初頭～前葉の時期のものとして理解している。今回の調査においても、共伴した陶磁器は16世紀～17世紀初頭の時期になるものが多く、上に挙げた遺跡と共通した傾向が認められた。

木製品には、皿やこね鉢、箸、へら、下駄や曲物の底板や鋤、手火、栓などの生活用具があり、竹製品には笊がある。この他に、部材である杭の先端が出土した。

石製品では、温石や砥石、火鉢のほかに、人面形の石製品が出土した。人面形の石製品は、製作痕跡から顔のみで完結するものである。顔の表面を平らな刃の工具で、上端と裏面を丸ノミ状の刃の工具で製作しており、部位によって工具を使い分けている。断面が凸形で、目は貫通しておらず、紐穴も認められない。類似した遺物は、管見の限り認められないが、民俗例では、いわゆる「掛面」に全

体の形状や目の形が類似する。レンズ状の目の形は、中世から近世初期に認められる特徴であるとされる。石製であることから日常的な道具とは考えにくく、抽象的な意味を有していたと推測される。これと同じ石材の石製品が共伴し、かつこの石材の石核も出土していることから、これらは遺跡内で製作されたものと考えられる。

SX28出土遺物の年代について検討を行った結果、陶磁器や漆器の年代は16世紀以降で、特に16世紀末～17世紀前葉になるものが多い。複数種類の遺物で年代が共通することから、SX28出土遺物は、この時期の一括性のある資料と考えることができる。遺物の内容は、相対的に高価な陶磁器や漆器とともに、下駄や曲物、砥石等の日常雑貨、そして馬や鹿の骨、貝殻等のゴミ類と、多様である。

＜SK33出土遺物＞

SK33からは、陶器が3点出土した。その年代は、18世紀末～19世紀と考えられる（第3表）。これらは自然流入土である1・2層から出土した。人為的に埋め戻された3層からは、漆器や下駄、折敷、建築部材、下部から筵が出土した。漆器は、高台が高く、胴部下半は丸みを持ち、胴部上半から口縁にかけて直線的に立ち上がる器形である。このような器形は、16世紀以降に現れる特徴とされる（関根1998）。3層出土遺物は、漆器とともに同時あるいは近接した時期に廃棄されたものと考えられ、これらは、18世紀末以前の時期であると考えられる。

＜SK18出土遺物＞

SK18では漆器が1点出土した。漆器は内外面赤色漆で、高台が高く、胴部下半に稜を有し、胴部上半から口縁にかけて直線的に開く器形となる。このような特徴は、17世紀後半から認められ、18世紀以降に一般的になるとされる（中井1992）。高台内に認められる長方形の枠と、その中に文字を記した銘をもつ漆器は、仙台城二の丸跡第9地点16号土壙からも出土しており、そこでは人の名前が記されている（東北大学埋蔵文化財調査センター1997）。これは、17世紀末～18世紀初頭をピークとして18世紀後葉頃まで認められる装飾法であるとされる（関根1998）。SK18出土の漆器の印については、判読することができなかった。

＜SD13出土遺物＞

SD13では堆積土から陶器が出土した。これらは、大堀相馬の灰釉碗で、18世紀後半～19世紀の時期と考えられる（第3表）。

（2）遺構

＜遺構の変遷＞

遺構の重複関係が認められたのは3区のみである。その中で主要な遺構について整理すると、次のようになる。

（3区北）　　（3区南）

SD23・（SB41・SB43）→SD22・SX28→SK33　　SF16→SB48

↑

SB44

３区北では、掘立柱建物跡が5棟確認された。これらは、柱穴掘方の形状と規模から２つのグループに大別できる。一つは、柱穴掘方が隅丸方形で、一辺50cm前後になるもので、SB41とSB43がこれに相当する。もう一つは、柱穴掘方が円形を主体とし、径30～40cmになるもので、これにはSB44、SB45、SB48があたる。

前者は、古代の掘立柱建物跡の柱穴にみられる特徴のひとつである。SB41に伴うと考えられるSD23は、近世の溝跡であるSD22に切られる。また、３区北の遺構確認面からは、内面が黒色処理され、底部が回転糸切りによって切り離された土師器坏の破片が出土している。これらを考慮すると、SB41とSD23は古代の時期の建物跡と考えられる。SB43は、建物の方向や規模、構造、さらに柱穴掘方の形状と規模の諸点でSB41と共通した特徴をもつ。したがって、SB41とSB43は同時期あるいは近接した時期の建物であると推測される。

後者の特徴は、一般的に中世以降の柱穴に認められるものである。SB44の北東隅柱と南西隅柱は、後述するSX28とSD22によって切られており、SB44はこれらより古い。SB45は、SB44と建物の方向が揃っており、同一の計画の下に配置された建物の可能性がある。SB44とSB45は、古代以降17世紀以前の建物であったと考えられる。

SF16はSB48に切られており、それより古い。両遺構からは遺物の出土が無く、時期は不明である。明治40年の測量地図では、３区の範囲は水田になっており、遺構確認面から出土した遺物は18世紀後半から19世紀代であることから、SF16とSB48は近代以前の遺構と考えられる。

SD22とSX28は接続しており同一時期の遺構である。前述したように、SX28の出土遺物は、16世紀～17世紀初頭のものが主体で、18世紀以降のものは出土していない。また、SX28を切るSK33では、堆積土上層の自然流入土から18世紀後半～19世紀と考えられる近世の陶器が出土した。SX28の裏込めからは在地産と考えられる中世陶器の甕の破片が出土している。したがって、SX28は、13世紀以降に構築され、17世紀中に埋没したことが分かる。SX28とSD22に改修した痕跡は認められないことから、両遺構は17世紀を前後する時期に機能していたと推測される。

SD13の堆積土からは、18世紀後半～19世紀の陶器が出土しており、SD11～13は、19世紀前後の溝であると推測される。

＜遺構の性格＞

SX28は、杭と横木、裏込め石で足場を作り出す構造や、現在も湧水が見られる谷部に位置し、SD22へと接続していることから、「洗い場」としての機能が考えられた。SD22は、SX28と接続し、平面がL字形の溝である。周辺からこれに伴う建物跡は見つかっていないが、出土した遺物は、日常生活に関するものが多い。また、SX28の足場は北側に向けて作られている。これらを考慮すると、SD22が区画溝である可能性、そしてSX28とSD22の北側に建物跡の存在した可能性が推測される。したがって、SX28水場遺構は、SD22溝跡とともに屋敷の一部を構成していた遺構であると考えられる。

今回の調査範囲からは、SX28やSD22と対応する建物本体は認められなかったが、中近世の屋敷跡が見つかっている仙台市中野高柳遺跡では、両時代を通して主屋が溝によって区画された敷地の中心に位置し、付属建物や井戸、ゴミ穴と考えられる遺構は区画の縁辺に配されることが明らかとなっ

ている（宮城県教育委員会2003a・2004a・2005）。同様の特徴は、同じく中近世の屋敷跡が検出された多賀城市山王遺跡（宮城県教育委員会1997）、古川市権現山遺跡（古川市教育委員会2004）でも確認できる。車地蔵遺跡の３区北では、区画溝の可能性のあるSD22とそれに接続するSX28以外に同時期の遺構は確認できない。この土地利用のあり方は、中野高柳遺跡や山王遺跡、権現山遺跡で確認されたものと同様であり、屋敷の構成は、これらの遺跡と類似していたと考えられる。

前述したように、SX28とSD22からは、木製品を中心として日常生活用具が多く出土したが、一方で、志野織部の菊皿、瀬戸産の擂鉢、明の景徳鎮産の磁器、茶臼、さらに三引両文の漆器など相対的に高価なものも出土している。遺物の種類と性格を考慮すると、居住者は比較的裕福な階層の人物であったと推測される。

出土した遺物は、SX28水場遺構の埋没中に廃棄されたものであり、このことは、SX28水場遺構とSD22区画溝が17世紀中に廃絶していたことを示す。車地蔵遺跡についての文献は認められないが、小村崎地区に関係するものはわずかではあるが存在する。斎藤報恩会文書には、仙台藩士である福地氏と油井氏が、小村崎地区に在郷屋敷を構えていたことが記されている（藏王町史編さん委員会編1994）。また家臣録によると、領地替えによって、伊達家の家臣である秋保氏が、1604年から名取郡長袋村内に在郷屋敷を構える1652年まで刈田郡小村崎村に居住している（藏王町史編さん委員会編1994）。この記載は、今回の調査でSX28から出土した遺物の年代と、SX28、SD22の遺構の機能時期と類似しており、SX28とSD22によって構成される屋敷が、秋保氏の家臣に関係する可能性も推測される。

4．まとめ

- 今回の調査では、３区を中心に、掘立柱建物跡５棟、水場遺構1基、土壙25基、溝21条、小溝状遺構群、ピット多数が検出された。これらは、古代～近世の変遷が考えられる。
- 古代の遺構は、掘立柱建物跡２棟と、それに伴う雨落ち溝１条である。
- 中世の遺構は、掘立柱建物跡２棟である。
- 近世前半の遺構は、水場遺構と溝跡で構成される屋敷の一部と捉えることができる。時期は、水場遺構から出土した陶磁器、漆器より17世紀前後と考えられる。
- 出土遺物の中には、三引両文や鳥文が描かれた漆器椀や、中国産の染付碗、青磁碗、志野織部の菊皿、瀬戸美濃の擂鉢、茶臼があり、居住者は、嗜好品を持てるような階層であったことが推察される。
- 凝灰岩製で人面形の石製品が出土した。全体の形状や目の形が、民俗学で「掛面」と呼称されるものに類似しており、近世の信仰を知るうえで興味深い資料といえる。
- 近世後半の遺構は溝である。時期は、出土した陶磁器より19世紀前後頃と推測される。

第4表　掘立柱建物跡属性表

遺構名	区	方向	構造	間数 桁行×梁行	総長(m) 桁行×梁行	柱間寸法(北より、東より) 桁行(m)	梁行(m)	柱穴 平面形	長軸(cm)	短軸(cm)	深さ(cm)	柱根跡 (cm)	重複関係	図No. 平面	図No. 断面
SB41	3	N-15°-W	−	2間×2間	3.7×3.8	東:1.85, 1.85	北:1.9, 1.9	隅丸方	50〜65	35〜55	20〜47	20〜26	SK49より旧	6	6
SB43	3	N-15°-W	−	2間×2間	3.3×3.3	東:1.5, 1.8	北:1.7, 1.6	隅丸か一円	30〜55	30〜45	14〜42	14〜23	SD30・95より旧	6	6
SB44	3	N-6°-E	南北棟	3間×1間	7.1×3.8	東:2.2, 2.2	北:3.8	円	25〜30	20〜27.5	14〜30	10〜13		7	7
SB45	3	N-6°-E	−	2間以上×2間以上	(3.1×3)	東:1.2, 1.9	南:1.5, 1.5	円〜隅丸方	30〜50	20〜40	20〜38	16〜18	SK37・38・42より旧	7	7
SB48	3	E-20°-S	東西棟	3間以上×1間	(8.4×4.6)	南:2.7, 3.0, 2.7	東:4.6	円	32.5〜50	30〜40	18〜39	12〜23	SD18より旧, SF16より新	8	8

第5表　溝跡属性表

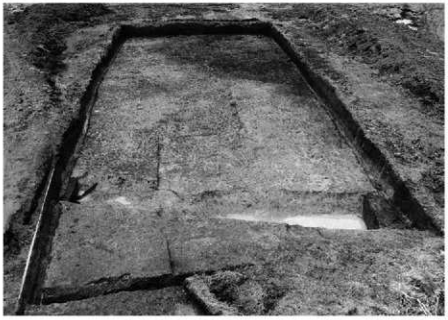
遺構名	区	方向	規模 検出長(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(cm)	断面形	出土遺物	重複関係	図No. 平面	図No. 断面
SD1	1	N-15°-E	10.4	1.6〜2	0.4〜0.9	22〜59	皿	木	SD6より新, SD11・13より旧	3	4
SD5	3	N-10°-W	18.3	0.2〜0.4	0.2〜0.3	3〜9	皿		SD5より旧	5	−
SD6	3	N-5°-E	2.2	0.1〜0.3	0.1〜0.2	2〜3	皿			5	−
SD7	3	E-10°-S	6.5	0.4〜1.0	0.3〜0.7	2〜4	皿			5	−
SD8	3	E-15°-S	3	0.1〜0.3	0.1〜0.24	5〜6	皿			5	−
SD9	3	E-20°-N	11.5	0.15〜0.5	0.1〜0.15	5〜7	U字		SB48より新	5	−
SD10	3	E-20°-S	12.8	0.6〜1.2	0.2〜0.6	7〜12	U字		SD13より旧, SD5より新	5	−
SD11	3	E-20°-S	7.5	0.6≦	−	4≦	−		SD13より旧	5	16
SD12	3	E-20°-S	16.8	0.4〜0.7	0.2〜0.4	8〜12	U字		SD5・11・12より新	5	16
SD13	3	E-20°-S	20.3	0.4〜0.7	0.1〜0.3	4〜15	U字	陶磁器、剥片		5	16
SD14	3	E-20°-S	8.3	0.15〜0.3	0.1〜0.25	3〜7	皿			5	−
SD15	3	E-20°-S	3.2	0.15〜0.25	0.1〜0.2	4〜5	U字		SK18より旧	5	−
SD17	3	E-25°-N	9.2	0.4〜0.9	0.2〜0.9	4〜24	U字			5	−
SD19	3	E-45°-N	4.2	0.4	0.2	10〜16	U字			5	−
SD20	3	W-5°-N	4	0.8〜1	0.4〜0.6	15〜18	逆台形		SK21より旧, SD23・36より新	3	−
SD22	3	E-10°-S, N-25°-E	24	0.6〜1.5	0.2〜0.6	14〜50	U字	土師器, 須恵器, 陶器, 石臼, 重角, 木製品, 銅銭	SD22・96・SK47・97より旧	5	9
SD23	3	E-13°-N, N-10°-W	9.5	0.3〜0.5	0.15〜0.25	5〜8	U字	土師器	SK25より旧	6	−
SD26	3	E-30°-N	4.3	0.3〜0.4	0.15〜0.25	3〜5	U字		SB43より新	5	−
SD30	3	E	3.7	0.2〜0.3	0.1	6〜10	皿			5	−
SD36	3	E-30°-N	7.9	0.4〜0.5	0.15〜0.25	5〜13	U字	土師器、石器	SB43より新	5	−
SD95	3	N-20°-E	2.7	0.45〜0.6	0.2〜0.3	4〜5	皿		SD23より新	5	−
SD96	3	E-10°-S	2.3	0.8	0.6	10〜12	U字			5	−

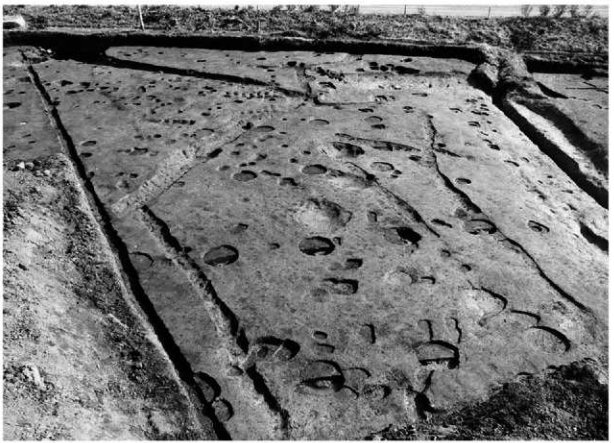
第6表　土壙属性表

遺構名	区	形状 平面形	断面形	規模 長(cm)	幅(cm)	深さ(cm)	底面	出土遺物	重複関係	図No. 平面	図No. 断面
SK2	2	円	逆台形	1.88	1.78	87	緩やかにくぼむ	剥片		3	4
SK3	2	不整円	擂り	1.74	1.12≦	98	南へ傾斜			3	4
SK4	2	不整円	逆台形	2.22	1.94≦	97	緩やかにくぼむ	石核		3	4
SK18	3	円	逆台形	1	0.88	30	ほぼ平坦	礫器	SD17より新	5	16
SK21	3	方形	皿	1.16	0.88	10	平坦	陶器底部破片	SD22より新	5	−
SK24	3	円	すり鉢	1.4	1.2	24	緩やかにくぼむ	土師器、剥片		5	−
SK25	3	不整円	すり鉢	1.28	1.04	23	緩やかにくぼむ		SD26より新	5	−
SK27	3	不整円	皿	0.7	0.7	21	くぼむ			5	−
SK29	3	不整円	すり鉢	1.56	1.36	21	緩やかにくぼむ	石製品		5	−
SK31	3	不整円	皿	0.96	0.76	26	緩やかにくぼむ			5	−
SK32	3	不整楕円	U字	1	0.8	30	緩やかにくぼむ	土師器、剥片		5	−
SK33	3	不整円	逆台形	2.04	1.96	78	若干凹凸あり	礫器、下駄、木製品、黒、陶器	SK28より新	7	16
SK34	3	楕円	逆台形	1.16	0.6≦	29	南に傾斜		SK35より旧	5	−
SK35	3	円	逆台形	1.3≦	1.28≦	64	ほぼ平坦	土師器	SK34より新	7	16
SK37	3	不整	皿	1.44	1.24	21	ほぼ平坦	陶器	SB45より新	5	−
SK38	3	不整円	皿	0.76	0.52	20	ほぼ平坦		SB45より新	5	−
SK39	3	不整円	逆台形	0.96	0.8	42	ほぼ平坦			5	−
SK40	3	不整	凹	0.88	0.84	14〜28	やや凹凸			5	−
SK42	3	不整楕円	皿	1.04	0.84	17	ほぼ平坦		SB45より新	5	−
SK46	3	不整楕円	凹	0.72≦	40	5〜15	西側がくぼむ			5	−
SK47	3	不整円	凹	0.72	0.52	15〜27	緩やかにくぼむ		SD23より新	5	−
SK49	3	不整楕円	U字	1.4	0.84	22	緩やかにくぼむ		SB41より新	5	−
SK97	3	楕円	皿	1.04	0.56	12	凹凸		SD23より新	5	−

図版 1

上　：遺跡遠景（南西から）
中　：1区全景（東から）
下左：2区全景（東から）
下右：3区南全景（北から）

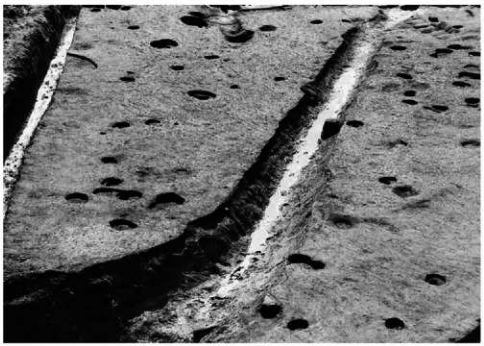




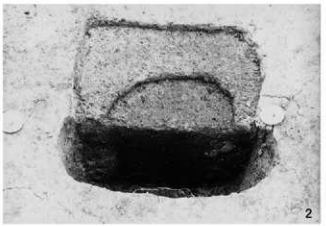
上：３区北　北部全景（西から）
下：３区北全景（南から）

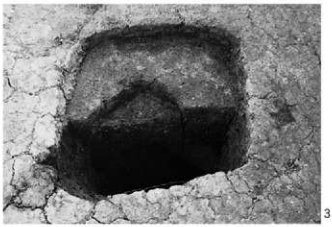
図版 3

上：SB41（東から）
中：SB43（南から）
下：SB44（北から）

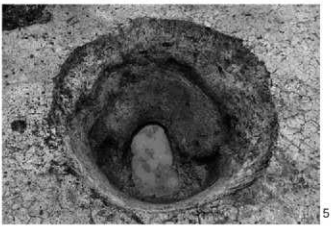


1


2

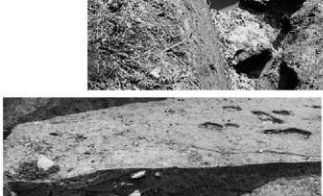

3

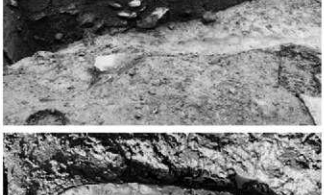
4


5

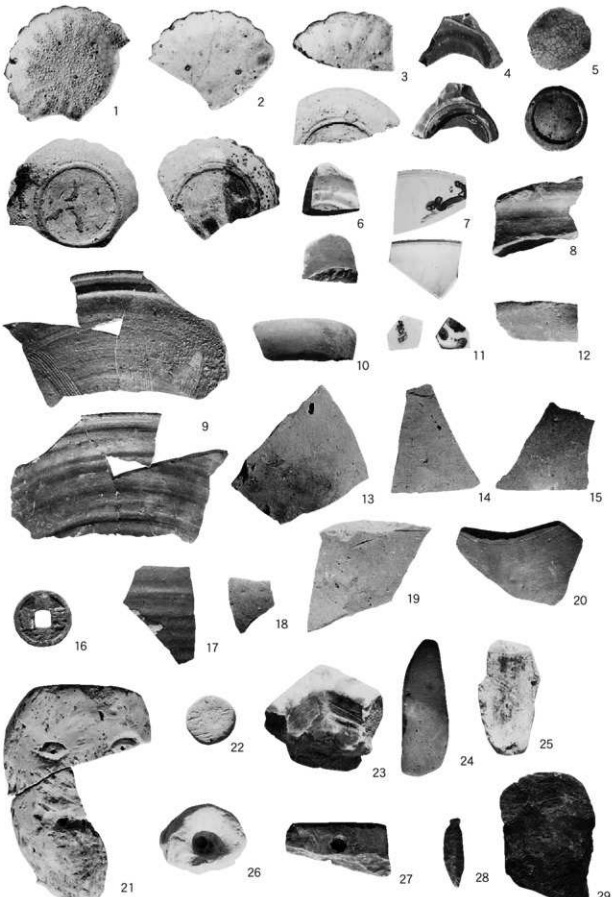
6

1：SB45（南から）
2：SB41 P6
3：SB43 P5
4：SB48 P1
5：SK2（西から）
6：SK18 漆器出土状況



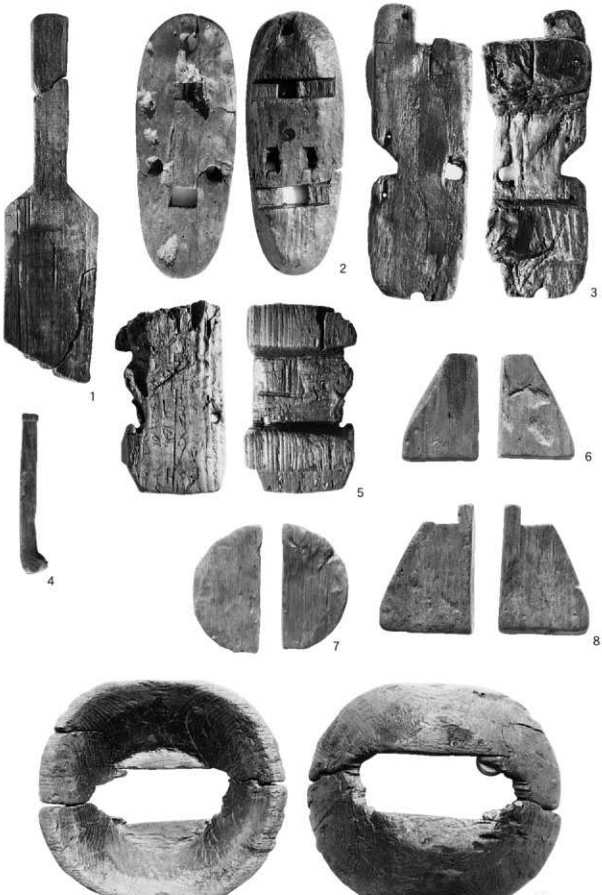


上：SX28全景（北から）　中左：SX28セクション　中右：SX28細部
下左：SX28 下駄出土状況　下右：SX28笊・馬骨出土状況



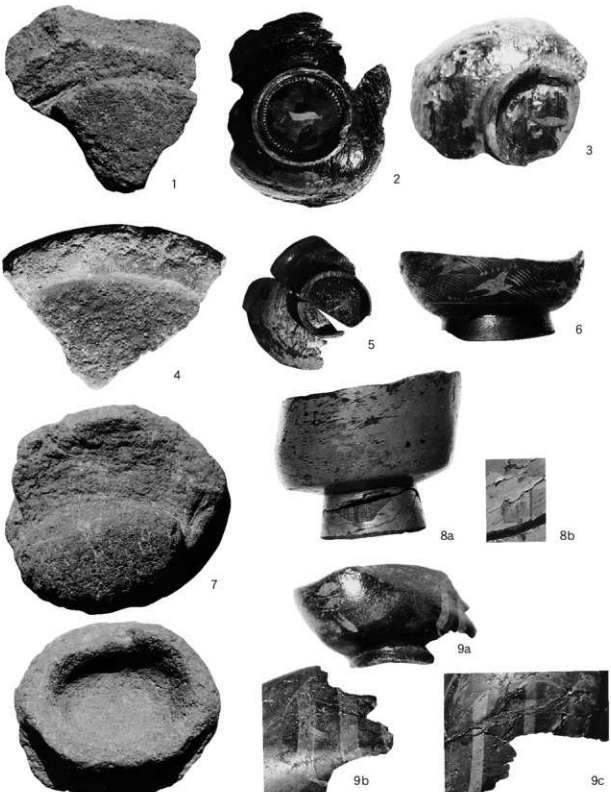
図版6 出土遺物（1）

1：10−5（挿図一番号）　2：10−6　3：10−7　4：水路出土　5：10−4　6：10−3　7：10−1　8：10−11　9：10−8
10：10−9　11：10−2　12：10−10　13〜15：SX28堆積土　16：10−14　17：17−1　18：17−3　19：SX28裏込め
20：10−12　21：14−1　22：14−3　23：14−2　24：14−5　25：14−6　26：14−4　27：14−7　28：３区北遺構確認面
29：SX28堆積土



図版7 出土遺物（2）

1：12−1（挿図−番号） 2：13−1 3：13−2 4：12−7 5：13−3 6：13−4 7：12−5 8：13−5 9：11−6



図版8 出土遺物（3）

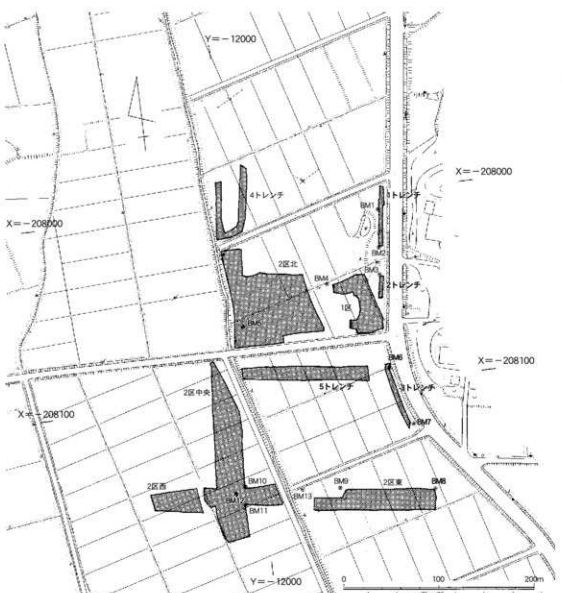
1：15−2（掃図−番号） 2：11−4 3：11−3 4：14−8 5：17−4 6：11−2 7：15−1 8：17−10（8b：高台裏の銘）
9：11−1（9b：外面の三引両、9c：内面の三引両）

鍛冶屋敷遺跡（かじやしきいせき）

第Ⅴ章　鍛冶屋敷遺跡

1．基本層位

調査区の層位は、地点によって異なる。基本層位については、最も遺構の集中した２区北の西壁と南東壁で柱状図を作成した。層位は４層確認された。Ⅰ・Ⅱ層は黒褐色のシルトで、現在の耕作土である。層厚は8～36cmである。Ⅲ層は黒褐色のシルトで、区画整理以前の旧耕作土と考えられる。層厚は6～34cmである。４トレンチは、２区北から続く丘陵上に位置するが、Ⅲ層が確認できず、さらに遺構・遺物は認められなかった。削平を受けているものと考えられる。Ⅳ層は黒色のシルトで２区北の南東部で認められた。湿地に向かって厚く堆積しており、北西部の西壁では認められなかった。Ⅴ層は黄褐色の粘土で地山である。遺構検出面はⅤ層である。



第18図　調査区の位置

2. 発見された遺構と遺物

調査区は遺跡全体で10ヶ所設定したが、その中で遺構が認められたのは２区北と２区中央のみである（第18図）。１区の南半、２区東・西、1～3・5トレンチは湿地になっており、遺構は認められなかった。２区中央からは旧河道とSK1土壙が、２区北からは、掘立柱建物跡10棟、柱列２列、水場遺構１基、溝跡19条、土壙14基、ピット多数が検出された（第19図）。遺物は、２区北から陶磁器、土師器、須恵器、石器、石製品が出土した。以下２区北の遺構について詳述する。

第19図　２区北　検出遺構

A. 掘立柱建物跡

調査区内には多数のピットが検出された。その中には一定の間隔で並ぶものも認められたが、建物として確認できたのは10棟である。その中で全体の規模、形状の分かるものは９棟である。

【SB1掘立柱建物跡】（第20図）

２区北の南西部で検出された。３間×１間の東西棟である。建物の規模は、北側柱列で総長7.1m、東側柱列が3.9m、柱間寸法は、北側柱列が東から2.5m、2.3m、2.3mである。柱穴は８基検出された。柱穴の平面形は円ないし楕円で、直径は約30cmである。柱穴の深さは18～40cmと幅があるが、主体は20～30cmである。すべての柱穴で柱痕跡を確認し、柱は円形で直径は10cm程度である。建物の方向は南側柱列でE－5°－Sである。

【SB2掘立柱建物跡】（第20図）

２区北の南西部で検出された。３間×1間の東西棟である。SB1と位置的に重複しているが、切り合いはなく新旧関係は不明である。建物の規模は、北側柱列で総長が6.9m、東側柱列が4.1m、柱間寸法は、北側柱列で東から2.1m、2.4m、2.4mである。柱穴は8基検出された。柱穴の平面形は円ないし楕円で、直径は約40cmである。柱穴の深さは31～63cmで、50cm前後が主体となる。P2～7で柱痕跡を確認し、柱は円形で直径14～16cmである。建物の方向は南側柱列でE－6°－Sである。

【SB3掘立柱建物跡】（第21図）

２区北の南東部で検出された。３間×1間の東西棟である。SB4と重複する位置にあり、SB3のP3とSB4のP3は切り合っている。切り合う柱穴の深さは、30cmである。SB3の柱穴は、30～40cmの深さを有するものが多く、一方で、SB4の柱穴は、20cmを下回るものが主体である。P3に近接する柱穴の深さや、柱穴底面の標高値を考慮しても、SB3の柱穴との共通点が多い。したがって、P3はSB3を構成する柱穴と考えられ、SB3はSB4よりも新しいと言える。

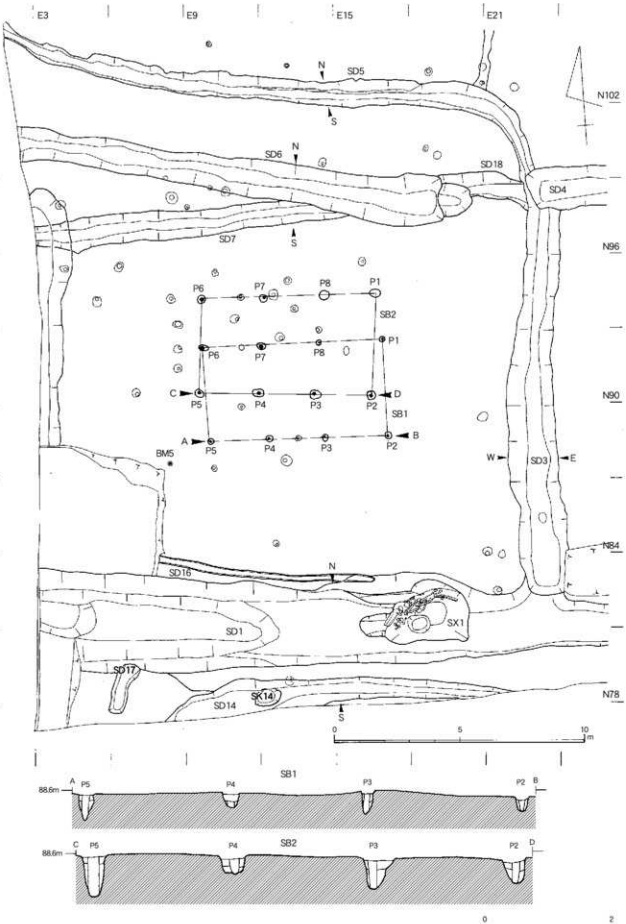
建物の規模は、南側柱列で総長が8.4m、東側柱列が4.4m、柱間寸法は東から2.9m、2.8m、2.7mである。柱穴は8基検出された。柱穴の平面形は円ないし楕円で、直径は約30cm、深さは約40cmである。P2以外の柱穴で柱痕跡を確認し、柱は円形で直径は12～20cmである。建物の方向は南側柱列でE－10°－Sである。

【SB4掘立柱建物跡】（第21図）

２区北の南東部で検出された。３間×1間の東西棟である。SB3とP3が重複し、先述したとおり柱穴の特徴からSB3よりも古い。建物の規模は、南側柱列で総長6.7m、東側柱列が3.9mである。柱間寸法は、南側柱列で東から2.1m、2.4m、2.2mである。柱穴は8基検出された。柱穴は、平面が円・楕円・隅丸方形で直径は20～30cmである。柱穴の深さは約30cmである。P1・4～7で柱痕跡を確認し、柱は円形で直径10～20cmである。建物の方向は、南側柱列で真東になる。

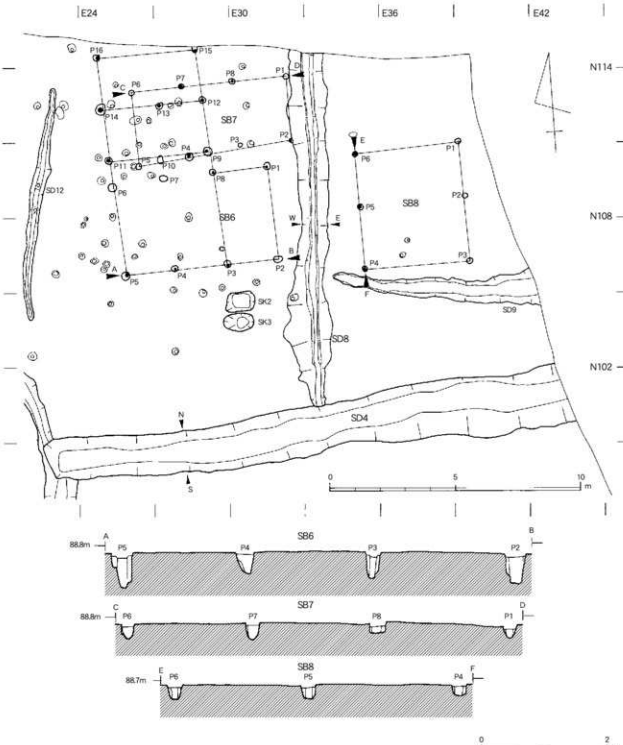
【SB5掘立柱建物跡】（第21図）

２区北の南東部で検出された。2間×1間の南北棟である。建物の北西部分は、SB3・4と位置的に重複している。これらに直接の切り合いはないが、SB5の柱穴に柱材が残るものがあることから、最も新しい建物の可能性がある。建物の規模は、西側柱列が総長7.2m、南側柱列が5.0mで、柱間寸法



第20図　SB1・2　掘立柱建物跡

第21図　SB3・4・5　掘立柱建物跡



第22図　SB6・7・8掘立柱建物跡

は、西側柱列で北から3.7m、3.5mである。6基の柱穴を検出した。柱穴の平面形は円ないし楕円で、直径は約30cmである。柱穴の深さは20～40cmになる。P3以外の柱穴で柱痕跡を確認し、P2では直径15cmの円形の柱材を検出した。建物の方向は、西側柱列でN－5°－Eである。

【SB6掘立柱建物跡】（第22図）

2区北の北東側で検出された。身舎は3間×2間で、北側と東側の南部で1間分の張り出しが付く。

桁行の北から２間目には間仕切りの柱がある。身舎の規模は、西側柱列が総長6.5m、南側柱列が4.1mである。柱間寸法は、西側柱列が北から2.0m、1.0m、3.5mで、南側柱列が東から2.1m、２mである。柱穴は16基検出された。柱穴の平面形は円・楕円・隅丸方形で、直径は約30cmである。柱穴の深さは約40cmである。P6以外の柱穴で柱痕跡を確認し、柱は円形で直径10～20cmである。P7・11・14では底から柱材が検出された。建物の方向は西側柱列でN－4°－Wである。

【SB7掘立柱建物跡】（第22図）

３区北の北東部で検出された。3間×1間の東西棟である。SD8と重複しこれより新しい。建物の規模は、南側柱列で総長6.2m、西側柱列が2.9m、柱間寸法は南側柱列で東から2m、2.1m、2.1mである。柱穴は8基検出された。柱穴は平面が円ないし楕円形で、直径は14～26cmである。柱穴の深さは20～30cmである。P1・4・7・8で柱痕跡を確認し、柱は円形で直径12～16cmである。建物の方向は南側柱列でE－4°－Nである。

【SB8掘立柱建物跡】（第22図）

２区北の北東端で検出された。2間×1間の南北棟である。建物の規模は、東側柱列で総長4.8m、南側柱列が4.2mで、柱間寸法は東側柱列で北から2.2m、2.6mである。柱穴は6基検出された。柱穴の平面形は円ないし楕円で、直径は約20cm、柱穴の深さは約20cmである。P4～6で柱痕跡を確認し、柱は円形で直径13～15cmである。建物の方向は西側柱列で真北である。

【SB9掘立柱建物跡】（第23図）

２区北の北側で検出された。4間×2間の東西棟である。建物の規模は、南側柱列で総長7.9m、東側柱列で総長3.6mである。柱間寸法は、南側柱列で東から3m、1.7m、1.6m、1.6m、東側柱列で北から1.9m、1.7mである。柱穴は11基検出された。柱穴は、平面が円・楕円・隅丸方形で、直径は約30cmである。柱穴の深さは、17～43cmで20～30cmが中心となる。P3・4以外の柱穴で柱痕跡を確認し、柱は円形で直径10～15cmである。建物の方向は南側柱列で真東である。

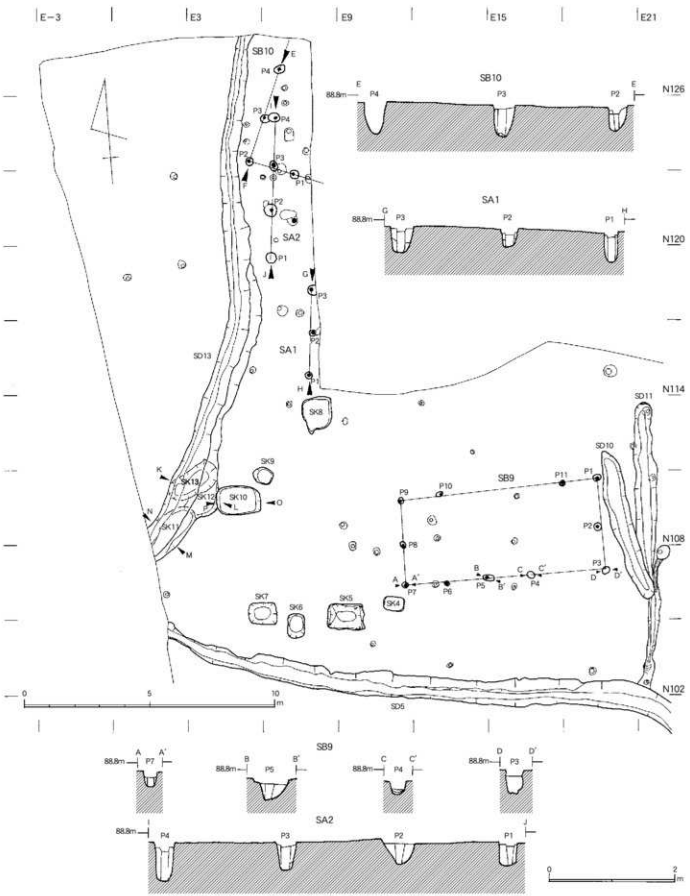
【SB10掘立柱建物跡】（第23図）

2区北の北西端で検出された。南北2間以上、東西1間以上の建物で、建物の北と東側は調査区外に延びている。検出した範囲での平面規模は、西側柱列で総長4m以上、南側柱列で1.9m以上である。柱間寸法は、西側柱列で北から2.1m、1.9mである。柱穴は4基検出した。柱穴は平面が楕円ないし隅丸方形で、直径30～40cmである。柱穴の深さは35～52cmである。すべての柱穴から柱痕跡が確認され、柱は円形で直径10～12cmである。建物の方向は西側柱列でN－24°－Eである。

B. 柱列

【SA1柱列】（第23図）

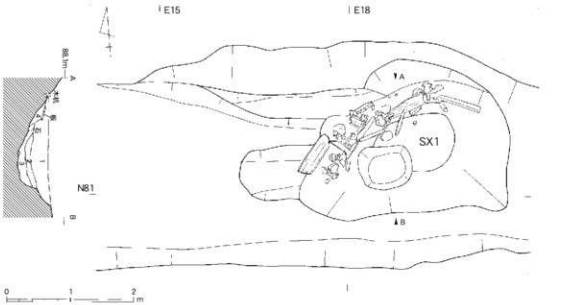
２区北の北西部で検出された。南北方向に延びる2間の柱列跡である。規模は総長3.4mで、柱間寸法は北から1.7m、1.7mである。柱穴は、円もしくは楕円形で、直径27～40cm、深さ30～50cmである。すべての柱穴から柱痕跡が確認され、柱は円形で直径14～16cmである。



第23図　SB9・10掘立柱建物跡、SA1・2柱列跡

【SA2柱列】（第23図）

２区北の北西端で検出された。南北方向に延びる３間の柱列跡である。総長は5.7mで、柱間寸法は北から1.9m、1.8m、1.9mである。柱穴は円ないし楕円形で、直径約40cm、深さ39～65cmである。すべての柱穴で柱痕跡を確認し、柱は円形で直径14～16cmである。



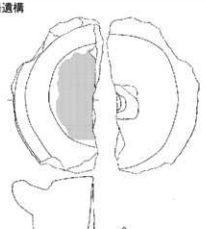
層	土　色	土　質	混 入 物 等	備　考
1	黒褐色（10YR2/2）	シルト質粘土	地山粒をごくわずかに含む。スクモ（植物遺体）を多く含む。	
2	黒褐色（10YR3/2）	粘土	スクモ（植物遺体）を含む。	
3	黒褐色（10YR2/2）	粘土	スクモ（植物遺体）を含み、細砂を均質に少量含む。	
4	黒褐色（10YR3/1）	シルト質粘土	小礫を少量含む。	

第24図　SX1水場遺構

C. 水場遺構

【SX1水場遺構】（第24・25図）

２区北の南端に位置する。SD1を掘る際に、その北壁に東西3m、南北40cm程度の小さな平場が作られている。そして平場の東側に、SD1の底面を掘り込んで長軸3.5m、短軸2.8m、深さ57cmの不整な楕円形の深みが作り出されている。その北壁から東壁にかけては、数本の杭を打ち込み、その間にしがらみ状に横木をわたして裏込め石を詰めており、平場に接続するテラス状の足場を作り出していたと考えられる。西側には東西1.04m、上幅84cm、下幅44cm程度の溝状の掘り込みがなされ、深みに接続している。溝状の掘り込みは東に傾斜しており、深みに水を引き入れることを目的としたものと考えられる。堆積土には、スクモを含む黒褐色土が4層確認され、すべて自然流入土であった。SD1を掘り込む一連の作業の中で作られた「洗い場」と考えられる。



No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	写真図版	登録No.
1	SX1	裏込め	石製品	茶臼・下臼	安山岩製。直径27.2cm　高さ10.1cm　臼径17cm　台座径21.3cm　臼面に良化物付着。	7－1	UN01

第25図　SX1水場遺構出土遺物

遺物は堆積土中から土師器片１点と植物遺体が、裏込め部分からは礫と一緒に破損した茶臼の下臼

（第25図）が出土した。

D．溝跡

２区北では合計15条の溝跡が検出されている。主要なもののみ記述し、それ以外については第11表に特徴をまとめた。

【SD1溝跡】（第20・26図）

２区北の南端を東西に走る溝である。溝は東西とも調査区外に延びる。SD3と接続し、SD2・16より新しく、SD17よりも古い。検出長は25.4m、上幅1.4～3.9m、下幅0.9～2.4m、深さは14～94cmである。東に行くにつれ浅くなり、東側の続きは、1区や5トレンチで確認できなかった。断面形は、西端がU字形でそれ以外の場所では逆台形になる。底面はほぼ平坦である。

SD1は東西に直線的になっており、周囲の溝と平行あるいは直行する配置となる。自然流路と考えられるSD2と同位置にあり、SD2を改修したものである可能性がある。

堆積土は、西壁で５層、溝の中央部分で4層認められた。西壁の堆積土は、小礫、細砂を含む黒褐色・黒色のシルト質粘土で、溝の中央部分の堆積土は、地山ブロックを含む黒褐色シルト、黒色粘土である。いずれの堆積土も自然流入土である。遺物は、底から12世紀後半～13世紀初頭の龍泉窯産の青磁（第26図1）、銅銭、手火（第26図5）、曲物の破片、堆積土から陶器の擂鉢（第26図4）が1点ずつ出土した。

【SD3溝跡】（第20・27図）

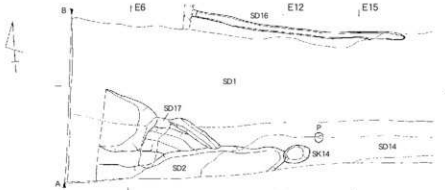
２区北の南半の中央を南北に走る溝である。SD1・4・5と接続する。SD18と重複するが新旧関係については不明である。底面からはピットが1基検出された。検出長は15.4m、上幅1.2～2m、下幅0.3～1.1mである。深さ8～22cmで、南に傾斜する。断面は皿形で底面はほぼ平坦である。堆積土は2層確認され、いずれも自然流入土である。遺物は出土していない。

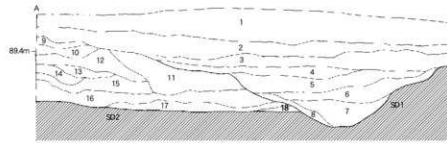
【SD4溝跡】（第22・27図）

2区北の東側の中央を東西に走る溝である。SD3・5・8と接続する。東端は検出されておらず、東側の調査区外へと延びる。検出長は20.7m、上幅1.6～2.4m、下幅0.5～1.1mである。深さ33～53cmで、西に傾斜する。断面は逆台形で、底面は緩やかにくぼむ。堆積土は4層確認され、すべて自然流入土である。遺物は堆積土から瀬戸美濃産の灰釉の丸皿１点（第27図4）、漆つぎの痕跡がある鉄釉の壺の破片６点（第27図6～8）、石核1点、確認面から砥石が1点出土した。

【SD5溝跡】（第20・27図）

２区北の中央部で検出された。SD3とSD4の接続部分から北西方向へ直線的に延び、E-21・N-102付近で西側に屈曲して、緩やかに湾曲しながら北西方向へ走る溝である。溝の西端は調査区外へ延びる。SD11・18と重複するが、両溝の堆積土が薄く新旧関係は不明である。検出長は23.4mで、上幅は0.3～1.1m、下幅は0.2～0.4mである。深さは10～26cmで、東に傾斜する。断面はU字形で底面は緩やかにくぼむ。堆積土は２層確認され、いずれも自然流入土である。遺物は、堆積土から土師器１点、磁器１点（第27図1）、底面から石臼１点（第27図2）が出土した。





SD1・2

層	土色	土質	混入物等	備考	層	土色	土質	混入物等	備考
1			現水田耕作土		10	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土	細砂を互層に含む。	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	細砂を均質に少量含む。		11	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山大ブロックを多く含む。	
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト質粘土		旧耕作土	12	暗褐色(10YR3/3)	シルト		
4	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	砂、小礫を少量含む。		13	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒、小ブロックを含む。砂を均質に含む。	SD2堆積土
5	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	下面に細砂を含む。		14	黒褐色(10YR2/2)	シルト質粘土		
6	黒色(10YR2/1)	シルト質粘土	ラミナ状に細砂を含む。	SD1堆積土	15	黒色(10YR2/1)	シルト	地山ブロックを少量含む。砂を均質に多く含む。	
7	黒褐色(10YR3/1)	シルト質粘土	地山粒を少量含む。		16	黒色(10YR1.7/1)	粘土	地山粒をごく少量含む。	
8	黒色(10YR2/1)	シルト質粘土	地山ブロックを含む。		17	黒褐色(2.5Y3/2)	シルト	細砂を多く含む。	
9	暗褐色(10YR3/3)	シルト	細砂を少量含む。	SD2堆積土	18	黄灰色(2.5Y4/1)	シルト質粘土	地山ブロックをやや多く含む。	

SD14

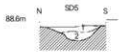
層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを含む。	
2	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山小ブロックを少量含む。	

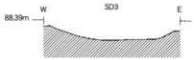
SD1

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山小ブロックを含む。炭化物粒をわずかに含む。	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロックを含む。	
3	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	地山ブロックをやや多く含む。	
4	黒色(10YR2/1)	粘土	地山小ブロックを少量含む。	

No.	遺構	層位	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録No.
1	SD1	底	青磁	碗	龍泉窯	内面に文様あり。	6−13	UN09
2	SD2	15層	陶器	鉢			6−11	UN11
3	SD2	堆積土	陶器	鉢	在地	残存1/6　底径(19.8cm)　内面摩滅	6−1	UN10
4	SD1	堆積土	陶器	擂鉢		10条単位の卸目、内面摩滅。UN67と同一個体	6−5	UN08
5	SD1	底	木製品	手火	−	長さ4.3cm　幅1.3cm　厚さ0.4cm	−	UN68
6	SD2	底	石製品	石鉢	−	安山岩製。	−	UN12

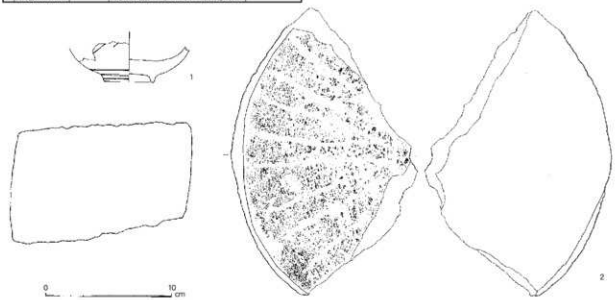
第26図　SD1・2・14溝跡と出土遺物



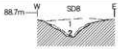


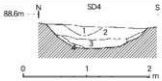
SD5

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)		地山小ブロック、酸化鉄を少量含む。	
2	黒褐色(10YR3/1)		酸化鉄を少量含み、地山ブロックを底部付近に含む。	



No.	遺構	層位	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録No.
1	SD5	堆積土	磁器	碗	肥前	「くらわんか」	6−12	UN21
2	SD5	底	石製品	石臼・下臼	−	安山岩製。直径（28cm） 高さ10cm	7−3	UN22



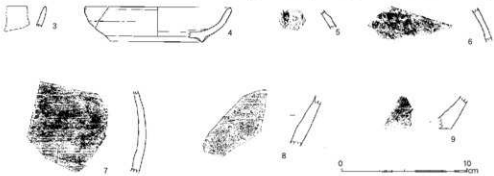


SD8

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	にぶい黄褐色シルト土を薄土部に含む。植物質をわずかに含む。	
2	黒色(10YR2/1)	シルト	地山ブロックを多く含む。	

SD4

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(7.5YR2/3)	粘質シルト	地山粒をそこくわずかに含む。	
2	黒色(10YR2/1)	シルト	地山粒・小ブロックを少量含む。	
3	黒褐色(10YR3/1)	粘土	地山ブロックを含む。	
4	黒色(10YR1.7/1)	粘土	地山小ブロック・ブロックを含む。	



No.	遺構	層位	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録No.
3	SD8	1層	陶器	碗	大堀相馬	灰釉	−	UN23
4	SD4	堆積土	陶器	皿	瀬戸美濃	灰釉 口径（11.8cm） 高台径（7.4cm） 器高2.75cm	6−10	UN14
5	SD8	堆積土	陶器	壺	瀬戸美濃	底母壊。自然釉。耳部の剥がれた痕跡あり。以下同一個体。	6−16	UN25
6	SD4	堆積土	陶器	壺	瀬戸美濃	底母壊。自然釉。	6−18	UN19
7	SD4	堆積土	陶器	壺	瀬戸美濃	褐釉。漆つぎの痕跡あり	6−17	UN15
8	SD4	堆積土	陶器	壺	瀬戸美濃	褐釉。	6−20	UN16
9	SD8	堆積土	陶器	壺	瀬戸美濃	褐釉。	6−21	UN24

第27図　SD5・3・8・4溝跡と出土遺物

【SD8溝跡】（第22・27図）

２区北の北東部分に位置し、南北に走る溝である。溝の南端はSD4と接続し、北端は調査区外へ延びる。SB7と重複しこれよりも古い。また、溝の底面から数基のピットが検出された。検出長は14.0mで、上幅0.5～2m、下幅0.1～0.3mである。深さ14～32cmで、南に傾斜する。断面は底面幅の狭い逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は２層確認でき、いずれも自然流入土である。遺物は、堆積土からSD4出土のものと同一個体である鉄釉の壺破片３点（第27図5・9）、１層上部から大堀相馬の灰釉碗の破片が１点（第27図3）出土した。

【SD6溝跡】（第20・28図）

２区北の中央から北西へ直線的に走る溝で、調査区外へ延びる。SD7・18と重複し、SD7よりも新しい。SD18との新旧関係は不明である。検出長は16.8mで、上幅は0.9～2.0m、下幅は0.3～0.9mである。深さは41～56cmで、西に傾斜する。断面は逆台形で、底面は緩やかにくぼむ。堆積土は３層確認され、いずれも自然流入土である。遺物は、堆積土から外面に押印のある無釉陶器１点（第28図1）と灰釉で口縁部が鉄釉の陶器1点（第28図2）の計２点、石核と剥片が1点ずつ、鉄滓多数、確認面から磁器と石鏃（第28図3）が１点ずつ、剥片２点が出土した。

【SD7溝跡】（第20・28図）

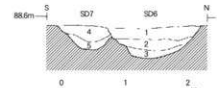
２区北の中央から南西方向へ直線的に走る溝で、西側は調査区外へ延びる。SD6・15と重複しこれらよりも古い。検出長は17.3mで、上幅は0.8～1.3m、下幅は0.3～0.6mである。深さは39～47cmで西に傾斜する。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層確認され、いずれも自然流入土である。遺物は堆積土から剥片1点と鉄滓、確認面から磁器1点が出土した。

【SD13A・B溝跡】（第23・28図）

２区北の中央やや北側の調査区西壁から北東方向へ緩やかに湾曲しながら走る溝である。南北端は検出されておらず、両端とも調査区外へ延びる。1度掘り直されており、SD13A→SD13Bという変遷になる。SD13A・Bは、SK10～13と重複し、SK11～13より新しく、SK10よりも古い。SD13Aは検出長12.7mである。大部分をSD13Bに切られているため、規模・形状は不明である。遺物は堆積土から鉄滓が出土した。SD13Bは検出長21.6mで、上幅は0.4～1.1m、下幅は0.1～0.3m、深さは13～36cmである。断面は逆台形で、底面は緩やかにくぼむ。堆積土は4層確認され、すべて自然流入土であった。遺物は堆積土から土師器２点、剥片１点、砥石１点（第28図4）、確認面から陶器１点が出土した。

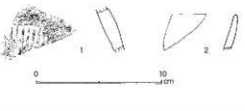
【SD2溝跡】（第26図）

２区北の南西端に位置し、南東へ延びる。SD1・14・17、SK14と重複し、これらよりも古い。検出長は8.8mで深さは51～73cmである。底面には複数の流路が認められ、一定の形状を有していない。堆積土には、砂を均質に含む層や砂と互層になる層があり、SD2は旧河道の自然流路と考えられる。堆積土は10層確認された。遺物は堆積土から中世陶器の鉢の破片２点（第26図2・3）、底から石鉢（第26図6）が１点出土した。

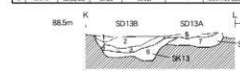


SD6・7

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	地山小ブロックを含む。	SD6堆積土
2	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	砂をわずかに含む。	
3	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	砂をわずかに含む。	
4	黒色(10YR2/1)	粘質シルト		SD7堆積土
5	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山ブロックを多く含む。	

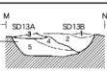


No.	遺構	層位	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録No.
1	SD6	堆積土	陶器	甕	東海	押印あり。一部、自然釉あり。	6—2	UN29
2	SD6	堆積土	陶器	鋼	相馬系	灰釉。口縁端部は鉄釉。	—	UN30
3	SD6	確認面	石器	石鏃	—	安山岩製。長さ7.0cm 幅9.4cm 厚さ1.6cm	6—24	UN27



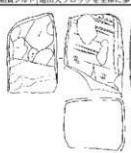
SD13A・B　SK12・13

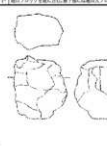
層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	砂質シルト	地山小ブロック、酸化鉄を含む。	SD13B堆積土
2	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	炭化物、酸化鉄を含む。	
3	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒、酸化鉄を含む。	
4	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	地山ブロック、小ブロックを含む。	SD13A堆積土
5	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山粒、小ブロック、酸化鉄、炭化物を含む。	SD13A堆積土
6	黒色(10YR2/1)	シルト	地山を僅に多く含み、植物遺体、木を含む。	SK13堆積土
7	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	地山大ブロックを全体に多く含む。	SK12堆積土



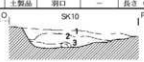
SD13A・B・SK11

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	砂質シルト	地山小ブロック、酸化鉄を含む。	SD13B堆積層
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒、小ブロック、酸化鉄を含む。	
3	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山粒、小ブロック、炭化物、酸化鉄を含む。	SD13A堆積層
4	黒褐色(10YR3/2)	砂質シルト	地山小ブロックを含む。	SK11堆積層
5	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロックを僅に含む。炭1層には地山ブロックを僅に含む。	



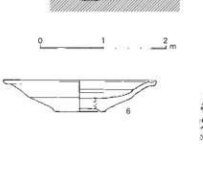


No.	遺構	層位	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録No.
4	SD13B	堆積土	石製品	硯石	—	凝灰岩製。長さ（6.3cm） 幅4.7cm 厚さ3.9cm 研磨面数3	6—22	UN38
5	SK13	堆積土	土製品	羽口	—	長さ（5.0cm） 表面に溶着	—	UN46



SK10

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山小ブロックを含む。	
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを少量含む。	
3	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山ブロックを多く含む。	



No.	遺構	層位	種別	器種	産地	特徴	写真図版	登録No.
6	SK10	堆積土	陶器	皿	唐津	灰釉、高台露胎 残存1/3 口径（12.3cm） 底径（4.1cm） 器高2.2cm	6—7	UN43
7	SK10	堆積土	陶器	甕			6—4	UN42
8	SK10	堆積土	石製品	硯石	—	凝灰岩製。長さ8.2cm 幅3.0cm 厚さ2.6cm 研磨面数4	6—23	UN45

第28図　SD6・7・13AB溝跡と出土遺物

【SD14溝跡】（第26図）

２区北の南端に位置し、SD1の南側を東西に走る溝である。東西とも調査区外へ延びる。SD2、SK14と重複し、これらよりも新しい。検出長は13.5mで、上幅は0.7～1.02m、下幅は0.3～0.44m、深さは21～50cmである。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は2層確認され、いずれも自然流入土である。遺物は出土していない。

E. 土壙

２区北からは合計14基の土壙が検出されている。主要なもののみ記述し、それ以外については第12表に特徴をまとめた。

【SK10土壙】（第23・28図）

調査区北西部で検出した。SD13A・B、SK12と重複し、これらより新しい。平面は隅丸方形で、規模は、長軸1.74m、短軸1.14m、深さは30cmである。断面は逆台形で、底面は緩やかにくぼむ。堆積土は3層確認でき、いずれも黒褐色シルトである。堆積土から土師器1点、陶器2点（内1点は唐津産で17世紀）（第28図6・7）、磁器1点（肥前・18世紀）、砥石1点（第28図8）が出土した。

【SK11土壙】（第23・28図）

調査区北西に位置し、SD13Bの底面で検出した。遺構の南端は調査区にかかっており、全体を検出できていない。SD13A・Bより古く、SK12よりも新しい。平面は楕円形で、規模は長軸2.3m以上、短軸1.2m以上、深さ36cmである。断面は逆台形で、底面はほぼ平坦である。堆積土は２層確認できた。遺物は堆積土から壁土、鉄滓が出土した。

【SK13土壙】（第23・28図）

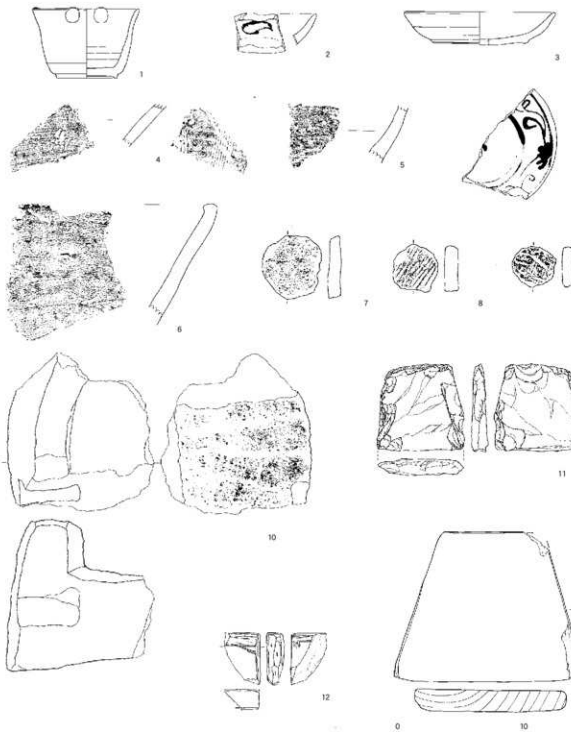
調査区北西に位置し、SD13Bの底面で検出した。SD13A・Bより古く、SK12より新しい。平面は楕円形で、規模は長軸2.1m、短軸1.04m、深さ43cmである。断面は逆台形で、底面は緩やかにくぼむ。堆積土は３層確認でき、2・3層には植物遺体や木片が含まれていた。遺物は堆積土から土師器1点、羽口1点（第28図5）が出土した。

F. ピット

２区北からは多数のピットが検出された。その中には遺物の出土したものや柱材の残るものも認められた。そこで、それらを整理するために、便宜的にA～Dの小区を設定した。SD1・3・5の範囲内がA区、SD3・4の範囲内がB区、SD4・8・12の範囲内がC区、SD5・12の範囲内がD区である。ピットの番号は、小区ごとに1から付けている。

G. その他の出土遺物

上記以外の遺構や遺構確認面、表土から出土した遺物を第29図にまとめた。11以外は２区北出土である。１は志野の小鉢で、口縁に4単位の輪花が認められる。高台裏には重ね焼きの痕跡が3ヵ所ある。全体に長石釉が施されている。時期は16世紀末～17世紀初頭である。2、3は志野織部の丸皿



第29図　その他の出土遺物

No.	遺構	層位	種別	器種	産地	特　徴	写真図版	登録No.
1		確認面	陶器	小鉢	瀬戸美濃	志野、輪花（4単位）、長石釉、ほぼ完形　口径8.4cm　高台径4.7cm　器高5.5cm	6−15	UN59
2		確認面	陶器	丸皿	瀬戸美濃	志野織部、鉄絵、長石釉。	6−9	UN58
3	CIKP9	確認面	陶器	丸皿	瀬戸美濃	志野織部、鉄絵、長石釉。　残存1/3　口径（12.0cm）　高台径（7.1cm）　器高2.5cm	6−8	UN57
4		表土	陶器	擂り鉢	在地	SD1出土擂鉢（UN08）と同一個体。	6−6	UN67
5	SD12	確認面	陶器	鉢	在地	内面摩滅	6−3	UN36
6		確認面	陶器	鉢	在地	内面摩滅	−	UN60
7	SK5	堆積土	陶器		−	陶器製。周囲を打ち欠いて円形を作り出す。	−	UN41
8	SD11	堆積土	須恵器		−	須恵器製。周囲を打ち欠いて円形を作り出す。	−	UN35
9	SD10	堆積土	土製品		−	縄文土器製。周囲を打ち欠いて円形を作り出す。	−	UN34
10	C・P1	埋土	石製品	石臼・上臼	−	安山岩製。高さ12.3cm　臼面に炭化物付着	7−2	UN47
11	2区中央	確認面	石器	石鍬	−	安山岩製。長さ6.9cm　幅6.9cm	6−25	UN61
12		側溝内	石製品	砥石	−	厚さ1.3cm	−	UN63
13		確認面	木製品	下駄	−	塩卸茶産下駄の歯　長さ11.8cm　幅14.3cm　厚さ1.7cm	−	UN62

第29図　その他の遺物

で別個体である。３の高台は削り出しである。両者とも内面に鉄絵が認められる。時期は17世紀初頭である。４は、陶器の擂鉢で、SD1出土の第26図4と同一個体と考えられる。5、6は陶器で、在地産の鉢である。7～9は、周囲を打ち欠いて円形を作り出したものである。７は陶器、８は須恵器、９は縄文土器である。10は石臼の上臼、11は2区中央の確認面から出土した石鏃、12は砥石、13は陰刻差歯下駄の歯である。

3．考察

今回の調査の中で、遺構・遺物がまとまって出土した2区北について、遺物、遺構の年代と性格について考察を行う。

（1）遺物と遺構の年代

今回の調査で出土した遺物は118点であり、そのうち２区北の遺物は全体の91％である108点となる（第７表）。出土遺物には、陶器、磁器、土師器、須恵器、縄文土器、土製品、石器、石製品、木製品、銭貨、鉄滓などがあり、その中で陶磁器、土器類が主体を占める。なお、これらのほとんどは破片資料である。

陶磁器の大半は溝の堆積土から出土した。陶器には、瀬戸美濃・志野織部・唐津の丸皿、志野の小鉢、瀬戸の祖母壊の壺、中世陶器の甕、擂鉢、大堀相馬の鉢と碗がある。磁器には、中国の龍泉窯産の青磁碗、肥前の碗があり、このほかに確認面から肥前の皿の破片が1点出土している。

石製品には、茶臼、石臼、石鉢、砥石がある。茶臼は下臼のみで、破損後にSX1水場遺構の裏込めに用いられている。木製品には、下駄の歯、手火、曲物の側板がある。下駄の歯は、陰刻差歯下駄の歯である。銅製品として銅銭が2点出土したが、いずれも状態が悪く銘は見えない。そのほかに、調査区の西端に位置するSD6・7・13Aから多量の鉄滓が、SK11から羽口と鉄滓が出土している。土師器は、比較的多く出土しているが、いずれも細かい破片資料であり、遺構の年代を直接示すものではないと判断した。

上記の遺物のうち、年代がある程度分かるものを第8表に整理した。SD1の底からは12世紀後半～13世紀初頭の青磁碗が出土した。SD4の堆積土では16世紀中～後葉の瀬戸美濃産の丸皿が、SD4とSD8の堆積土からは、祖母壊と考えられる鉄釉の壺破片が出土した。時期は15世紀後半～16世紀と考えられる。SD8の１層上部からは18世紀～19世紀大堀相馬産の灰釉碗が出土した。C区のP9からは、17世紀初頭の志野織部丸皿が出土した。SK10では、17世紀初頭の唐津産丸皿と、18世紀の肥前産の磁器が堆積土から出土した。SD6は、堆積土から中世陶器と18世紀～19世紀の大堀相馬産の陶器が出土している。

遺物の年代から、SD4とSD8は16世紀～17世紀に機能し、18世紀～19世紀には埋没していたと考えられる。後述するように、SD1・3・4・5・8は接続しており、堆積土も共通する。そのため、機能時期と埋没時期も共通していたと考えることができる。したがって、SD1・3・5は、SD4・8と同じく16世紀～17世紀代の時期に機能したものと考えられる。区画内の建物跡についても、溝と同様の時期の所産として理解できる。また、SD8を切るSB7については、18世紀以降と推測される。

SD6やSD7、SD13Aで出土した鉄滓が、SD1・3・4・5・8からは出土しておらず、SD6・7・13Aは、SD1・3・4・5・8とは異なる時期のものであると考えられる。具体的な機能時期については、出土遺物が少なく不明である。

第7表　出土遺物集計表(点数)

調査区	遺構名	層　位	遺物										計
			縄文	弥生	土師器	須恵器	陶器	磁器	石　器	石製品	そ　の　他		
2区中央		表土			1		1						2
		確認面			2				1				3
小　計					3		1		1				5
2K北	SD1	堆積土					1						1
		底						1			銅銭1、木製品(曲物破片)		3
	SD2	確認面						3					3
		堆積土					2						2
		底								1(石鉢)	木製品(手火1)		2
	SD4	確認面								1(硫石)			1
		堆積土			2		6		1				9
	SD5	堆積土			1			1					2
		底								1(石臼)			1
	SD6	確認面							3	1(硫石)			4
		堆積土					2		1		鉄滓		3
	SD7	確認面						1					1
		堆積土							1		鉄滓多数		1
	SD8	堆積土					4						4
	SD10	堆積土	1					1					2
	SD11	堆積土					1						1
	SD12	確認面			2		2		1		鉄滓		5
	SD13A	堆積土									鉄滓		
	SD13B	確認面					1						1
		堆積土			2				1	1(硫石)			4
	SD15	堆積土					1		1				2
	SX1	堆積土			1						植物遺体		1
		裏込め								1(茶臼)			1
		構造物									木製品6(杭2)		6
	SK5	堆積土					1						1
	SK3	堆積土			1						木		1
	SK7	堆積土			1	1							2
	SK10	堆積土			1		2	1		1(硫石)			5
	SK11	堆積土									壁土1		1
	SK13	堆積土			1				1		羽口1,壁土1,植物遺体		4
	A区P1	埋土			1				1				2
	A区P3	埋土									植物遺体		
	B区P1										柱材		
	C区P11	埋土								1(石臼)			1
	C区P2	埋土									柱材 銅製品1		1
	C区P7										柱材		
	C区P9	埋土					1						1
	D区P1	埋土									鉄滓,植物遺体		
	D区P5										鉄滓,植物遺体		
	D区P6										礎板		
		表土					1	1			銅銭1		3
		確認面	2		1	2	5	2	9	1	木製品(下駄の歯1)		23
		排水溝								1(硫石)			1
不　明				1		1							2
小　計			3	1	14	4	30	11	20	10	15		108
1トレンチ		確認面		1	1								2
5トレンチ		表土						1					1
		確認面			2								2
計			3	2	20	4	31	12	21	10	15		118

第8表　陶磁器の年代

遺構	層位	種別・器種	産　地	年　代	登録番号	図版番号
SD1	底	青磁・碗	中国	12世紀後半～13世紀初頭	UN09	26－1
SD4	堆積土	陶器・丸皿	瀬戸美濃	16世紀中～後葉	UN14	27－4
SD4・8	堆積土	陶器・壺	瀬戸美濃	15世紀後半～16世紀	UN15～19・24～26	27－5～9
SD8	1層	陶器・碗	大堀相馬	18世紀～19世紀	UN23	27－3
C区P9	確認面	陶器・丸皿	瀬戸美濃	17世紀初頭	UN57	29－3
SD5	堆積土	磁器・碗	肥前	18世紀後半	UN21	27－1
SK10	堆積土	陶器・丸皿	唐津	17世紀初頭	UN43	28－6
		磁器・碗	肥前	18世紀	UN44	
SD6	堆積土	陶器・鉢	大堀相馬	18世紀～19世紀	UN30	28－2
		陶器・甕	東海	中世	UN29	28－1
確認面		陶器・小鉢	瀬戸美濃	16世紀末～17世紀初頭	UN59	29－1
確認面		磁器・皿	肥前	18世紀	UN32	－

(2) 遺構の性格

溝跡は、同位置の改修を含めて19条検出された。SD1・3・4・5・8は接続しており、これらは調査区を大きく3分割し、いずれもその内部には1棟以上の建物跡が認められる。建物跡と溝跡の方向に大きな相違がないことから、これらの溝跡は、区画溝として機能していたと考えることができる。また、SD4・5・8は、それぞれ各溝の接続部分に向かって傾斜がつけられており、SD3の底面はSD1に向かって傾斜する。したがって、SD1・3・4・5・8は区画溝としての機能とともに、排水の機能を兼ねていた可能性も考えられる。

各区画内の様相について検討する。SD1・3・5によって区画される範囲は方形で、規模は南北21.5m、東西18.5m以上である。この中にはSB1とSB2がある。ほぼ同位置に同規模で建て替えが行われている。SD3とSD4に区画される範囲は方形で、規模は南北14m、東西23m以上である。区画内には、SB3～5がある。SB5とSB3・4との関係は不明であるが、少なくとも1回以上の建て替えが行われている。SD4・5・8の区画範囲は南東部がやや張り出す方形で、規模は南北25m以上、東西31m以上である。区画内にはSB6・7・9・10が認められる。SB7は、SD8を切っており、SD8埋没後の建物跡である。この区画内は、前2者に比べて面積が広く、建物の数が多い。また、SB6とSB10の周辺にはピットが集中する。特に、SB10とその周囲のピットは、掘り方の規模が大きく、この範囲に主屋に相当する建物がある可能性も考えられる。SD4とSD8によって区画される範囲は方形で、規模は南北13.5m以上、東西8m以上である。建物はSB8のみで、建て替えも見られず、ピットの検出数もごくわずかである。

中近世の屋敷跡が見つかっている多賀城市山王遺跡（宮城県教育委員会1997）や仙台市中野高柳遺跡（宮城県教育委員会2003a・2004a・2005）、古川市権現山遺跡（古川市教育委員会2004）では、区画溝の内部に建物と井戸によって屋敷が構成されているが、鍛冶屋敷遺跡の2区北では、井戸に類する遺構は認められなかった。しかし、溝による明瞭な区画と車地蔵遺跡3区北でも検出された水場遺構があることから、2区北は居住地として利用されていたと推測される。

多賀城市の新田遺跡では、大溝で区画され、大きな主屋と副屋、井戸などで構成される屋敷に接続して、小溝で囲まれた内部に、4間×1間の主屋と3間×1間の建物、井戸で構成される小規模な屋敷跡が認められた（千葉1992）。大溝で囲まれた敷地内は上級の武士の、小溝で囲まれた小規模な屋敷は下級の武士の居住地であったことが推測されている。これらの屋敷の時期が13世紀ということで、2区北の建物の時期と大きく異なるが、小溝の内部に小規模の建物跡があるという屋敷の構成は類似する。2区北は丘陵の末端部に位置し、調査区北側のSB10周辺に規模の大きなピットが集中することから、屋敷の範囲は北に続くことが推測される。2区北で検出された区画溝とその内部にある建物跡は屋敷の一部であり、これらは併存していることから、全体で一つの居住地として利用されていたと考えられる。遺構からは、瀬戸美濃の壺や丸皿、志野織部の丸皿、小鉢、茶臼と、相対的に高価なものが出土している。鍛冶屋敷遺跡2区北で出土した遺物の組成は、遺跡の200m北東に位置する車地蔵遺跡3区北SX28の遺物組成と類似する。遺構の機能時期についても大きな差は認められないことから、両遺跡で確認された屋敷は、なんらかの関係性を有していた可能性がある。

調査区の西側に位置するSD6・7・13Aからは鉄滓が、SK13からは羽口が出土している。これらの遺物は、鍛冶に関連する作業を推測させるが、今回の調査ではそのような性格の遺構は認められなかった。

4. まとめ

・今回の調査では、２区中央から土壙１基、２区北から、掘立柱建物跡10棟、柱列２列、水場遺構１基、溝跡19条、土壙14基、ピット多数が検出された。これらは主に近世の遺構と考えられる。
・掘立柱建物跡には、数地点で類似した規模での重複が認められる。周囲をめぐる溝は、建物跡とほぼ同じ方向になっており、区画施設としての機能が想定される。したがって、これらの遺構は、一定程度継続して使用された「屋敷」を構成していたと考えられる。
・区画溝と接続する水場遺構を1基検出した。水場遺構は、溝とともに「屋敷」を構成している。
・「屋敷」の機能時期は、溝の堆積土や、検出面から出土した陶磁器類より16～17世紀と推測される。
・遺物には、瀬戸美濃の丸皿、唐津の丸皿、志野織部の丸皿と小鉢、茶臼が出土しており、車地蔵遺跡で検出された「屋敷」との類似が認められる。
・18世紀以降の遺物と、区画溝より新しい建物跡が検出されており、「屋敷」の廃絶後も土地の利用があったことが分かる。

第9表　掘立柱建物跡属性表

遺構名	区	方向	構造	間数	総長(m)	柱間寸法(北より、東より)		柱穴			柱底跡(cm)	重複関係	図No.	
				桁行×梁行	桁行×梁行	桁行(m)	梁行(m)	平面形	長軸(cm)/短軸(cm)/深さ(cm)				平面	断面
SB1	2区北	E-5° -S	東西棟	3×1	7.1×3.9	北:2.5, 2.3, 2.3	東:3.9	円, 楕円, 隅丸方	21～38	21～26	15～40	10～18	20	20
SB2	2区北	E-7° -S	東西棟	3×1	6.9×4.1	北:2.1, 2.4, 2.4	東:4.1	円, 楕円, 隅丸方	30～46	26～37	31～63	14～16	20	20
SB3	2区北	E-10° -S	東西棟	3×1	8.4×4.4	南:2.9, 2.8, 2.7	東:4.4	円, 楕円, 隅丸方	24～46	20～30	21～51	12～23	SB4より新	21	21
SB4	2区北	E-0° -S	東西棟	3×1	6.7×3.9	南:2.1, 2.4, 2.2	東:3.9	円, 楕円, 隅丸方	22～52	18～32	11～32	11～20	SB3より旧	21	21
SB5	2区北	N-5° -E	南北棟	2×1	7.2×5	西:3.7, 3.5	南:5	円, 楕円	23～38	21～25	17～38	15～20		21	21
SB6	2区北	N-4° -W	南北棟	3×2	6.5×4.1	西:2.0, 1.0, 3.5	南:2.1, 2.0	円, 楕円	24～36	21～32	33～55	10～20		22	22
SB7	2区北	E-4° -N	東西棟	3×1	6.2×2.9	南:2.2, 2.1, 2.1	西:2.9	円, 楕円	14～32	13～31	17～50	12～16	SD8より新	22	22
SB8	2区北	E-0° -S	南北棟	2×1	4.8×4.2	東:2.2, 2.6	南:4.2	円, 楕円	16～26	14～24	15～27	13～15		22	22
SB9	2区北	N-1° -E	東西棟	4×2	7.9×3.6	南:3, 1.7, 1.7, 1.6	東:1.9, 1.7	円, 楕円, 隅丸方	24～32	18～28	17～43	12～15		23	23
SB10	2区北	N-24° -E	南北棟	2間以上×1間以上	4×1.9以上	西:2.1, 1.9	南:1.9	楕円, 隅丸方	29～46	28～32	35～50	10～12	SA2より旧	23	23

第10表　柱列属性表

遺構名	区	構造	間数	総長(m)	柱間寸法(北より)	柱穴		柱底跡(cm)	重複関係	図版番号	
						平面形	長軸(cm)	深さ(cm)		平面	断面
SA1	2区北	南北	2	3.4	1.7、1.7	円、楕円	27～40	26～31以上	30～50	12～15		23	23
SA2	2区北	南北	3	5.6	1.9、1.8、1.9	円、楕円	38～49	30～49	39～65	14～16	SB10より新	23	23

第11表　溝跡属性表

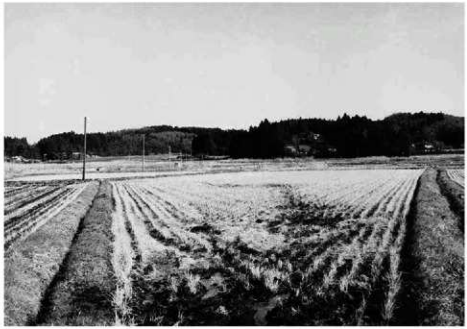
遺構名	区	方向	規模			深さ(m)	断面形	出土遺物	重複関係	図版No.	
			検出長(m)	上幅(m)	下幅(m)					平面	断面
SD1	2区北	W-0°-5° -N	25.4	1.4～3.9	0.9～2.4	14～94	U字、逆台形	陶磁器、本製品、銅銭	SD2・16より新、SD17より旧	20	26
SD2	2区北	W-0°-5° -N	8.8	－	－	51～73	－	陶器、石錘	SD1・14・17、SK14より旧	26	26
SD3	2区北	N-5° -E	13.4	1.2～2	0.3～1.1	8～22	皿			20	27
SD4	2区北	W-0° -S	20.7	1.6～2.4	0.5～1.1	33～53	逆台形	陶器、石器		22	27
SD5	2区北	W-5～10° -N	23.4	0.3～1.1	0.2～0.4	10～26	U字	土師器、磁器、石臼		20	27
SD6	2区北	W-10～15° -N	16.8	0.9～2.0	0.3～0.9	41～56	逆台形	陶器、石器、硫石、鉄滓	SD7より新	20	28
SD7	2区北	W	17.3	0.8～1.3	0.3～0.6	39～47	逆台形	磁器、石器、鉄滓	SD6・15より旧	20	28
SD8	2区北	N-5° -E	14	0.5～2	0.1～0.3	14～32	逆台形	陶器		22	27
SD9	2区北	W-10° -N	8	0.3～1.5	0.2～0.65	4～9	皿			19	－
SD10	2区北	N-10° -W	6	0.65～0.85	0.25～0.5	3～7	皿	縄文土器、磁器	SD11より新	19	－
SD11	2区北	N	11.3	0.2～0.85	0.1～0.35	1～7	皿	陶器	SD10より旧	19	－
SD12	2区北	N-15° -E	9.3	0.2～0.55	0.1～0.2	1～13	皿			19	－
SD13A	2区北	N-5～15° -E	21.6	0.4～1.1	0.1～0.3	13～36	逆台形	鉄滓	SK11・12・13より新、SK10より旧	23	28
SD13B	3区北	N-5～15° -E	12.7	－	－	－	皿	土師器、石器、硫石		23	28
SD14	2区北	W-5° -N	13.5	0.7～1.0	0.3～0.4	21～50	逆台形		SD2より新、SD17より旧	20	26
SD15	2区北	N	10.3	－	－	6～14	－	陶器、石器	SD6・7より新	19	－
SD16	2区北	W-10° -N	8.6	0.2～0.3	0.16～0.3	10～16	U字		SD1より旧	19	－
SD17	2区北	N-20° -E	2.1	0.6～0.8	0.3～0.6	16	－		SD1・14より新	19	－
SD18	2区北	W	3.3	0.8～1.1	0.3～0.6	5～20	皿			19	－

第12表　土壙属性表

遺構名	区	形状		規模			底面	出土遺物	重複関係	図No.	
		平面形	断面形	長(m)	幅(m)	深さ(cm)				平面	断面
SK1	2区中央	楕円	逆台形	1.34	0.7	74	ほぼ平坦			－	－
SK2	2区北	隅丸方	皿	1.18	0.98	20	ほぼ平坦			19	－
SK3	2区北	楕円	皿	1.22	0.78	12	凹凸			19	－
SK4	2区北	隅丸方	皿	0.84	0.56	12	ほぼ平坦	土師器		19	－
SK5	2区北	隅丸方	逆台形	1.5	1.04	53	ほぼ平坦	陶器		19	－
SK6	2区北	隅丸方	皿	0.96	0.66	10	ほぼ平坦			19	－
SK7	2区北	隅丸方	逆台形	1.1	0.88	31	緩やかにくぼむ	土師器、須恵器		19	－
SK8	2区北	隅丸方	皿	1.38	1.14	20	緩やかにくぼむ			19	－
SK9	2区北	楕円	皿	0.8	0.66	11	緩やかにくぼむ			19	－
SK10	2区北	隅丸方	逆台形	1.74	1.14	30	緩やかにくぼむ	陶磁器、硫石	SD13、SK12より新	23	28
SK11	2区北	楕円	逆台形	2.32以上	1.23以上	36	ほぼ平坦	鉄滓	SK12より新、SD13より旧	23	28
SK12	2区北	－	皿	1.54以上	1.23以上	10	ほぼ平坦		SD13、SK11・13より旧	23	28
SK13	2区北	楕円	逆台形	2.1	1.04	43	緩やかにくぼむ	土師器、須口、植物遺体	SK12より新、SD13より旧	23	28
SK14	2区北	楕円	逆台形	1.04	0.7	33	緩やかにくぼむ		SD14より旧	26	－

図版 1

上：遺跡遠景（西から）
中：２区北 南側（東から）
下：２区北 北側（東から）



図版2

上：2区北 東側（北から）
中：2区北 西側（北から）
下：2区中央（北から）

図版 3

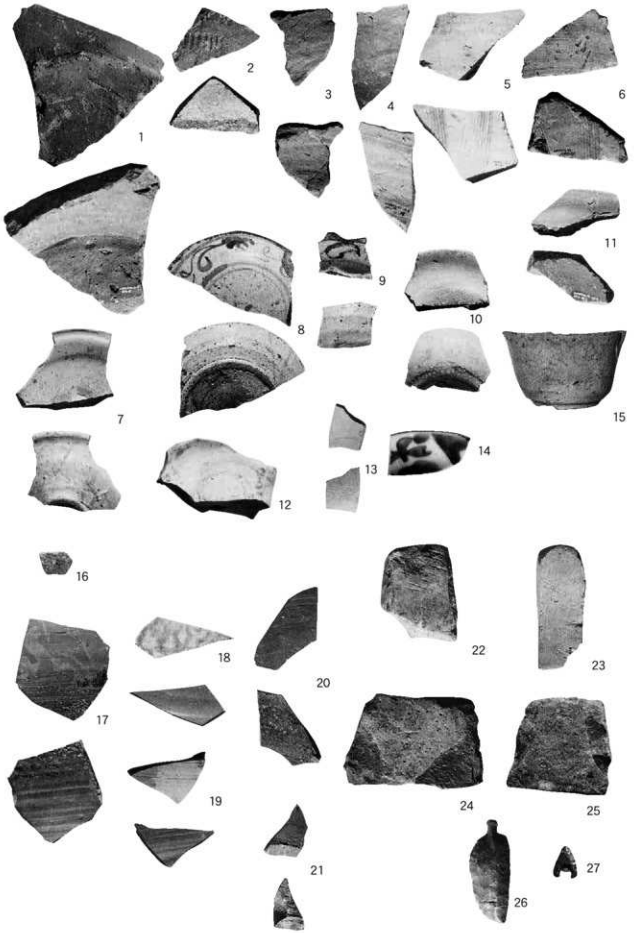
上：SB1・2（南から）
中：SB6（南から）
下：SB7（北から）

図版4

上：SB9（北から）
中：SD13A・B（南から）
下：SB5 P3

図版 5

上：SX1（東から）
中：同 セクション（西から）
下：同 細部



図版6 出土遺物（1）

1：26−3（掃図−番号）　2：28−1　3：29−5　4：28−7　5：26−4　6：29−4　7：28−6　8：29−3　9：29−2　10：27−4
11：26−2　12：27−1　13：26−1　14：SD7遺構確認面　15：29−1　16：27−5　17：27−7　18：27−6　19：SD4堆積土
20：27−8　21：27−9　22：28−4　23：28−8　24：28−3　25：29−11　26：2区北遺構確認面　27：SD15堆積土

1

2

3

図版7 出土遺物（2）

1：25（挿図－番号） 2：29－10 3：27－2

原遺跡（はらいせき）

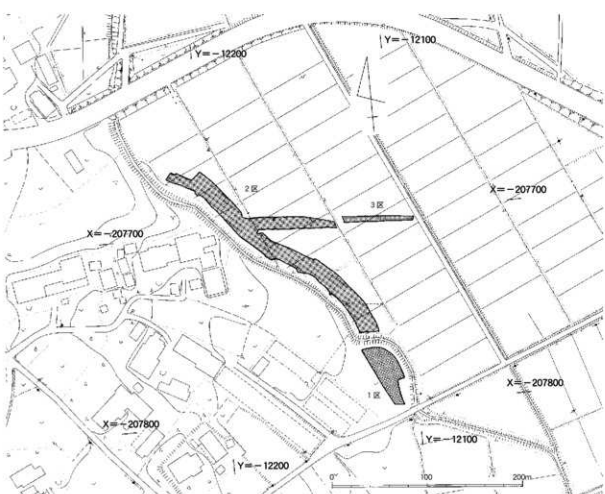
第Ⅵ章　原　遺　跡

1．基本層位

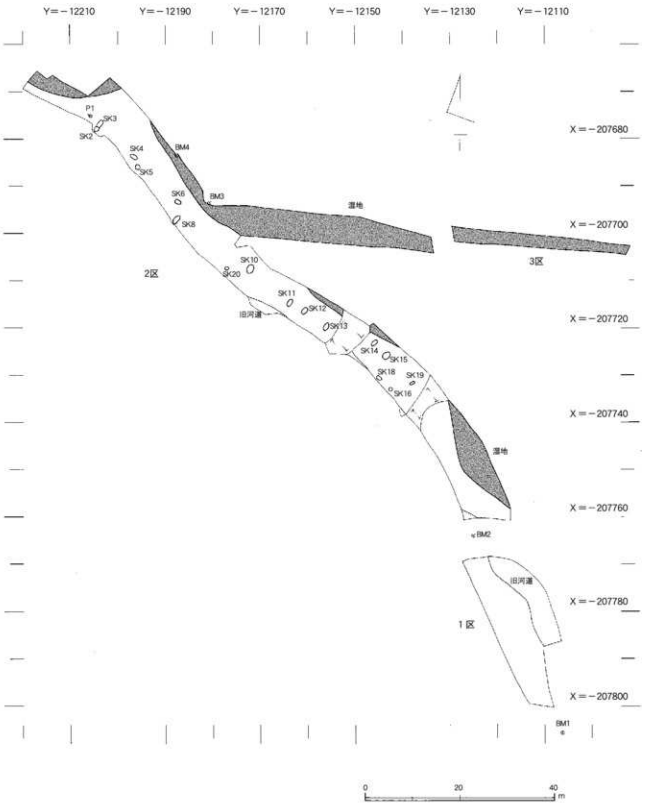
３ヵ所の調査区を設定し、南から1・2・3区とした（第30図）。基本層位は7層でⅢ層以下は地山である。Ⅰ層は暗褐色のシルトで表土である。層厚は28～44cmある。Ⅱ層は黒色のシルトで地山小ブロックや砂礫を含む。河川の氾濫が起源と考えられる。層厚は6～8cmである。Ⅲ層は明黄褐色の粘土で、遺構検出面である。層厚は10～20cmである。以下Ⅵ層まで同一起源の粘土層と考えられる。Ⅳ層は黄橙色の粘土で、層厚は12～20cmである。Ⅴ層は浅黄色の粘土で、酸化鉄を含む。層厚は19～36cmである。Ⅵ層は緑灰色の粘土でグライ化が進んでいる。Ⅶ層は浅黄色の砂で、酸化鉄を含む。

2．発見された遺構と遺物

検出された遺構は土壙16基、ピット1基である。土壙は、湿地に向かう丘陵の縁辺に数基ごとにまとまって確認された（第31図）。遺物は、堆積土、検出面から縄文土器片、土師器片、剥片石器・剥片が数点出土した。検出した遺物・遺構の特徴は第13・14表に示した。



第30図　調査区の位置


Y=－12210
Y=－12190
Y=－12170
Y=－12150
Y=－12130
Y=－12110
X=－207680
X=－207700
X=－207720
X=－207740
X=－207760
X=－207780
X=－207800
P1
SK2
SK3
SK4
SK5
SK6
SK8
BM4
BM3
湿地
3区
2区
SK10
SK20
SK11
SK12
旧河道
SK13
SK14
SK15
SK18
SK19
SK16
湿地
BM2
旧河道
1区
BM1
0
20
40
m

第31図　検出遺構

3. 土壙について（第32・33・34図）

土壙は平面と断面の形状より5類に分けられる。

1類：平面が楕円形で短軸の断面が漏斗形になるもの。幅／底面幅の割合で細分できる。

1－1類：幅／底面幅が2.5以下のもので、規模は、平面形の長軸1.5m以上、短軸1m前後、深さ1.2m前後である。1－1類にはSK8・10・11・12・15が該当する（第32図）。SK10の底からは杭が出土したが遺構に伴ってはいない。また、SK12の堆積土からは多数の甲虫の遺体が出土した。

1－2類：幅／底面幅が2.5以上のものでSK4・6がこれにあたる（第33図）。底面幅が20～30cmと幅狭である。いずれも遺物の出土は認められない。

2類：平面が楕円、隅丸方形で、断面が円筒状になるもので、SK3・13が該当する（第33図）。規模は1類に類似する。SK3の堆積土1層から縄文土器片と剥片が、SK13では同じく堆積土1層から弥生土器片が出土している。

3類：平面が円、不整円形で断面が円筒、逆台形になるもので、SK2・5・16がこれにあたる（第33図）。規模は、長さ幅ともに1m前後である。SK5の堆積土4層から剥片が、SK16の堆積土1層から土師器片が出土した。

4類：平面が不整楕円、隅丸長方形で断面が逆台形になるもの。これにあたるのがSK18・19である（第33図）。

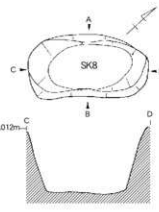
5類：その他のもの。SK14、20がこれに含まれる（第34図）。

類型化を行った土壙について、平面形、規模、堆積土の特徴から、各類型の性格を考察する。1－1類と2類は平面楕円形で、平面長・幅、深さ、堆積土の特徴が近似する。また、遺構の方向も類似することから、同様の機能が推測される。1－2類は、平面形、断面形の類似性から1－1類と同様の機能が推測される。ただし、1－1類よりも底面の面積が小さく、堆積土も1－1類と異なり、より淡い色調となる。遺構の長軸方向は、1－1類と約90°異なっており、1－1類とは時期の異なる可能性が考えられる。1類と2類は自然堆積であり、丘陵のへりにまとまって配置されている。これらの諸属性を考慮すると陥し穴としての機能を有したことが推測される。

3類は、SK2がSK3を切ることから、1・2類よりも新しい可能性がある。機能については不明である。

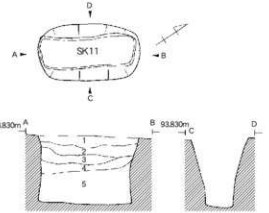
4類のSK18では、人為堆積土の上に自然堆積土が覆っており、これは、土壙が埋め戻されて一定の時間が経過した後に、埋土が沈んだことを表している。平面が楕円形で、断面が逆台形であることを考慮すると、土壙墓の可能性が考えられる。

遺物は、堆積土の上層から出土したものが多く、かつ少量であるため遺構の時期を推定できるものは認められない。したがって、各土壙の時期については不明である。



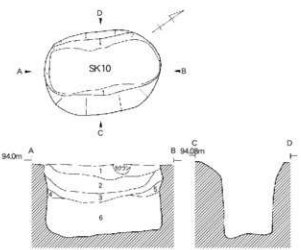
SK8

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山粒を少量含む。	
2	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロックを大量に含む。	
3	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山粒をわずかに含む。	
4	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む。	
5	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)	粘土		



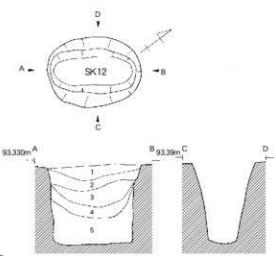
SK11

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト		
2	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む。炭化物をわずかに含む。	
3	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山粒を少量含む。	
4	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロックを少量含む。	
5	暗オリーブ灰色(2.5GY4/1)	粘土		



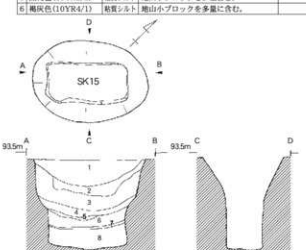
SK10

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山粒、砂を少量含む。	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山小ブロックを多量に含む。	
3	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山小ブロックを多量に含む。	
4	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山小ブロックを少量含む。	
5	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山小ブロックを少量含む。	
6	褐灰色(10YR4/1)	粘質シルト	地山小ブロックを多量に含む。	



SK12

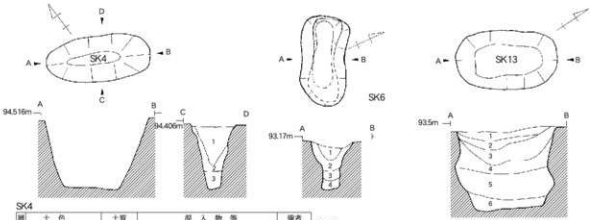
層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト		
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む。	
3	黒色(10YR2/1)	シルト	地山粒を少量含む。	
4	黒色(10YR2/1)	シルト	地山ブロックを含む。	
5	灰色(5Y5/1)	粘土	有機物を含む黒色土層を互層に含む。	



SK15

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト	地山粒を含む。	
2	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山ブロック、黒色シルトブロックを含む。	
3	黒色(10YR2/1)	シルト	地山ブロックを多量に含む。	
4	黒色(10YR2/1)	シルト	暗褐色ブロックを少量含む。	
5	黒色(10YR2/1)	シルト	地山ブロックを含む。	
6	にぶい黄色(2.5Y6/4)	砂質シルト	植物根を含む。	
7	黒色(10YR2/1)	砂質シルト	植物根を含む。	
8	褐灰色(10YR4/1)	粘質シルト	地山ブロックを含む。	

第32図　SK8・11・10・12・15土壙



SK4

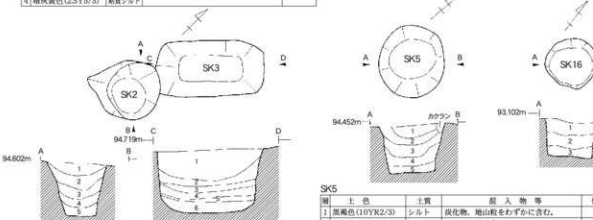
層	土色	土質	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト		
2	にぶい黄橙色(10YR4/3)	粘質シルト	地山粒を含む。	
3	オリーブ褐色(2.5Y4/3)	粘質シルト	砂を含む。	

SK6

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	地山粒を含む。	
2	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	地山粒を含む。	
3	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト		
4	暗灰黄色(2.5Y5/3)	粘質シルト		

SK13

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	地山粒を含む。	
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒をわずかに含む。	
3	黒色(10YR2/1)	シルト	地山小ブロックを含む。	
4	黒色(10YR2/1)	シルト	地山大ブロックを多量に含む。	
5	褐灰色(10YR4/1)	粘質シルト	地山小ブロックを均質に含む。	
6	褐灰色(10YR4/1)	粘質シルト	地山大ブロックを多量に含む。	



SK2

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト		
2	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	地山粒を少量含む。	
3	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	地山ブロックを含む。	
4	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	地山粒を含む。	
5	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	地山粒、ブロックを含む。	

SK3

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト		
2	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山をラミナ状に含む。	
3	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山粒をわずかに含む。	
4	黒褐色(10YR2/3)	粘質シルト	地山をラミナ状に含む。	
5	黒色(10YR2/1)	粘質シルト		
6	灰色(7.5Y6/1)	粘土	炭化物をわずかに含む。	

SK5

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR2/3)	シルト	炭化物、地山粒をわずかに含む。	
2	黒色(10YR2/1)	シルト	地山粒を多く含む。	
3	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロックを少量含む。	
4	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山粒、ブロックを多量に含む。	
5	黒色(10YR2/1)	粘質シルト		

SK16

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	シルト		
2	黒褐色(10YR2/2)	シルト	多量の地山粒と少量の地山ブロックを含む。	
3	黒褐色(10YR2/2)	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む。	

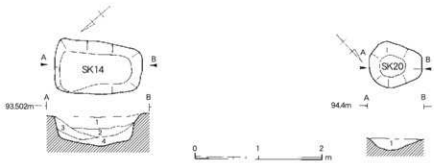
SK19

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	褐灰色シルトブロックを含む。	
2	にぶい黄橙色(10YR6/4)	粘質シルト		
3	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロックを含む。	
4	黒色(10YR2/1)	粘質シルト	地山ブロックを多量に含む。	

SK18

層	土色	土質	混入物等	
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	酸化マンガン含む。	
2	暗褐色(7.5YR3/3)	シルト		
3	褐灰色(10YR4/1)	シルト	暗褐色シルト土含む。	
4	褐色(7.5YR4/4)	シルト	地山粒を均質に含む。	
5	黒褐色(10YR3/1)	シルト	地山粒をわずかに含む。	
6	明黄褐色(10YR6/8)	粘土		人為堆積
7	黒褐色(10YR3/2)	粘質シルト	地山粒を少量含む。	人為堆積
8	黄橙色(10YR7/6)	粘土		人為堆積
9	褐灰色(10YR4/1)	粘質シルト	地山小ブロックを含む。	人為堆積

第33図　SK4・6・13・2・3・5・16・19・18土壙



SK14

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山粒を含む。	
2	黒色(10YR2/1)	シルト		
3	黒褐色(10YR2/2)	シルト	砂、地山粒を含む。	
4	黒褐色(10YR2/2)	シルト	地山ブロックを多量に含む。	

SK20

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR2/2)	シルト	砂粒をわずかに含む。	

第34図　SK14・20土壙

第13表　出土遺物集計表(点数)

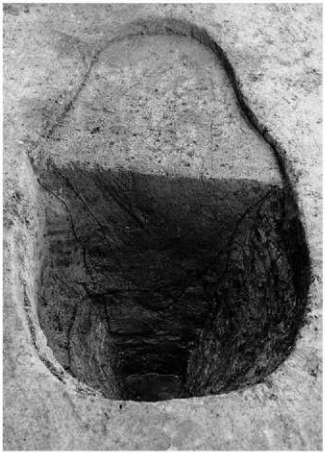
調査区	遺構名	層位	遺物								計
			縄文	弥生	土師器	陶器	磁器	トゥール	剥片	その他	
2	SK3	1	1						1		2
	SK5	4							1		1
	SK10	底								1(杭)	1
	SK12	堆積土								甲虫遺体多数	
	SK13	1		3							3
	SK15	1						1			1
	SK16	1			1						1
	確認面					2	1	1			4
	攪乱		1		1						2
3	確認面						1		1		2
計			2	3	2	2	2	2	3	1＋多数	17

第14表　土壙属性表

遺構名	区	分類	形状		規模					出土遺物	重複関係	図No.	
			平面	断面	長(m)	幅(m)	深さ(m)	底面	底面長(m)	底面幅(m)			平面	断面
SK2	2	3類	不整円	逆台形	1.14	0.94	0.86	ほぼ平坦	0.58	0.5		SK3より新	31	33
SK3	2	2類	隅丸方	円筒	1.7	0.9	1.12	南西に傾斜	1	0.42	縄文土器、剥片	SK2より旧	31	33
SK4	2	1-2類	楕円	長軸：逆台形、短軸：漏斗	1.64	0.74	1.12	南側に傾斜	0.86	0.2			31	33
SK5	2	3類	円	逆台形	1.14	1.04	0.78	南西に傾斜	0.74	0.62	剥片		31	33
SK6	2	1-2類	不整楕円	長軸：円筒、短軸：漏斗	1.4	0.8	0.76	ほぼ平坦	−	0.28			31	33
SK8	2	1-1類	不整楕円	長軸：逆台形、短軸：漏斗	1.88	1.04	1.1	緩やかにくぼむ	1.32	0.74			31	32
SK10	2	1-1類	楕円	長軸：円筒、短軸：漏斗	1.84	1.36	1.19	西側に傾斜	1.74	0.72	杭		31	32
SK11	2	1-1類	楕円	長軸：逆台形、短軸：漏斗	1.62	0.9	1.11	緩やかにくぼむ	1.48	0.5			31	32
SK12	2	1-1類	楕円	長軸：円筒、短軸：漏斗	1.48	1.1	1.28	緩やかにくぼむ	1.24	0.44	甲虫遺体		31	32
SK13	2	2類	楕円	円筒	1.62	0.92	1.38	緩やかにくぼむ	1.06	0.54	縄文土器		31	33
SK14	2		隅丸方	逆台形	1.38	0.88	0.57	緩やかにくぼむ	1.14	0.62			31	34
SK15	2	1-1類	楕円	漏斗	1.82	1.28	1.48	東側に傾斜	1.24	0.6	石器		31	32
SK16	2	3類	不整円	円筒	0.8	0.8	0.6	緩やかにくぼむ	0.68	0.6	土師器		31	33
SK18	2	4類	不整楕円	逆台形	1.16	0.66	0.77	ほぼ平坦	1.02	0.48			31	33
SK19	2	4類	隅丸方	逆台形	1.14	0.44	0.33	西側に傾斜	1.06	0.28			31	33
SK20	2		不整円	U字状	0.82	0.72	0.2	凹凸あり	0.4	0.34			31	34

図版 1

上：遺跡遠景（南から）
中左：２区北側（南から）
中右：２区南側（北から）
下：SK12（西から）



図版2

上：SK18セクション（南から）
中：SK19セクション（西から）
下左：SK10（西から）
下右：SK4セクション（南から）

上葉の木沢遺跡
（かみはのきさわいせき）

第Ⅶ章　上葉の木沢遺跡

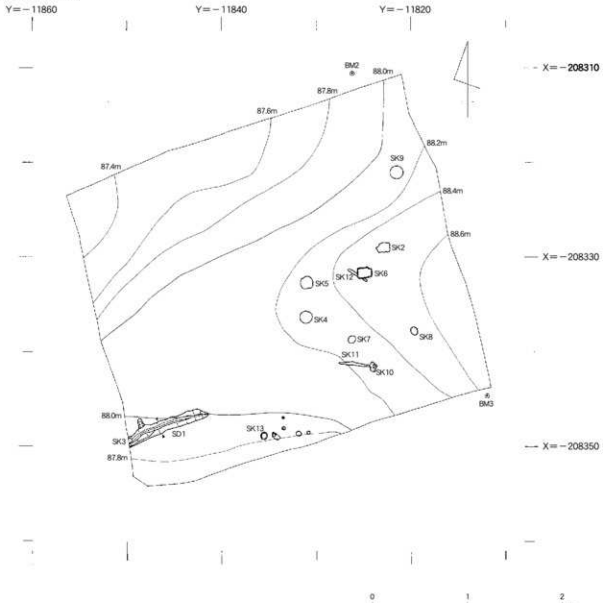
1．基本層位

３ヵ所の調査区を設定し、北から1、2、3区とした（第35図）。２区東壁で基本層位柱状図を作成し、３層確認した。Ⅰ層は灰黄褐色のシルトで、表土である。層厚は18～20cmである。Ⅱ層は黒褐色のシルトで、「ノボク」と呼称される黒色火山灰層を母材とする層である。小礫を含む。層厚は26～32cm。Ⅲ層は褐色のシルトで、層厚は10～20cmである。Ⅳ層は明黄褐色の粘土で、地山である。遺構の検出面はⅣ層である。

第35図　上葉の木沢遺跡と中葉の木沢遺跡の調査区の位置

2. 発見された遺構と遺物

２区で土壙13基、溝1条、ピット4基が検出された（第36図）。２区は、東から延びる丘陵が低地に向かって張り出す小さな尾根の鞍部にあたり、遺構は、この尾根上に散漫に分布している。各遺構の属性については第15・16表にまとめた。出土遺物は、土師器（第38図1～4）、近世陶器、縄文土器、剥片である。



第36図　２区検出遺構

3. 土壙について（第37図）

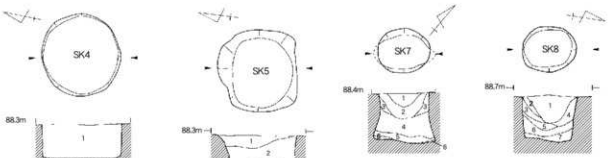
平面・断面の形状、規模、堆積土の特徴から４類に分けることができる。

1類：平面円形で、堆積土が地山ブロックを含む暗褐色土で人為堆積のもの。

2類：平面楕円形で、断面がフラスコ・円筒形のもの。堆積土は、にぶい黄褐色土と暗褐色土のもの。

3類：平面形が溝状で、断面が漏斗形になるもの。

4類：その他のもの。



SK4

層	土色	土質	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	大小の地山ブロックを多く含む。	人為堆積

SK5

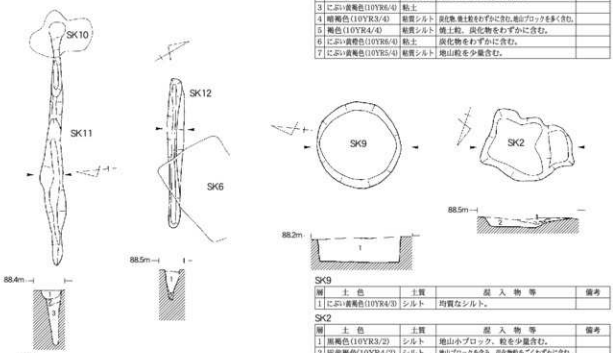
層	土色	土質	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	大小の地山ブロックを含む。	人為堆積
2	黒褐色(10YR3/2)	シルト	大小の地山ブロックを含む。	人為堆積
3	暗褐色(10YR3/4)	シルト	大小の地山ブロックを含む。	人為堆積
4	黒褐色(10YR3/1)	粘質土	地山ブロックをやや多く含む。	自然堆積

SK7

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	粘質シルト	炭化物粒をごくわずかに含む。	
2	黒褐色(10YR3/2)	粘土	炭化物粒、焼土粒をごくわずかに含む。	
3	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質シルト	地山粒を少量含む。	
4	褐灰色(10YR4/1)	粘質シルト	地山粒を少量含む。	
5	暗褐色(10YR3/3)	粘土	地山粒を少量含む。	
6	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘土		

SK8

層	土色	土質	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	焼土粒、炭化物をわずかに含む。地山粒を全体に含む。	
2	暗褐色(10YR3/4)	粘質シルト	地山ブロックを多く含む。	
3	にぶい黄褐色(10YR6/4)	粘土		
4	暗褐色(10YR3/4)	粘質シルト	炭化物、焼土粒をわずかに含む。地山ブロックを多く含む。	
5	褐色(10YR4/4)	粘質シルト	焼土粒、炭化物をわずかに含む。	
6	にぶい黄褐色(10YR6/4)	粘土	炭化物をわずかに含む。	
7	にぶい黄褐色(10YR5/4)	粘質シルト	地山粒を少量含む。	



SK9

層	土色	土質	混入物等	備考
1	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	均質なシルト。	

SK2

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/2)	シルト	地山小ブロック、粒を少量含む。	
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを含み、炭化物粒をごくわずかに含む。	

SK11

層	土色	土質	混入物等	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山ブロックを少量含む。	
2	灰黄褐色(10YR5/2)	シルト	地山ブロックを多く含む。	
3	暗褐色(10YR3/3)	粘質シルト	地山ブロックを少量含む。粒状に炭化物をわずかに含む。	

SK12

層	土色	土質	混入物等	備考
1	黒褐色(10YR3/1)	シルト	粘性、しまりややあり。地山ブロックを少量含む。	
2	褐色(10YR4/4)	粘土	粘性あり、しまりあり。地山ブロックを多く含む。	

SD1

層	土色	土質	混入物等	備考
1	暗褐色(10YR3/3)	シルト	炭化物粒をごくわずかに含む。	
2	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	地山粒をごくわずかに含む。	
3	黄褐色(2.5Y5/4)	粘質シルト		
4	灰黄褐色(10YR4/2)	粘質シルト	地山を多く含む。	

SK3

層	土色	土質	混入物等	備考
1	灰黄褐色(10YR4/2)	シルト	酸化鉄をわずかに含む。	
2	褐色(10YR4/4)	シルト	地山ブロックを含む。	
3	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト		
4	にぶい黄褐色(10YR4/3)	シルト	地山粒、小ブロックを多く含む。東北壁際に地山ブロックが多い。	

第37図　SK4・5・7・8・11・12・9・2・3土壙、SD1溝跡

1類にはSK4・5が該当する。平面の規模はいずれも長軸、短軸ともに1.3m前後である。遺物は出土していない。

2類にはSK7・8があたる。長軸0.8m、短軸0.7m、深さ0.8m前後と規模が近似する。SK7は断面がフラスコ状となる。遺物はSK7の堆積土から剥片が出土している。

3類はSK11・12である。SK12は尾根頂部に、SK11は頂部から南に傾斜する緩斜面上に、地形に沿うように位置する。規模は、SK11が長軸3.56m、短軸0.4m、深さ0.87mで、SK12が長軸2.36m、短軸0.28m、深さ0.48mである。

その他である4類にはSK1・2・3・6・9・10・13の7基が該当する。このうち、SK2から、土師器破片が多数出土し、接合した結果、甕が2個体、器台が1個体になった。SK2は、平面形が不整で、底面に凹凸があることから、自然の窪みであった可能性がある。

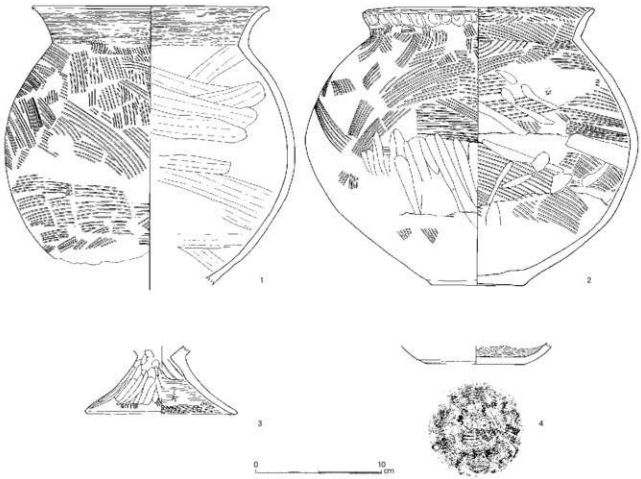
平面形、堆積土を中心に4類に分けたが、いずれも出土遺物が極めて少なく時期の推定は困難である。土壙の性格については、3類と同様の特徴を持った遺構が、円田盆地西縁に位置する堀の内遺跡、中組遺跡、清水遺跡でも認められる。これらは、いずれも斜面上に等高線に長軸をあわせて分布するものが多く、遺構の形状、遺構配置から縄文時代の陥し穴と想定されており、本遺跡でも同様の性格の遺構であると考えられる。円田盆地では、盆地西側とともに東縁の丘陵にも、陥し穴と考えられる3類の土壙が存在することが明らかとなった。

4．SK2土壙出土の土師器

SK2では、堆積土1層から、土師器の甕2個体と器台1個体が出土した。このうち、甕は土壙内の北側（第38図2）と南側（第38図1）に個体ごとに分布を別にして、破片の状態でまとまって出土した。接合した破片のなかには、土壙の周囲の確認面から出土しているものもあるが、ほとんどは土壙内出土である。出土した土師器片は、ほぼ全て接合し、全体の形状が分かるまで復元できた。器台（第38図3）も土壙内の南側から甕とともに出土しており、これらの土器は、同時あるいは同一時期にSK2に遺棄あるいは廃棄されたものと考えられる。

1と2は、頸部が「く」の字状に屈曲し、口縁部が短く外反する形状である。いずれも胴部は球形で、最大径は胴部中央である。1は、底部が破損している。調整は、口縁部が内外面とも横ナデ、胴部の外面がハケメ、内面がヘラケズリである。2は、平底の底部を有する。胴部下半、胴部最大径部分、口縁部と頸部との接続部分に、粘土紐の継ぎ目が観察できる。そこから、一定の大きさまで粘土紐を積み上げた後に、内外面ともハケメで調整して器形を整えるという工程を繰り返して、甕を製作していたことが理解できる。口縁部は指で押さえて整形しており、その後上部にのみ横ナデが行われる。外面はハケメが施され、胴部下半ではハケメの後にヘラミガキが行われる。内面は、口縁部がハケメ、胴部がハケメ主体で、部分的に不規則なヘラミガキが施される。3は器台の脚部である。脚部は外反気味に広がる形状で、円窓は認められない。脚部と台部は貫通している。外面には、ハケメを施した後にヘラミガキが行われる。内面にはハケメの後に横ナデが施される。

これらの土器は、器形や器種構成から古墳時代前期の塩釜式に属すると考えられる（氏家1957）。



第38図　2区　出土遺物

No.	遺構	層位	種別	器種	特徴	口径	底径	器高	残存	写真図版	登録No.
1	SK2	堆積土	土師器	甕	外:口)ハケメ→ヨコナデ　胴)ハケメ　内:口)ヨコナデ　胴)ヘラケズリ	18.8cm	－	－	底部なし	2－1	UH01
2	SK2	堆積土	土師器	甕	外:口)指オサエ→ヨコナデ　胴)ハケメ→ヘラミガキ　内:口)ハケメ　胴)ハケメ→ヘラミガキ	18.4cm	7.2cm	23cm	3/4	2－2	UH02
3	SK2	堆積土	土師器	器台	外:脚)縦ミガキ→ヘラミガキ　内:脚)縦ミガキ→ヨコナデ・ヘラによる圧痕	－	12.1cm	－	脚部の1/2	2－3	UH03
4	2区・確認面	土師器	杯		外:ロクロナデ→回転ヘラケズリ　底:回転糸切り→回転ヘラケズリ　内:ヘラミガキ→黒色処理	－	7.7cm	－	底部と体部の一部	－	UH05

第38図　出土遺物

塩釜式の土器については、細分案が示されているが（宮城県教育委員会1983・1985、次山1992、辻1994・1995）、今回出土した土器は3個体と少数であるため、詳細に検討を行うことはできない。

5. まとめ

・今回の調査では、２区から土壙13基、溝1条、ピット４基が検出された。
・縄文時代の遺構には、溝状の陥し穴と考えられる土壙が２基ある。この種の土壙は、盆地西縁の遺跡でも検出されており、円田盆地の東縁でも陥し穴状の土壙を構築している。
・古墳時代の遺構には、土壙1基があり、土壙内から古墳時代前期の塩釜式の甕２個体と器台１個体が出土した。
・溝跡は１条あり、確認面から近世陶器が出土している。

第15表　土壙属性表

遺構名	区	分類	形状		規模			底面	出土遺物	重複関係	図No.	
			平面形	断面形	長(m)	幅(m)	深さ(m)				平面	断面
SK1	2	4類	不整円	逆台形	0.48≦	0.48	0.2	凹凸あり	土師器		36	—
SK2	2	4類	不整楕円	皿状	1.44	1.1	0.16	緩やかにくぼむ	土師器甕、器台		36	37
SK3	2	4類	円	V字状	0.52≦	0.52	0.28	丸みを持ちくぼむ		SD1より新	36	37
SK4	2	1類	円	円筒	1.3	1.24	0.54	ほぼ平坦			36	37
SK5	2	1類	不整円	逆台形	1.28	1.24	0.75	ほぼ平坦			36	37
SK6	2	4類	不整方	皿状	1.58	1.1	0.08	ほぼ平坦		SK12より新	36	—
SK7	2	2類	楕円	フラスコ状	0.82	0.7	0.8	凹凸あり	剥片		36	37
SK8	2	2類	楕円	円筒	0.86	0.72	0.74	凹凸あり			36	37
SK9	2	4類	円	円筒	1.36	1.32	0.42	ほぼ平坦			36	37
SK10	2	4類	不整楕円	皿状	1.02	0.72	0.14	丸みを持ちくぼむ		SK11より新	36	—
SK11	2	3類	溝状	V字状	3.56	0.4	0.87	丸みを持ちくぼむ		SK10より旧	36	37
SK12	2	3類	溝状	V字状	2.36	0.28	0.48	丸みを持ちくぼむ		SK6より旧	36	37
SK13	2	4類	円	皿状	0.7	0.65	0.33	丸みを持ちくぼむ	土師器		36	—

第16表　溝跡属性表

遺構名	区	方向	規模				断面	出土遺物	重複関係	図No.	
			検出長(m)	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)				平面	断面
SD1	2	南西－北東	8.86	1～1.46	0.12～0.28	0.2	逆台形	近世陶器、剥片	SK3より旧	36	37

1：遺跡全景（西から）

2：2区全景（西から）

上：SK2遺物出土状況
中左：３区（北から）
中右：SK11（東から）
下左：38－１（挿図－番号）
下中：38－2
下右：38－3

図版２

磯ケ坂遺跡
（いそがさかいせき）

第Ⅷ章　磯ヶ坂遺跡

1．調査の方法と経過

磯ヶ坂遺跡の確認調査は、原遺跡の精査が完了した11月24日から開始した。調査対象区域が広範囲なため、地形等を考慮して便宜的にA～Cの３地点に分けて記述を行う（第39図）。

調査では、微高地を中心に現水田や畑地に沿って幅約2mのトレンチを適宜設定した。そして、遺構の検出状況や地形・地層の状況を検討しながら随時調査区を拡張した。調査面積とトレンチ数は、A地点が142㎡（3箇所）、B地点が399㎡（10箇所）、C地点が624㎡（10箇所）で、総面積は1165㎡（23箇所）である。調査トレンチの深度は概ね20～50cmで、一部は層序確認のために1m程度掘り下げている。

記録は、縮尺1／1000の図に検出遺構と調査トレンチの土層、深度などを書き込む簡易的な方法をとり、適宜デジタルカメラによる写真撮影を行った。12月２日には確認調査を終了した。

2．基本層位

調査対象地域の基本層序は、地点によって異なるものの、以下の層に大別される。

Ⅰ層は耕作土で現代の盛土を含む。層厚は、A地点が10～70cm、B地点が10～50cm、C地点が10～20cmである。Ⅱ層は旧耕作土。層厚はA地点20～90cm、B地点30～70cm、C地点20～40cmである。Ⅲ層は旧表土。この地方で「ノボク」と呼称される黒色火山灰である。各地点とも丘陵部では流出や削平のため確認できないが、丘陵の落ち込み部分で1m前後の堆積が認められる。低地では1m以上に及び、未分解植物質を多量に含む黒色スクモ層となっている。Ⅳ層は黄褐色ロームの地山である。遺構の検出はⅣ層上面で行った。

3．発見された遺構と遺物

検出された遺構は、土壙10基、溝10条、ピット少数である。以下地点ごとに概要をまとめる。

A地点

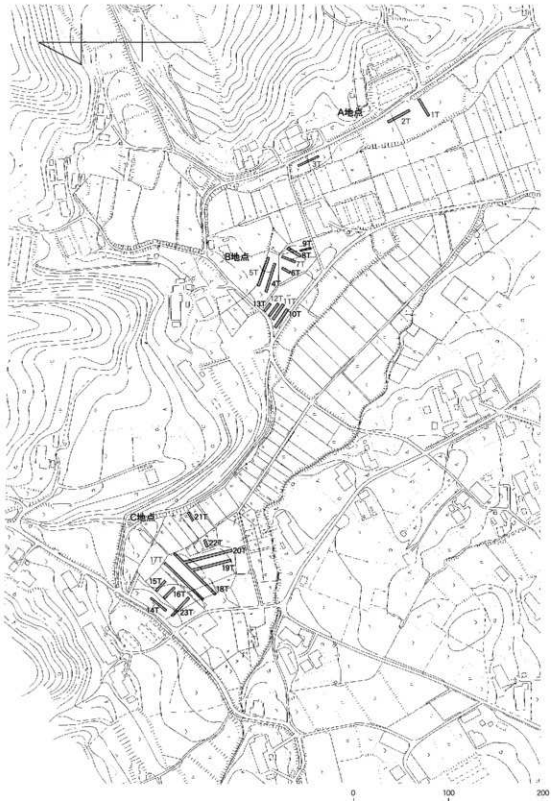
A地点は東から西に延びる丘陵の先端部である。３箇所のトレンチを調査したが、1トレンチでピット2基を検出した以外に遺構は認められなかった。

B地点

B地点の地形は北から南に延びる丘陵の先端部に、沢が大きく入り込んで形成されたものである。遺構は、８トレンチで北西から南東方向の溝が１条、９トレンチで土壙が２基、10トレンチでピット２基、11トレンチで土壙が１基検出された。遺物の出土がなく、遺構の時期は不明である。また、４、５トレンチの東側、6～8トレンチの北側では沢の落ち込みが確認できた。

C地点

C地点は北から延びる丘陵の先端部である。地形は南に向かって緩やかに傾斜している。検出した



第39図　調査トレンチの位置

遺構は、15トレンチでピット２基、17トレンチで土壙４基、18トレンチで溝１条、19トレンチで、溝４条、20トレンチで19トレンチの続きと考えられる溝２条、土壙２基、ピット１基である。トレンチからの遺物の出土がなく、遺構の時期は不明である。また、19、20トレンチの南端、21トレンチの西側で沢の落ち込みを確認した。なお、表土から縄文土器、土師器、剥片が出土したが、いずれも少量である。

4．まとめ

遺跡範囲の南東にあたるA地点では、ピット２基が検出された。遺物は出土しておらず、遺跡の範囲がこの辺りまで広がる可能性は低い。遺跡の東端にあたるB地点では、溝１条、土壙３基、ピット２基が検出された。遺物は出土しておらず、この付近は遺構の密度が薄いと考えられる。遺跡の西側にあたるC地点では溝５条、土壙６基、ピット３基が検出された。調査区から遺物は出土しておらず、遺構の密度は薄いと考えられる。遺跡の本体は、今回の調査区の北側にあたる標高の高い部分になる可能性がある。

1トレンチ　ピット検出状況（西から）

8トレンチ　溝跡検出状況（西から）

9トレンチ　土壙検出状況（南から）

18トレンチ 東側　溝跡検出状況（西から）

19トレンチ　南側　溝跡検出状況（南から）

20トレンチ　全景（南から）

引用・参考文献

（財）岩手県文化振興事業団　1995『柳之御所跡　一関水地事業・平泉バイパス建設関連第21･23･28／31･36･41次発掘調査報告』埋蔵文化財センター

上田秀夫　1982「14～16世紀の青磁の分類について」『貿易陶磁研究』2 pp.55－70

氏家和典　1957「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』14 pp.1－14

小野正敏　1982「15～16世紀の染付碗、皿の分類と年代」『貿易陶磁研究』2 pp.71－87

加藤道男　1989「宮城県における土師器研究の現状」『考古学論叢Ⅱ』pp.277－329

歳王町教育委員会　1990『堀の内遺跡』歳王町文化財調査報告書

歳王町教育委員会　1997『堀の内遺跡』歳王町文化財調査報告書第1集

歳王町史編さん委員会編　1994『歳王町史　通史編』

歳王町史編さん委員会編　1987『歳王町史　資料編Ⅰ』

佐藤洋　2002「仙台市内出土の陶磁器集成－近世－」『仙台市博物館調査研究報告』22 pp.1－16

佐藤洋一　2003「歳王町円田盆地における遺跡分布状況」『宮城考古学』5 pp.209－220

白鳥良一　1980「多賀城出土土器の変遷」『研究紀要Ⅶ』pp.1－38　宮城県多賀城跡調査研究所

関根達人　1998「6．木製品・漆器　(1) 供膳具」『東北大学埋蔵文化財調査年報』9 pp.208－217

仙台市史編さん委員会編　2000『仙台市史通史編2　古代中世』

仙台市史編さん委員会編　2001『仙台市史通史編3　近世Ⅰ』

仙台市教育委員会　1985『仙台城三の丸』仙台市文化財調査報告書第76集

仙台市教育委員会 1986『柳生』仙台市文化財調査報告書第95集

仙台市教育委員会1990『南小泉遺跡第16～18次発掘調査報告書』仙台市文化財調査報告書第140集

仙台市教育委員会 1994『中田南遺跡－古代・中世の集落跡の調査－』仙台市文化財調査報告書第182集

仙台市教育委員会 1997『養種園遺跡 発掘調査報告書－伊達家別荘跡の調査－』仙台市文化財調査報告書第214集

高桑登2003「奥羽南半における「伊達氏系遺物」の分布について」『研究紀要』創刊号pp.136－145（財）山形県埋蔵文化財センター

高橋あけみ　1998「伊達家の家紋に関する一考察－家紋の覚書と美術資料に見る伊達家の家紋およびその変遷－」『仙台市博物館調査研究報告』19 pp.1－41

千葉孝弥　1992「武士の屋敷の発見」『よみがえる中世7－みちのくの都多賀城・松島－』pp.66－78

次山淳　1992「塩釜式土器の変遷とその位置づけ」『究班』pp.185－211

辻秀人　1994「東北南部における古墳出現期の土器編年　その1」『東北学院大学論集　歴史学・地理学』26 pp.105－140

辻秀人　1995「東北南部における古墳出現期の土器編年　その2」『東北学院大学論集　歴史学・地理学』27 pp.39－88

帝京大学山梨文化財研究所　2006『掘立柱・礎石建物建築の考古学－都城・官衙・集落・寺院における分析と研究法－資料集』

東北中世考古学会編　2001『掘立と竪穴』高志書院

東北大学埋蔵文化財調査センター　1997『東北大学埋蔵文化財調査年報8』

東北福祉大学116番教室　1994　『宮城県歳王町 兵衛館 第1次調査発掘調査報告書』

東北福祉大学116番教室　1995　『宮城県歳王町 兵衛館 第2次調査発掘調査報告書』

東北福祉大学116番教室　1996　『宮城県蔵王町 兵衛館 第3次調査発掘調査報告書』

東北福祉大学16番教室　1997　『宮城県蔵王町 兵衛館 第4次調査発掘調査報告書』

東北福祉大学16番教室　1998　『宮城県蔵王町 兵衛館 第5次調査発掘調査報告書』

東北福祉大学16番教室　1999　『宮城県蔵王町 兵衛館 第6次調査発掘調査報告書』

東北福祉大学吉井研究室　2000　『宮城県蔵王町 兵衛館 第7次調査発掘調査報告書』

東北福祉大学吉井研究室　2001　『宮城県蔵王町 兵衛館 第8次調査発掘調査報告書』

中井さやか　1992　「近世の漆椀について」『江戸の食文化』pp.180－204

仲田茂司　1992「東国中世の漆器」『考古学研究』46－1　pp.72－90

羽柴直人　1997「岩手県平泉町における近世掘立柱民家について　泉屋遺跡、志羅山遺跡の事例を中心に」『紀要』pp.41－60

福島県考古学会　2000『東北地方南部における中近世集落の諸問題－掘立柱建物跡を中心として－』

藤澤良祐　2002「瀬戸・美濃大窯編年の再検討」『研究紀要』10 pp.53－175　(財)瀬戸市埋蔵文化財センター

古川市教育委員会　2003『筆塚遺跡』古川市文化財調査報告書第34集

古川市教育委員会　2004『権現山遺跡』古川市文化財調査報告書第36集

北陸中世考古学研究会　2005『中世北陸の茶道具』

宮城県教育委員会　1980「(7)大橋遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告Ⅳ』pp.289－362　宮城県文化財調査報告書第71集

宮城県教育委員会　1983『宮前遺跡』宮城県文化財調査報告書第96集

宮城県教育委員会　1985『今熊野遺跡』宮城県文化財調査報告書第104集

宮城県教育委員会　1989『三十三間堂遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第131集

宮城県教育委員会　1990『寂光寺ほか』宮城県文化財調査報告書第135集

宮城県教育委員会　1991『合戦原遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第140集

宮城県教育委員会　1992『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第146集

宮城県教育委員会　1994『下草古城跡ほか』宮城県文化財調査報告書第160集

宮城県教育委員会　1996『一本杉窯跡群』宮城県教育委員会第172集

宮城県教育委員会　1997『山王遺跡Ⅴ』宮城県文化財調査報告書第174集

宮城県教育委員会　1998a『山王遺跡町地区の調査』宮城県文化財調査報告書第175集

宮城県教育委員会　1998b『一本柳遺跡Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第178集

宮城県教育委員会　2001『一本柳遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第185集

宮城県教育委員会　2002『名生館遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第188集

宮城県教育委員会　2003a『中野高柳遺跡Ⅰ』宮城県文化財調査報告書第194集

宮城県教育委員会　2003b『壇の越遺跡ほか』宮城県文化財調査報告書第195集

宮城県教育委員会　2004a『中野高柳遺跡Ⅱ』宮城県文化財調査報告書第197集

宮城県教育委員会　2004b『山王遺跡伊勢地区の調査』宮城県文化財調査報告書第198集

宮城県教育委員会　2005『中野高柳遺跡Ⅲ』宮城県文化財調査報告書第201集

報告書抄録

ふりがな	くるまじぞういせき・かじやしきいせきほか
書名	車地蔵遺跡・鍛冶屋敷遺跡ほか
副書名	
巻次	
シリーズ名	蔵王町文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	村上裕次
編集機関	蔵王町教育委員会社会教育課
所在地	〒989－0892　宮城県刈田郡蔵王町大字円田字西浦北10　TEL0224－33－2211
発行年月日	平成18年（2006年）3月20日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 （世界測地系）	東経 （世界測地系）	調査期間	調査面積	調査原因
くるまじぞういせき 車地蔵遺跡	みやぎけんかったぐん 宮城県刈田郡 ざおうまちこわらさき 蔵王町小村崎 あざくるまじぞう 字車地蔵・ みのわ 三の輪	43010	05198	38度7分41秒	140度41分50秒	20050509 ～ 20050526 20051017 ～ 20051121	2500㎡	ほ場整備事業に伴う事前調査
かじやしきいせき 鍛冶屋敷遺跡	あざかじやしき 字鍛冶屋敷		05144	38度7分33秒	140度41分49秒	20050509 ～ 20050706	4700㎡	ほ場整備事業に伴う事前調査
はらいせき 原遺跡	あざはらひがし 字原東		05111	38度7分43秒	140度41分40秒	20051017 ～ 20051125	1400㎡	ほ場整備事業に伴う事前調査
かみはのきさわいせき 上葉の木沢遺跡	あざかみはのきさわ 字上葉の木沢		05143	38度7分23秒	140度41分53秒	20050706 ～ 20050720	1700㎡	ほ場整備事業に伴う事前調査
なかはのきさわいせき 中葉の木沢遺跡	あざなかはのきさわ 字中葉の木沢		05144	38度7分17秒	140度41分54秒	20050713 ～ 20050720	650㎡	ほ場整備事業に伴う事前調査
いそがさかいせき 磯ヶ坂遺跡	あざいそがさか 字磯ヶ坂		05189	38度8分04秒	140度41分22秒	20051123 ～ 20051202	1165㎡	ほ場整備事業に伴う確認調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
車地蔵遺跡	集落跡	古代・中世・近世	掘立柱建物跡・水場遺構・溝跡・土壙・小溝状遺構	土師器・須恵器・中国産磁器・瀬戸美濃産陶器・漆器（椀・盆）・木製品（皿・こね鉢・下駄など）・石製品（人面形石製品・温石・茶臼など）・銅銭	丘陵裾部で古代～近世の建物跡を検出した。近世前半では、溝と水場遺構で構成された有力者層の屋敷地の一部を検出した。
鍛冶屋敷遺跡	集落跡	古代・中世・近世	掘立柱建物跡・掘立柱列・水場遺構・溝跡・土壙	瀬戸美濃産陶器・肥前陶器・木製品・石製品（茶臼など）・銅銭	丘陵末端部で、近世の屋敷跡を検出した。
原遺跡	集落跡	縄文・弥生・古代・近世	土壙	縄文土器・弥生土器・土師器・磁器	湿地との境の丘陵縁辺部で、数基ごとに並んだ土壙を検出した。
上葉の木沢遺跡	集落跡	縄文・弥生・古代・近世	溝跡・土壙	縄文土器・土師器・陶器	縄文時代と考えられる陥し穴と、土師器が出土した土壙を検出した。
中葉の木沢遺跡	集落跡	縄文・古代	溝跡・土壙		
磯ヶ坂遺跡	集落跡	縄文・古代	溝跡・土壙	縄文土器・土師器	